

川柳塔

平成二十九年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇七九号



日川協加盟

No.1079

四月号

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 **湯川胃腸病院**



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

湯来しあわせ観音

小島 蘭 幸

広島奥座敷、湯来温泉の近くに湯来しあわせ観音があります。ここには大小合わせて100基近くの句碑が建立されています。かつての所有者で広島川柳会の会員だった野村弘之氏が、近くの河原で石を採取しては自らの手でコツコツと彫られた句碑も多数あります。作品は、広島川柳会の先達を中心に選ばれています。

三味線と琴のちがいが世にもあり

幽香里

森脇幽香里氏は、私の川柳の師山内静水の川柳の先生で、静水の雅号の名付親でもあります。原爆句集『きのこ雲』を編集、広島川柳会から発行しています。その後、夫君の馬場木公氏の赴任先の海外で長い間生活されています。帰国後しあわせ観音に句碑を建立されました。

すしになる一等米の男ぶり

蓮生

熊谷蓮生氏は、私が初めて川柳大会に出席した折、優しく声をかけて下さいました。選評もとても

優しかったです。

ご先祖はよくぞのこしたうまい酒 沼畔

菅生沼畔氏は、東広島で酒蔵会社を経営されてきました。第7回西条川柳大会に、川上三太郎先生を講師としてお招きされています。

一生を主役で通す我がドラマ 伯峯

石原伯峯氏は、私が川柳を始めた時から、川柳たけはらの近詠の鑑賞を担当、多くの柳人を指導されました。東広島市の西品寺に句碑を建立されています。

年老いた松あり風が吹けば泣く 木公

あくせくと暮しどの場も絵にならず 広文

この辺で雨から雪になる峠 愁洞

野村弘之氏が彫られた句碑は、小さくて字の線も細く、彫りも浅いのですが長い間、風雪に耐えて耐えてとてもいい味が出ていました。実は所有者が変わって10年以上経過していますので、先日ドライブを兼ねて一人で行って来たのです。句碑のお山は想像以上に美しくなっていました。そして何よりも広島県の先達の句碑に会えて、その人柄を偲ぶことが出来たことを喜びました。

座右の句

栄光の日も一日は二十四時

(薫風)

私の句

息拔きに始めた趣味で息拔けず

山下凱柳

川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「三郷町福昌寺校」

■巻頭言 湯来しあわせ観音

私の川柳観

小島 蘭 幸 …… (1)

川柳塔(同人吟)

藤村 亜成 …… (2)

川柳塔の川柳讃歌¹⁸

小島 蘭 幸 選 …… (4)

自選集

木津川 計 …… (45)

句集の森

高瀬 霜 石 …… (48)

■ショートエッセイ 霜ネタ日記

温故知新

高瀬 霜 石 …… (49)

水煙抄

西出楓 楽 選 …… (49)

新川柳鑑賞⁶²

麻生 路 郎 …… (50)

橘高薫風句抄

麻生 路 郎 …… (70)

俳風柳多留一二篇研究 46

吉村 侑 久 代 …… (71)

英語 de Senryu⁶⁴

吉村 侑 久 代 …… (72)

■エッセイ 三窓宛薫風葉書

吉村 侑 久 代 …… (74)

三窓宛薫風葉書

栗原 道 夫 …… (75)

私の川柳観

藤村 亜成

亡父高鷲亜鈍の勧めで私が川柳に手を染めたのは、昭和三十六年に父が発表した「詩川柳考」から十年を経っていた。そのころ既に父は完全失明していたので、父の執筆活動の補助をしていたこともあり、次第に影響され、父の持論に興味を持ち始めた。それで「詩川柳考」に目を通すことになるが難解で文学・哲学の専門用語が多く、浅学の知識では到底理解し難くて暫く遠ざかってしまった。

その後父から、「詩川柳考」は不備があり機会があれば追補し再版したいと言っていたのを思い出し、平成元年父の没後、さぞ心残りだったに違いないと読み返してみた。「詩川柳考」の構成は巻頭に路郎の「酒とろりとろり大空のころかも」「君見たまへ蒔萩草が伸びている」の二句を挙げ、詩川柳考を展開する基底となった句とある。そして三人の個性(本質)の違う作家論から始まり詩的精神・散文精神について現代川柳の方向性を独自の理

愛染帖

新家完司選 (78)

檸檬抄「青」

北野哲男・安土理恵共選 (82)

せんりゆう飛行船 ⑦⑥

新家完司 (85)

一路集「曲がり角」

大内朝子選 (86)

「世話話」

成田雨奇選 (87)

初歩教室「掴む」

居谷真理子 (88)

川柳塔鑑賞

水野黒兎 (90)

水煙抄鑑賞

山田葉子 (92)

第23回川柳塔まつり案内

大西泰世 (93)

インスピレーション・ナビ 印象吟

大西泰世 (94)

三月本社句会

大西泰世 (96)

句会燦燦

岩崎真里子 (100)

各地柳壇(佳句地十選/村上玄也・山岡富美子)

岩崎真里子 (101)

四月各地句会案内

岩崎真里子 (114)

柳界展望

岩崎真里子 (116)

■編集後記(ひとこと/真島久美子)

朱夏・勝弘 (118)

座右の句

生きるとは悲喜こもごもの万華鏡

(楓 楽)

私の句

手のひらでやさしく運をつつみ込む 若 本 安 代

論により示そうとした。

晩年自論の延長として従来の川柳の三要素から現代川柳の三要素、愛・生・住を提唱しその構図について解説しているが、本人の辿り着いた結論として私は受け止めている。この実践句として句集「白黒記」を出し「白と黒乳に蠅なる天地かな」「愛故に生かされて活く身に光」等の句を遺している。

私は中でも愛(カオス宇宙)と生(ロマン生命)を観念(詩的精神)として捉えていることに共鳴し「愛」は真・善・美を包含する絶対的な神の愛として受け止める。従って住(リアル、存在)つまり現生活(散文精神)の中で自作においては先ず詩的観念を持つことを念頭に置き作句することを理想としている。対象が自身を取り巻く事物や環境の全てに、また自身の個性(本質)から発せられる思念や感情の根底に「愛」のない言葉、作品に価値を認めたくはない。表現方法として川柳の持つリズムや形式は大切だが、もっと大事なのは中身だと思う。故に私は「命ある句」、詩川柳が日々の生活から産まれることを願っている。



小島蘭幸選

橿原市 居谷真理子

真実が怖くてかけるサングラス

因習の村を包んでいる時雨

白を消す黒 黒を消す白

ため息をいっぱい吐いて濁らせる

すりガラスとてもずるくてやさしくて

独酌も良し片恋もまた良かる

大阪市 古今堂 蕉子

私を潤す亡父のひとしずく

自嘲癖 自分探しをしなければ

聞き耳を立てる聞こえにくい耳で

声挙げる時を逸した悔い一つ

学級閉鎖 孫が朝からやってくる

不器用な夫に介護頼めない

和歌山市 木本朱夏

浅春のほろりこぼれる砂糖菓子

ははの忌の水仙のしろ梅の白

巻き戻すオルゴールからははの声

ヒヨドリも目白も集う寒桜

佗助のうす紅ほどの我が愁い

立春の水はきりりと墓洗う

松原市 森松まつお

熱燗がはずむ真冬の冷やつこ

晩酌はやめて寝酒にした術後

どれくらいあるのか僕の持ち時間

桜咲く新横綱の土俵入り

一人では淋しい燃えろ豪栄道

お出掛けは控え目にする奇数月

倉吉市 牧野芳光

白アザミしばらく恋をしていない

よく見ろ水平線も曲がっている

何もない手の平何よりも強い

今日明日の都合聞かずに雪が降る

木枯しにふと母の声鉄の音

記念写真遺影ばかりになっていく

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

道に迷つて坂道はなお辛い
同罪と言われる歎びにひたる

ふる里の山に祈りが深くなる
私が泣けば仏間の灯がゆらぐ
西風にふわりと乗つて逝つた夫

試行錯誤薔薇はアーチに咲かせます

篠山市 酒井 真由

ストレッチ生き抜くためと思いつつ

旅は束の間この身を焦がす茜雲

堅い約束しなかったのがミスでした

和歌山市 古久保 和子

忘れたいものが溜まっている枕

背中から雪崩が起きる長電話

猫と空き家向こう三軒両隣

いい顔になったおばあちゃんになった

冬眠の炬燵の上はペンと菓子

街角にマスクをつけた雪女

松江市 石橋 芳山

終着駅ガラスの町に降ろされる

グラデーション重なり合つて梅さくら

振り向けば今までの人いないじゃん

そんなことまだ言っている焼きうどん

丸洗いしよう汚れた日曜日

することはなくて月さえ出てこない

東かがわ市 川崎 ひかり

座る位置はつきり解る通夜の席

バージンロードバトンタッチの扉開く

ドアノブに亡夫の手垢がまだ消えず

飄々と生き飄々と逝き給う (遠山可佳先生)

帽子屋に初日がさしている平和

居酒屋の灯もコンビニの灯も温い

長らえて濁世は淋し人を恋う

独り酌むボトルの青き春の雪

硬骨の友も老いたり釣り日和

大洲市 中居 善信

書き残すほどの生きざましていない

座りすぎてダルマの足は退化した

水たまり飛べるとふんだのは誤算

忘れてる事になっている古い疵

臆病でまだ覗かない甕のなか

温度差を思う役所の机上論

香芝市 大内 朝子

春色にこころの染まるとき女

常連と飲む盃の丸裸

子供等の世話にはならぬ四股を踏む

都合よく老人力を發揮する

余裕あるうちに老後を考える

梅林でふたりの頃を懐かしむ

鳥取市 森山盛桜

景色には一役買っている枯れ木
丸木橋ノスタルジアをまだ残す
クラゲにも有ったサクセスストーリー
ロケ班が居て賑やかな温泉地
人生を見ているようなカーリング
ふるさと思ふとデジャビユ繰り返す

八王子市 川名洋子

泣いた顔見せたくない母だもの
あと少しこの幸せの穴に居る
二三輪あわてん坊の梅開く
日向ほこ小さいしこりが溶けていく
白線を引き私のテリトリ
嬉しくて悲しくて会う友がいる

富田林市 中井アキ

まうしろで匙加減する嫁の愛
順調に老いて来たのにまだ呆けぬ
すっぴんをさらせばきつと愛される
男の手料理簡単そうで凝っている
友達の間隙に居る無口

恥さらすことも人生だと余生

神戸市 細川花門

川柳を学ぶ年始のころざし
一句添え差出人のない賀状
老妻に魔法をかけるヘアーウィグ

合掌の斯くも華奢なる白い指
福笹を担ぎたこやき屋を覗く
今日だけはやまとなでしこ二十歳の娘

寝屋川市 籠島恵子

みんないるけど遊んでくれないからひとり
雪だるまが居なくなつたと孫が泣く
パパとママは猫の家になっている
五歳の孫猫を子分にして遊ぶ
まぼろしがおぼろおぼろになりやがて
寒椿自意識過剰だと思ふ

尼崎市 藤井宏造

美少女のおもかげ探すクラス会
溜め息もついでに入れるのし袋
触診で病名あてるのは名医
帰り道まだ落ちている一円貨
コーヒーの苦みの中でゆれている
荒れた手を恥ずかしがっていた亡母

桜井市 安土理恵

新聞紙に限るやきいものぬくぬく
現実逃避あの角曲がつてしまおうか
立ち位置をしっかりと固めよつこらしょ
風評の矢面に立ち子を守る
風の子になりたい空と遊びたい
身代わりに泣いてくれるか夕茜

藤井寺市 鈴木 いさお

猫二匹妻のシャム猫僕の三毛

子には父孫には爺々の顔になる

くしゃみ三発今日一日の始まりだ

飲びの歌高らかに花の宴

足りなくて困る有り過ぎて困る

笑え笑えその内運が向いて来る

和歌山市 武本 碧

信号の黄色きつちり守ります

本物の介護は胸に響くもの

若い日に変身したい試着室

ばたんきゅう眠れた頃の子育て記

老い二人イヌ派ネコ派でもめていく

病む友へ心の扉開けにいく

弘前市 福士 慕情

ドロップ缶戦中派にはほろ苦い

磨かれて鮮度を落すのは林檎

マイナナー必要とせぬ黄泉の国

沁みる歯が一本老いを加速する

悪友と認め合ってる銚子猪口

病氣らしい病氣もせずに向かう喜寿

岡山県 紫 しめの

CTの影におびえる再検査

溜めてきた紫煙が漏れた影がある

終活をせよと身体が言うている

わたくしを構成してるものが消え

病院へ行こうおシャレをして行こう

本腰を入れ直そうか誕生日

松山市 宮尾 みのり

高度成長隅で支えた自負だった

仕来りも御破算にして家族葬

自宅介護きれいな事では済まされぬ

サブリメントいっぱい飲んで逝きはった

こんな時柳誌が杖になってくれ

リセットボタン押すために行く美容室

神戸市 山口 美穂

寄せ鍋にふと亡父のこと亡母のこと

おいしそうに見える蜜柑を先に食べ

今日の約束果たしよろこぶ歩数計

鉛筆折れた わたしを嘲笑うように

夢が夢で終ってもいい悔いはない

紅梅賞でるしあわせ小雪舞う中に

河内長野市 木見谷 孝代

マイチヨコの方が高くてあたり前

国産の本物ですよ自家野菜

白菜漬け手間ひまかけて喜ばれ

歳の数三日に分けて食べる豆

妖精のようなくらげに癒される

上と下違うテレビを見て平和

京都市 清水英旺

よくもまあ生き長らえて傘寿とは
遠のいた記憶がふいにブーメラン
生かされてもつたいないから生きてやる
野良猫があいさつに来たご飯どき
横綱はやっぱ日本人じゃなきゃ

京都市 藤井文代

パズル解く頭に余裕くれた雨
めでたいのか年寄りなのか喜寿です
食べてからやけに気になる賞味期限
触れるだけで世界とつないでるスマホ
ビリケンさん触っただけで大阪弁

京都市 榎本宏子

ボンコツになるプロセスにあるドラマ
高層ビル隅にひっそり盛り塩が
二度の勤めドライブフラワー窓際に
明るくて美人でタフで 人の妻
托鉢のあかぎれ足に布施はずむ

京都市 三宅満子

もう少し生きて五輪をきつと見る
水ぬるみ花粉直撃つらい春
年金減補正予算を組む家計
にぎやかな声が気になる子の同居
追いかけた夢あきらめて降りる駅

長岡京市 山田葉子

何度でも出発点に立つ勇氣
次々とパーツの傷む歳になる
春を待つ心伝えるピアノ弾く
傾いてる時は忠告聞こえない
サクラサク明日へ羽搏くベル響く

大阪府 池上清治

バレンタインチョコ選びには一苦労
善人も悪人もない田舎風呂
開くまで楽しい中味とどけ物
開く顔夢見て包む贈り物
君子蘭届けてくれた米寿の日

大阪府 井丸昌紀

豆をまくしつかりせえと呟いて
北北西向いて私も日本人
トランプのネタはニュースへ川柳へ
美しい雪国見るだけにしよう
かと言ってオバマ良かったとも言えず

大阪府 岩崎玲子

装うと主婦から少し解放され
老い二人趣味三昧でケセラセラ
手書き文ハガキ切手も楽しんで
余生には力を少し抜いてみる
ありがとうたくさん使っいいお顔

大阪市 内田 志津子

ペランダに集うすずめに亡母みる
ライバルに真実の拍手を送る
バスツアー傘寿米寿がビール飲む
真実を語りパッシングを受ける
敬老パス欲しくもあり欲しくもなく

大阪市 宇都 満知子

カルタ取り解らぬように負けてやる
産まれ育った家壊される ああ時よ
甘党の店には付き合わぬ亭主
歳と共に長く居座っている風邪
おにぎりふたつ句会の日だけコンビニで

大阪市 江島谷 勝 弘

母いつも分厚い辞書を繰っていた
十年目好きな手袋穴が空く
痩せ我慢あべのハルカスまだ行かず
過疎地こそ残してほしいのが線路
アホなこと言える友居て癒される

大阪市 榎 本 日の出

長風呂が好きで毎日覗かれる
薬づけいつまで続くこの休
病院とスーパ―あれば大丈夫
再婚が出来ると夢のおつけあり
蔵王山お尻で滑り若かった

大阪市 榎 本 舞 夢

二ヶ月は豆まき私誕生日
サプライズ楽しみにして仕舞風呂
好天気デイトは着物と友と決め
バレンタイン世界のチョコがやって来る
早早と父さんチョコを貰って

大阪市 大川 桃花

秘密財産もう作れない記憶力
スキャンダル商売にして生きのびる
政治と金つくづく思う人の欲
荒波と競い合ってる津軽三味
横綱の涙にホロリ貰い泣き

大阪市 大 治 重 信

遠き日のキッスは赤く熱かった
今さらと広島長崎真珠湾
老夫婦愚痴言い合っていつも晴れ
飲み友の来ない酒場の初時雨
賑わいて何か足りない同窓会

大阪市 奥 村 五 月

姑の留守を見届け鬼は外
エプロンの姿で母は誕生日
飲酒事故地位も免許も消えました
断捨離も捨てる時には金かかる
肉ジャガをシェフの息子にほめられる

大阪市 笠嶋 惠美

年金は文句の言わぬスポンサー
懸命に生きましたねとシワ笑う
八十一老いと握手の誕生日
八十一心に花が咲いてます
八十一祈り一層深くして

大阪市 川端 一步

春ですねちよつとおしゃれをしませんか
遠くから見ても母さんだと分かる
今ごろの大台言えば九十よ
残る時間せめて相棒意のままに
建国日ボクは漱石草枕

大阪市 熊代 菜月

目をつぶる友は何時でもそこに居る
生かされて生きて八十路も半ば過ぎ
戻れない過去は未練と言うばかり
デイに行くお話だけの友が出来
ぶぶ漬けがおもてなしかも三ヶ日

大阪市 小谷 集一

優しさが欲しくて弱音吐いてみる
深読みをすると出口を見失う
生き様にこだわる遺伝子の頑固
老い楽し預金減ったが友が増え
生きている証し毎日ハプニング

大阪市 近藤 正

トランプとあたふた会ってババを引く
基地造り負担軽減とは言えず
リスベクト野党共闘カギ握る
春場所に待っていました稀勢の里
福祉瘦せ軍事實ばかり肥え太る

大阪市 坂 裕之

勝ち負けにこだわらずぎくしゃくと
出来る日と駄目な日どこがどう違う
もやもやが吹っ飛び今日はランニング
良い悪い決めるトップのお人柄
やがて来る右も左もない時代

大阪市 田浦 實

西鶴の墓碑にも逢える街散歩
お年です何と冷たい言の葉よ
憲法では弥陀の代りは出来ません
タンポポのわた毛を追って一千歩
何事も程程がよし八十路です

大阪市 谷口 義

包んだから解けたと思います
知らんぷりしている内に治った病氣
ユーモアたっぷり本音も入力
何や彼や言うても姉の世話になり
どこかで見た顔だと思ったら夫

大阪市 津村 志華子

卒寿とて桜が咲くと浮かれます
ローカルの宿ほっこりとのっぺ汁
穏やかに一歩一歩にある余生
身の丈のくらしで満ちる大根煮
素直とは心の中の身だしなみ

大阪市 津守 なぎさ

久し振り句会参加に血が踊る
立春の大雪情報見る炬燵
芽吹くものの皆美しい春の風
婚活に必死の親がいる不安
錠剤はバナナと共に流し込む

大阪市 寺井 弘子

里の友大地を踏んでくる便り
会者定離悠悠自適雪だるま
すき間風ペットでカバーする茶の間
朝市のお国訛も旅愁そえ
お茶断ちの祈りさくらの便りまつ

大阪市 寺本 実

断層に残る地球の疲労感
ポケットに常に用意の捨て台詞
閻魔から招待状がまだ来ない
抱き枕代わりになれる人が欲し
並んでも美人が受けるインタビュー

大阪市 栃尾 奏子

さあ恋に落ちよ春一番が吹く
自由人次女は翼を持つている
末の子は難なく皆に愛される
恋をした長女ミステリアスになる
好きですと次女は単刀直入に

大阪市 中井 萌

介護だと心得妻と手を繋ぐ
ノーガードきつねうどんを啜る仲
自己流の作法で生きる綱渡り
喧嘩さえしない二人でマイペース
御機嫌は如何でしょうか今朝の妻

大阪市 原田 すみ子

要努力女らしさが枯れてゆく
大寒に最短距離で帰途につく
趣味話みんな前しか見ていない
深呼吸吸位じゃときめきは止まず
早朝の君もがんばれすれ違う

大阪市 平賀 国和

古稀となり父の享年越え生きる
片隅でしぶとく生きている私
クラス会昔に戻り生き返る
大阪城中国人と梅愛でる
おばあちゃんの噂話で視野広げ

大阪市 藤田武人

玄関に並ぶブーツとハイヒール
指折ってボケ防止やと主張する
明暗を決める僅かなタイミン
グ
説法を聞き妬みなど置いてくる
報道の活字に見えぬ優しい字

大阪市 藤原千恵子

我が家にも洩れる事なく詐欺が来た
疲れかな急なめまいの震度四
日数っていいネ何でも薄れゆく
夕方のドラマのために独楽ねずみ
花粉症しばらく動き止まります

大阪市 升成好

年初の誓いもう手直しをする二月
好奇心絶やさずアンチエイジング
あだ花をひとつ咲かせているゆとり
頃合いを読みとり父の咳払い
虎の顔私が描くと猫になる

大阪市 山本加お里

喜寿まぢかまだ好奇心とまらない
糊代を多めにとって勝負する
ひざボンと叩きとうとう思いだす
空き家にも見事に咲いた梅の花
折りにふれ良いことあると友が言う

大阪市 吉内タカ子

無理せずに視野を広める冬帽子
この寒気めげず臘梅はっこりと
デイサービス忘れ合うのに通じ合う
どか雪で心配したよ受験生
真正直すきな川柳捨てられぬ

大阪市 若本安代

ひとりひとり送り募守り私だけ
なぐさめの言葉が出ずに手を握る
ふと触れた指には恋の導火線
十指まだ動く幸せ毛糸編む
見る位置をずらし優しくなる心

堺市 奥時雄

外観はもう変らない古稀傘寿
声高になつてのど飴離せない
眼鏡屋へ行くたび視力合っていない
義歯怖く久しくするめ食べてない
爪ほどに歯も生えてくれたなら

堺市 柿花和夫

口下手のふりして風を読んでいる
残り福同士だったね妻と僕
後期高齢これから主役演じます
カタカナ語に新語辞典が追い付かぬ
口止めをされるとあばれ出す内緒

堺市 加島 由一

テレビ体操なんかそれらしく動く
朝風呂で五木ひろしになつてい
凶器だと言われた身体から遠い
鍛え直してオリンピックに出てみたい
オリンピックの話息子を笑わせる

堺市 源田 八千代

如月の庭 水仙梅花香り立つ
鬼やらい小袋入りの豆を撒く
ダイエットの娘やばいやばいと菓子食べる
先輩を誘い安全気を遣う
心許なく後輩の助っ人頼む

堺市 齋藤 さくら

年上の頑張り勇氣貫つて
どっちにも取れる返事をしてしま
一つ買いたんと景品付いてくる
意地を張る年で無いのよ座ります
いそいそと女子会少し若返る

堺市 坂上 淳司

師の恩を歌った式は遠い春
教職が尊敬されたのは昔
虐待死親を選べぬ子の哀れ
まだ耳にB29の飛行音
県民を無視し辺野古に槌の音

堺市 澤井 敏治

車社会ほどどの距離遠くなる
ほどほどの幸せそれも煩惱か
白い雲だけ描いたと孫の知恵
許し乞うバラ千本のサブライズ
幻の恋消去するシュレツダー

堺市 遠山 唯教

丁寧にいまきた道をかえりやんせ
終日を無事でほとけに近くなる
構築は日が要りつぶすのは瞬時
踏みしめた雪の景色に目を洗う
八十になつてもらつたお年玉

堺市 内藤 憲彦

頑固者たまに正しいから困る
コンマ以下の利息だつて飽買える
記念日がまた増えました三世代
ありがとうごめんなさいのいい家族
吊るし柿古里ふつと思ひ出す

堺市 村上 玄也

亡父の歳越えても父を越えられず
高齢車事故殊更取り上げるニュース
うっかりを通り越して忘れた癖
頑張つてる人に頑張れとは酷だ
酒の力借りねば動き出さぬ脳

堺市 矢倉五月

茨木市 藤井正雄

音のない群衆といふ本の森
耳鳴りとページ繰る音だけ深夜
入学の孫と一緒に買うスマホ
クリオネの小さな舞見る流水船
自衛隊に感謝しながら雪まつり

池田市 栗田久子

貝塚市 石田ひろ子

ほのほのと心光の春の中
一月わたし八十二歳という齢に
寒い日は名のある地酒口にする
年の差を越えて話があう不思議
善人と信じておこう背が丸い

和泉市 横山捷也

河内長野市 大島ともこ

お仕事という切り札で義理を欠く
補聴器をはずし聞かない事にする
野望抱いた頃もあったか古日記
定年を赤提灯に知らせない
叱る人無いふるさとが遠くなる

茨木市 島田誠一

河内長野市 梶原弘光

悠然と生簀で鯛が終を待つ
熱燗にしよう今宵は冷えそうだ
オレオレが情の欠片をまだ狙う
熟成か腐敗か老いの軽い鬱
トランプのつぶやき世界震わせる

球根の芽が出て母と子の会話
国宝の仏切手で知っている
通勤車息子他人の顔で乗る
出稼ぎに北斗輝く宿舎の灯
午後の雨義理欠かせない重い靴
梅だより動ける内と靴弾む
当たり前のように食後の冬いちご
不器用な父のジョークはよく響く
川柳のお蔭この世にある未練
どじだけど才色兼備目差して
淡泊な暮らしに恋のサプライズ
ハンカチに折り目正しい暮らし見る
膨大なデータ頭で錆びている
いつもと同じ朝を迎えた安堵感
すり抜けた幸せ探す長い旅
天気予報どのチャンネルもみないっしょ
100歳を目指して日日のストレッチ
妖精より妖怪に孫ハマッてる
先つちよまでくるくる巡る酒2合
大輪を早く咲かせた人の悔い

河内長野市 黒岩 靖博
古稀すぎて頭の巡り鈍くなる

古稀すぎて日時が急に速くなる
年金で余生を励む共白髪
青畳かえて久しい春の風
丁寧な言葉に惑い臍を嘔む

河内長野市 谷 久美子

本当を見抜いた妻の千里眼
助走して勢い出した不整脈
天の川織り姫様は幾つだろ
はいはいの頃に芽生える好奇心
頼り合い寄り添いながらこれからも

河内長野市 辻村 ヒロ

コンビニへ散歩の顔でワンカップ
あちらでは待っている人多くなり
ポリープと腫瘍漢字に恐怖あり
いざの時いつも娘に付き添われ
退院日庭の水仙お出迎え

河内長野市 藤塚 克三

取り柄はないがいざという時山椒の実
自己流を孫に書き順直される
習い事他人気にせず鈍行で
タクシーで我が家の道が伝わらぬ
検査良し何はともあれ験直し

河内長野市 村上 直樹
顔パスの効いた昭和の万華鏡

真つ新な画布の眩しさ いざ傘寿
許すことできぬ自分が許せない
つい触れた喪服の妻の手の温さ
下剋上ついに孫からお年玉

河内長野市 山岡 富美子

AIで明日の風よどこへゆく
マイナンバーカードが重い豆の数
パソコンと蜜柑でわたくしの皆
年金の暮らしにフロリダは遙か
冬枯れに水遣り絵画展めぐる

河内長野市 山室 光弘

甘い匂いふつとかすめて春そこに
さあ大変小池にはまって都の自民
ひっそりと妻の妖精寒つばき
愛冷めてオーラもどこか行っちゃった
ガン告知胸しめつける寒い朝

岸和田市 岩佐 ダン吉

核ゼロの約束いつになりますか
ポケットに何でもあつたお母さん
約束は守る守ってほしいから
絵手紙の中は善人ばかりいる
劣勢になった生きいきしておこう

岸和田市 宮野みつ江

満面の笑顔は生きていく手段

胸にバラ気弱な鬼は身の内に

時々鬼の気ままに負けてやる

ヘラヘラ笑い強がり言うて泣いた鬼

整理下手ゴチャゴチャ楽に生きてます

岸和田市 雪本珠子

伝説の女性は何故か皆美人

傷心を癒してくれる一行詩

咳ひとつ夜の静寂に消えてゆく

何気ない会話で心開きだす

引出しの中で青春燥いでる

四條畷市 吉岡修

穏やかな顔で老人からむしる

新幹線とんぼ帰りをさす無粋

困るほどお誘いあるが金が無い

たいくつな人だが心癒される

票の恩忘れそっくり返ってる

吹田市 太田昭

最初はグー次は何かと聞く曾孫

ちち母を知らぬ孤独な冬帽子

白足袋を汚し千秋楽を跳ね

真実を話す鸚鵡を飼っている

一汁一菜に堪えて十キロ痩せました

吹田市 木下敏子

紅梅も精一杯に手を広げ

思いきり歩幅広げた朝の道

仏様に水仙供え春を待つ

母に似て辛抱強い土踏ます

指折って数え字余り弄ぶ

吹田市 須磨活恵

耐えること教えてくれる冬の梢

フライパン独りの春を料理する

春かすみ生命線をたしかめる

淋しいねひとりで食べるあんぼ柿

ありがとうイロハニホヘト あいうえお

吹田市 野下之男

言うた事すぐサインするしたたかさ

十五年それで遅咲き横綱は

桜島機嫌良ければうす煙

餌早く背中を鹿に小突かれる

一日をテレビと暮らす良し悪し

吹田市 山本希久子

春はそこまで勧進帳を読んでいる

凜として欲し松のみどりも日本語も

取りたてて書くこともなし昨日今日

負けた訳所詮は軍資金不足

会いたくて会いたくなくて揺れる葦

高石市 浅野 房子

悔しいな卵が五つ期限切れ

杖落とす誰かが拾ってくれますよ

水仙が咲いて机上にかざられる

なるようになって結果がこうなった

そのうちにノアの方舟来るかもね

高槻市 井上 照子

懸命に生きてその日を楽しもう

よちよちと神の御守護を受けている

度忘れか風邪の名前がでてこない

一枚のはがきに辞書を何度繰る

薬局の前で浮かんだ薬の名

高槻市 片山 かずお

大雪のニュースこたつの中で見る

折角のお声がかかりだ受けて立つ

寒いのは苦手二月は冬ごもり

ちゃんと名前を覚えて貰い好きになる

定時にメール交わし元気を知らせ合う

高槻市 島田 千鶴子

レモンティー孫は大人の顔で飲む

蠟梅に寄り添っている昼の月

一日中笑っていよう誕生日

天窓のゆるい陽射しに春を見た

朝シャンの香り残して娘は出掛け

高槻市 初代 正彦

騙された気分小文字の但し書き

寒風にめげず健気に生きてます

点滅の赤に海馬を試される

清貧に暮らした亡父の防寒具

次の一手読めずメディアの弱いペン

高槻市 杉本 義昭

銭の音貧しい耳によく聞こえ

トップの座右自惚れにある隙間風

自画像の髭は立派な髭に描く

負け込んでも負け込んでもファンです

男らしくスバツとタバコ止めなはれ

高槻市 富田 美義

控え目に生きて周りに花飾る

修飾語多く誠が伝わらぬ

三味線を弾けば婆の背シャンと伸び

終章を飾る笑顔を検索中

納豆を掴み後期を生き延びる

高槻市 富田 保子

咳を聞くたびに夫は弱くなり

余るほど欲しくはないがもう少し

過去形の自慢話は鼻で聞く

ときめきが血圧計に出てしまう

新しい校舎には無い七不思議

高槻市 原 洋 志

シャッターを下ろし無口になった街
磨かないガラスでちょうどいい暮らし
生きるためやつと覚えたいいかげん
泣かされたページにはさむ花しおり
薄味で残り時間を食べている

高槻市 松 岡 篤

故郷が同じで旨い酒になり
女子会が勝手に決めた人人事案
おはようのリズムで今日が決まりそう
上等の妻だ医者には縁がない
たこ焼きの爆買い減った戎橋

高槻市 安 田 忠 子

世界中の平和を願う鶏の声
とうとう来ました母生きた歳まで
露天風呂梅ほころびて春はそこ
一日のスタート開くお仏壇
傾いた気持を戻す一呼吸

富田林市 片 岡 智恵子

人類の三分の二は年下だ
言われた事憎み言った事すぐ忘れ
ダイエットに詳しい人なのにやせず
泣かないから皆迷い子と気付かない
踏まれる場所に咲いているタンポポよ

富田林市 関 よしみ

表より裏輝かせ今日を生く
過ちを恐れず進む唐辛子
路味噌を抜けて野心光らせる
塩漬の桜茶ほのか許し合う
雪面へ豪快に晴れわたり愛

富田林市 中 崎 深 雪

菜の花がにつこり笑う春立つ日
母さんのカサカサの手が美しい
寒風の中でもふくらんでいく芽
闘病は笑いで撃てとモノの本
痛む時食べれない時笑えない

富田林市 中 村 恵

悠悠と全てを包む父の空
遍路笠利那の風が吹き抜ける
自画像の目に私を語らせる
睨まれる訳をあれこれ考える
灯明が揺れてかすんでいく仏

富田林市 肥 山 一 文

これだけの薬飲んだらどれか効く
酒二合飲めばすぐ効きすぐ眠る
試みに国を任せた民の罪
役員も家に帰れば妻の部下
妻が逝きボチと元気に共に生き

富田林市 山野寿之

手をかけた分だけ育つ自家野菜
手に土を額に汗を冬ひと日
駅うどん戦士の顔で吸る朝
蕪蒸しはんりの味京の味
来年を孫に約束ランドセル

豊中市 池田純子

雪の日に産声あげて女の子
豊かとはこんなことかと菜粥の日
気が付けば亡父の頑固が移り住む
そつとしておいてほしいの冬眠中
ぐうたらな脳が喜ぶチョコレート

豊中市 藤井則彦

高齢車に枯れ葉マークはどうですか
傲慢な人間を追うスズメバチ
五度は読む添え書きのある年賀状
直角のお辞儀に透ける下心
勿体ないよと孫に言われてうろたえる

豊中市 松尾美智代

流れ去った月日ビデオで巻き戻す
思い出の中で迷子になる枯れ葉
涙流した恋も思い出ひとつの絵
酔うために飲むのに冴えてくるころ
神さまの使いか寒に咲くすみれ

豊中市 松村里江

その席で聞こえますかとやさしいの
脈々といのちつないで良い家系
泣いてはる傷癒えるまで知らんぷり
七キロもやせて指輪が抜けおちる
入院と決まり予定は総崩れ

豊中市 水野黒兎

継いで継いで老舗の守る古都の味
塔高く奈良の大路はシャンゼリゼ
八十歳の町医確かな聴診器
福島にさくらまた咲け桃実れ
冬眠の論吉発見春の服

寝屋川市 伊達郁夫

雪溶かす程のあなたの目が熱い
冬脱いで乙女の乳房丸くなる
譲られた席に甘えているお辞儀
横糸に愛を紡いだ母の知恵
ベランダに未熟な春が来て座る

寝屋川市 富山ルイ子

トランプのどうにもならぬ石頭
トランプに一喜一憂する日本
私でも役に立つことあるらしい
バレンタイン私に褒美買いに行く
右往左往寒暖の差が激しくて

寝屋川市 平松 かすみ

代筆の癖がまだまだ取れません

移転登記ご先祖さんも呼び出され

ミニハウスなのにこんなに証明書

五万三万大きい順に張る印紙

上下切り私用にするズボン

寝屋川市 森 茜

藁かこむ牡丹うらやむ冬もみじ

サスカイト博物館は静もれる

匂わせて豚まんバスを降りていく

難民へ差しのべる手とそむける目

幸せな彩に絵手紙つくしん坊

羽曳野市 安芸田 泰子

深海魚空の青さは知らぬまま

おふくろの味コンビニに攫われる

機嫌いい内にまとめておく話

苦勞など語らぬ母の深い皺

三日目のおでん温め一人膳

羽曳野市 宇都宮 ちづる

孫の撒く豆に笑顔の鬼の面

大口を開けて豪華な恵方巻

空き部屋に雛段飾り風通す

ご褒美チョコ義理といっしょに私にも

ホワイトデー目当てに孫がチョコくれる

羽曳野市 徳山 みつこ

糍句って二月の納戸動き出す

豆洗う国産の粒みな笑う

味噌作り友と息子とわたくしと

ハイタッチ今年もできた味噌作り

天下りの糸が巣くつて役所

羽曳野市 中川 ひろ介

大白鳥空抱くように飛んでゆく

鬼遣らい股間を猫が逃げてゆく

臘梅の花に雪解けガラス玉

河童伝説絶えた川筋菜花咲く

沈黙いまだ神を見た者はない

羽曳野市 永田 章司

トランプの書き込みひとつ株上下

落書きの消えた土堀に温さない

心の傷見えないけれど消えてない

金太郎飴じゃ伸びない新世紀

人気者ゴシップ種が後を追

羽曳野市 仲谷 真一

四十年通い続けて砂かぶり

このために一年かけてつみたて

事件ありひいきのお茶屋屋号変え

稀勢の里雲竜型が楽しみだ

両国に一度は行ってみたいもの

羽曳野市 藤原 大子

低下する体力口がしゃしゃり出る

五人と四人一人で変わる場の空気

機敏さをなくし一日早く過ぎ

寒さ耐え咲かせた花の色は澄み

サクサクと霜踏んだ日も語り草

羽曳野市 三好 専平

ファシストはみんなおんなじ顔になり

拝んでる人の上から声をかけ

アホというかわりにいまは大統領

もしかりにだったとしたらにしがみつく

九十を過ぎて忿怒の愛子さん

羽曳野市 吉村 久仁雄

さりげなく世辞をまぶして受けがいい

性善説紆余曲折の道ふれず

輝いた日々が誇りの向こう傷

あの日レモンは甘く酸っぱく喉とお

古い椅子すわると過去と明日が見え

東大阪市 佐々木 満作

免疫を高めるカラオケと笑い

結局はあなたの圧しに折れました

強面の父は情には脆かった

優先席そ知らぬ顔のスマホ族

ほどほどの幸で感謝の喜寿半ば

東大阪市 北村 賢子

春めいて見慣れぬ鳥もやって来る

朝焼けへ老いたる胸も膨らます

花まるへ翼生やして闊歩する

句作りとフラで認知を予防する

触れた指火照ったままの青い恋

枚方市 海老池 洋

国産横綱生まれてほんと国技館

アメリカ第一世界それほど甘くない

交通網ずたずたにして雪うふふ

通るたび撫ぜる天神さんの牛

人当たりにもざらざら派さらさら派

枚方市 小林 わこ

うなずいてあげることしかできません

切り取り線の上で震えが止まらない

知らず知らず緩むネジです気にかかる

締め切りのストレスいつもかかえこむ

歳相応言い切る医者之眼が赤い

枚方市 丹後屋 肇

新鮮な一句が肺を浄化する

町内旅行カラオケマイク奪い合う

熱燗が沁みる孤老のトンコ節

トンチンカン問答孫が匙投げる

オバチャンのおしやべり川柳味がする

枚方市 寺川弘一

藤井寺市 伊藤アヤ子

丁寧に楷書で書いた初日記

狭い我が家も松竹梅を植えてある

あみだくじごときで運が決められる

運命線に自問自答を繰り返す

人間は寂しいものと語り合う

枚方市 二宮山久

妻の留守なれぬ手つきの目玉焼

人生を楽しくさせるコップ酒

幸せは息子夫婦がいる隣

夫婦して出かける先は有馬の湯

作句する力まだある七十歳

枚方市 二宮紫鳳

自分色やっと思つけた古稀の春

水仙の香り届くや旅便り

悩み事しゃべり尽くして良く食べる

ストレスをリセットさせる露天風呂

今年こそ翼信じて翔んでみる

枚方市 藤村亜成

排他的保守主義自由主義破壊

国益という化物が喰う地球

男女 女 男どちらにも見えず

屍の穴から飛び立つ鳥になる

不幸に直面し美しくなってくる

園児等が笑顔でまいた福は内

寒い日も家族がいれば温かい

窓のぞき一步も家を出ない日も

一杯の甘酒飲んで今元氣

拍手の波に酔つて稀勢の里

藤井寺市 太田扶美代

余生楽しくちよつと纏れてみませんか

恋ごころ薄れて情緒不安定

茜空とてもきれいなさようなら

桃の花咲いたら着たい服がある

訳もなく北国行きに憧れる

藤井寺市 高田美代子

特上のウソを閻魔に四月馬鹿

八十余年無駄に生きたのかも知れぬ

足跡を残さぬ様に拭いておく

旨いのは豆の匂いのある豆腐

マイカップおいしいビール飲んで寝る

藤井寺市 田付絹枝

成人式豪華写真で内祝

小雪舞い恩恵受けし郷想う

凍てる朝合掌すれば背が伸びる

お説教素直に聴ける一周忌

ふくらんだ家計簿閉める二月です

藤井寺市 増井 ヨシ枝

とうとう来た切手貼らずに出すなんて

孫からの年玉ひ孫の写真集

お茶でもと言われてみても車椅子

いい天気水仙郷の甘い風

哲学の道一緒に歩いた人恋し

藤井寺市 吉田 喜代子

お出掛けにブランドバッグ重くなり

日本国技肩に重たい稀勢の里

造成地人影の無い住宅地

ラブミーテンダー眠れぬ夜の懐かしく

トランプ氏世界平和も考えて

藤井寺市 若松 雅枝

娘ら去って家内深閑隙間風

梅花祭パン屋はパンを焼いている

足弱になった自分を忘れてた

時々健康だった日を憶う

母の居ぬ母屋で父の一人膳

箕面市 大浦 初音

妻が留守たまに食べたい卵かけ

手の届くところへ放し遊ばせる

甘い言葉久しく聞いたことがない

やすやすと手に入れた金身につかぬ

人はみなおたがい様のおかげ様

箕面市 酒井 紀華

ふるさとの民話が消えるいろり端

けしゴムで軽い罪なら消せるはず

寝返りを打って正夢抱きしめる

昨日の夢思いだせないメガネふく

まよい道わたしを叱る寒椿

箕面市 出口 セツ子

計報増え祝い事減る老い淋し

行きつけの医院病氣と閉院と

化粧して平和謳歌の戦中派

ストレスは溜めず言いたいことを言う

お飾りの支部長周りに忙しい

箕面市 広島 巴子

郷愁を誘うきり絵の斜陽館

老いてなお凜と生きよと寒の月

世界中豆をまきたいこの時世

鍋囲む皆の笑顔でうまみ増す

寒風に雨戸閉め聞くハワイアン

八尾市 内海 幸生

水点下耐えた蕾が今開く

裸木に済まぬ毛布をまた重ね

毒舌に馴らされそうな怖い耳

ジャイアンも逃げ出しそうな大統領

コマーシャル信じた薬違法とか

八尾市 高杉千歩

忘れてた帽子に出合う寒椿
我が儘も許し合う卒寿カフエ
老い独り阿吽の呼吸で生きている
寒椿昨日の悔いを忘れさせ
百均よいとお顔馴みが増え

八尾市 寺川はじむ

いざ勘定になると先輩割れと言う
手を繋ぎ散歩躰きそうだから
元旦の財布論吉がよう跳ねる
少子化へアメモチ効かぬ子に育ち
トランプ風読めずおたおたする世界

八尾市 宮崎シマ子

子の世話にならぬ設計親は持つ
取るに足らぬ私へ近所優しい手
チョコレートか饅頭かもめる老夫婦
沈丁花遠い国から母が来る
百歳まで余裕を持つて夢もつて

八尾市 村上ミツ子

予報雪どうか降らないでと願う
イタイツサムイツで毎日が過ぎていく
寒さに負けてなにもかも後回し
ペランダのすみれ数えているいつも
孫受験凍った道は歩かない

八尾市 山根妙子

お年賀の切手シートは尾長鶏
日が替りまだ寝つかれず深夜便
きさらぎの冷たき指で雛飾る
掃除機に夕べの豆がからころと
ヨガの日に指体操で句が浮かぶ

大阪府 米澤俣子

寝起き先ず膝のご機嫌問う日課
死ぬまで女小綺麗なばあちゃんで
葉野菜の甘み出す霜降りぬ冬
入選の句は納得のスマートさ
ニコルさんの森にいますか青い鳥

神戸市 上田和宏

恍惚の初優勝だ稀勢の里
雪だるま目を描くために炭を買う
源は俺針の筵の無言劇
全身を妻に預けて生きている
結局は同じ仲間と同じ酒

神戸市 奥澤洋次郎

有るものを活かし余生の夢を織る
スキップで子供が帰る冬夕日
恥ひとつ置き居酒屋を出る寒夜
気がつけば大根の花そこに咲く
諍いのできる家族が側にいる

神戸市 富永恭子

息吐いてそつと片足上げてみる
嬉しさと寂しさ混ざるお氣遣い
脳トレに練習します恋ダンス
遅咲きの梅花麗し稀勢の里
春夏秋冬癒しと元氣くれたジム

神戸市 能勢利子

ありがとうと夕陽に叫ぶ嬉しい日
君の鈴鳴るまでしかとおもてなし
無言にはすぐに降参する私
考えてまたガラケーを買いました
携帯を持たない人と待合せ

神戸市 松井文香

すぐそこに来ている予感福の神
メッセージ添えれば光るプレゼント
大空へ羽繕い終えまっしぐら
フレッシュな自分作りにまだ夢中
たつぷりと愛した子にも反抗期

神戸市 山口光久

物差しで計られたくはないのです
割り切れぬ気持ち引き摺り靴を履く
ちぐはぐも笑いですます夫婦独楽
貧乏神に力を貸すと言われても
床柱の孫の手垢が堪らない

神戸市 山崎武彦

命継ぐドナーカードにサインする
診察券ポイント付けば凄かろう
病窓の夕陽を浴びて生き延びる
重湯から粥へしあわせ囁みしめる
全身に夕陽明日も大丈夫

明石市 梶谷和郎

君をみた時から止まぬ不整脈
風に負けぬ亡父の根っこは深かった
悲しい日の夕陽は落ちるのが早い
白黒テレビ夢中で見てた昭和っ子
ふつつつと発酵中の老いの夢

芦屋市 黒田能子

子育ては煩いながら楽しんで
お互いの価値を認めて丸く住む
ボンと背を押してもらおうと踏み出せる
まちがいなく老人ですよ言う鏡
チクチクとわたし洗脳されている

尼崎市 市坪武臣

叔父の夢叱られていることばかり
路地裏の茶店友との秘密基地
意地を張り優先席に座らない
答えにはならないけれどハイタッチ
「いつでも夢を」歌って閉じるクラス会

尼崎市 藤岡りこ

川西市 山口不動

春一番雑草の芽も愛らしい
手抜きした花壇にも春花が咲く
いつもの服 春はスカーフ変えてみる
いつまでも孫には五十と言っておく
双輪が元気で子らは健やかに

尼崎市 山田耕治

気象ニュースが古里は雪マーク
意外性買われて九回の代打
動かないでいま引き金を引くところ
考えが足りぬヒントはまだやれぬ
七回忌妻の花壇がやせていく

加西市 金川宣子

サクラサクメール待ってる祝儀袋
孫の絵に宇宙人似のじじとばば
合格の輝く君に会いに行く
いつまでも初々しさを迷わせる
雪化粧何もなかったことにする

川西市 大坪一徳

鬼十訓時代遅れの広告塔
親と子で鳶は鳶と笑い合う
運の良い雄鶏だけが良い思い
自分史に妻のダメ出し次々と
価値観が寄り添ってきて金婚に

百までも生きてみよかと妻が云う
正月はゴミ収集で始動する
まろやかでおっとり喋る声美人
如月や寒凜凜と良き響き
トランプがいくさの匂い撒き散らす

篠山市 北澤稠民

ときめきが健康長寿の答です
有るふりも無いふりもして世を渡る
生きたこと教えてくれる孫の笑み
土握り大地の声を掌から聴く
おでん屋は寂しがりやの顔ばかり

篠山市 酒井健二

三分で分かる訳ない処方箋
原発とカジノで美しい日本
街中にパチンコあつてまだカジノ
木漏れ日に中也を捲る春の風
ボランテア一灯照らす近未来

三田市 足立つな子

輝きはいまいる場所にきつとある
真つ新なお年賀届く新たな日
長男でまあるく治め後始末
親思う蟹と温泉娘のプラン
ふるさと納税うきうきさせる品選び

三田市 石原 歳子

欲しくても甘い物には我慢する
病院の手入れの出来たシクラメン
まだ飛ばぬ花粉気になるアレルギー
大阪へセーター買いに行くことに
寒くても二月の日差し春ですね

三田市 上垣 キヨミ

節分会神経痛が目覚めます
お見くじの凶に心を戒める
たおやかに母似の菩薩旅の寺
喜寿の坂苦勞の跡がいと嬉しい
大器晩成また長生きを強いられる

三田市 上田 ひとみ

びっくりもドキドキもしていたいから
お友だちシェアしています陽だまりも
ああなんて赤ちゃん無垢でいい匂い
君らしくそして自由にとんで行け
決めたのは私どんなにつらくても

三田市 尾崎 一子

春は菜の花黄色が春を告げに来る
立春の新酒まだかと待つ日和
節分と夫の命日鬼も酔う
異常寒波脳まで凍る思考力
待っていたよ合格の声おめでとう

三田市 北野 哲男

雪降って猫とごろごろ古い二人
何を析るか長いむにやむにや
場の空気読めと言われて深呼吸
利き腕の方から穴のあく軍手
愛国心総理と違うものを抱く

三田市 久保田 千代

老夫婦ごはんふつくら炊けている
傷癒えぬまんま心も寒いまま
疑問符の解けた青空歩き出す
風の記憶に折れていた傘の骨
ステージの隅で待ってる閉会の辞

三田市 多田 雅尚

コンビニは振込みだけで買ってもせず
注意書き読めば飲めない処方箋
朝ドラを寝間で見る癖ついて来た
原子炉にロボも入るの厭と言う
準高齢と名付け一億働かせ

三田市 谷口 修平

玉音が流れ平和の来た昭和
付き合っても人肌ほどが丁度よい
年金の元を取るまで死にません
人の目に触れて輝き出すダイヤ
電話終え妻が浮き浮きする疑惑

三田市 野口 晶子

目の鱗 落ちた満願日の朝日
 食べ終えた海鮮鍋に汐の影
 消えぬよう誉めて増やした善玉菌
 しつぱふる犬には犬の義理を持ち
 言い訳をせずに今度は神だのみ

三田市 福田 好文

長引けば親の介護もだるくなる
 砂丘の雪出稼ぎラクダ震えてる
 隕石は原発避けて落ちるはず
 無口でも聞く耳だけは立っている
 うぐいすが野山に春を告げに来る

三田市 堀 正和

春近しもう始まった北帰行
 砂風呂で中国人の仲間入り
 レガシーのとっても好きな金バッチ
 トレードに出され二度目の花咲かす
 志望校制服を見て決めました

三田市 村田 博

携帯は鳴らぬ万歩計に使う
 補助輪を外して走る子の笑顔
 大海原に若冲が出る鯨出る
 七草で胃癒す程に呑んでない
 雪積もり足跡居酒屋に続く

高砂市 松尾 柳右子

良い天気猫がねそべる裏の庭
 青天に幼児が遊ぶ三輪車
 近隣に住む娘に頼ってる
 手のしわを見つめ年月立ちました
 風呂掃除手ごわくなつた八十路過ぎ

宝塚市 田中 章子

豆撒きに内なる鬼は出て行かぬ
 いくつになっても人間出来てない
 自分が思うほど他人は気にしない
 そう母と唱歌をたんと歌ったね
 お母さんあなたのようになれますか

西宮市 秋元 てる

常夏の国の孫から「風邪引くな」
 涙にもいろいろな色があると老母
 捨てる氣を身についた欲が許さない
 老醜を救う襟元紅ほのか
 言い度い事言える歳になり言わず

西宮市 緒方 美津子

啓蟄やちよつと出かけるフランスへ
 後もどり出来ぬ笹舟もう河口
 凡人の耳に木魚のやさしかり
 娘がもがいてる少し待ってみる
 合格の鈴の音高く礼まいり

西宮市 亀岡哲子

新しい芽吹きを誘う寒の風
幸不幸越えて晩節緩やかに
受験子へ嫁のお供の神頼み
梅見ごろ屋台も出てる神頼み
終活へ衝動買いがまだ止まぬ

西脇市 七反田順子

幸せは再びやって来るものだ
輪の中に義理人情を据えておく
細く長く難なく生きる途中で
タンス預金論吉一枚入れている
新聞の一頁から事始め

西宮市 西口いわゑ

ムード作りがとても上手なロゼワイン
天と地の宴のように虹が立つ
山茶花の残りすくない散歩道
雪が舞う淡い思い出のせて
生きることに神におまかせしています

西宮市 福島弘子

一輪車余裕の笑顔孫小三
ハードルを下げたらゴール目の前だ
冬將軍今年も樹氷人を呼ぶ
幸せの青い地球に猫と居る
念入りのメモを忘れて特売日

姫路市 古川奮水

謹んで年賀御辞退した迎春
北は雪南早春兵庫県
捨て印を押すとページも呼吸する
人肌の爛良し美酒の香り飲む
体脂肪取れてズボンの丈直す

南あわじ市 萩原狸月

アパートに春を迎えたケースびな
ランドセル出番待つてる雪の下
三月が転勤族の子を泣かす
子等巣立ちいよいよ高い老化率
喧騒の四月がすんで五月病

奈良市 阿部紀子

トランプ氏何処へ行くのか民主主義
黄水仙一列並び匂い立ち
亡父の会社継いで創業七十年
入院は安静にして疲れはて
転ぶのは頭か足か検査中

奈良市 大久保眞澄

少しなら跳べる私も鶏も
呼び名変えても年寄りば年寄りさ
夕飯の指示する妻の置き手紙
月一度律義に届く請求書
用意したスピーチ日の目見ず終わる

奈良市 加門 萌子

日本の文化和洋とせわしない
成り行きをじっと見るしかない庶民
わたくしにライバルは無いほんとだよ
ぶり大根食の嗜好は合っている
まだ少し欲が有るからいい此の世

奈良市 辻内 げんえい

主人より主夫の仕事が多くなる
家族写真前を向かない孫五歳
孫世代手紙ハガキは死語となる
テロニュース慣れていくのが恐ろしい
トランプに希望失望見え隠れ

奈良市 米田 恭昌

優しさの涙の味を知るヒト科
野良猫が睨み返した石礫
口裏を合わせる友の芝居下手
窓 窓 窓どの暮らしにもあるドラマ
少しの還付金ほっこりさせてくれ

生駒市 飛 永 ふりこ

胃袋もほっこり憩う鍋の湯気
ピンゴでもすんなりいかぬのがゲーム
所作一つ遮きれないこともある
携帯が句会場まで騒ぎ立て
飲み放題やんや手拍子踊りましょ

香芝市 山下 純子

主治医待つベッドの友の薄化粧
タンス預金たまに確かめにんまりと
風をよむ天気予報士だった父
白むくがカメラに向かいピースする
恋破れ寒風なぜか心地よい

奈良県 安福 和夫

トランプさん直球ばかりじゃ打たれるよ
米国の舵取りもつと重いはず
排他主義内から崩れ見えてくる
暴れ馬取り巻き次第で駿馬にも
ボール探し付き合う林mamシ居る

奈良県 谷川 憲

草むらに栄華を偲ぶ銀山址
満員車スマホと喋る人ばかり
自分史は飾らなければ一ページ
数多の本意句の帯が競い合い
またひとり昭和のスターが召される

奈良県 渡辺 富子

春の讃歌ひびき列島ピンク色
多数決の波にトランプ乗って吠え
少しずつ等身大にする希望
歴史と旅そして演歌になるテレビ
ずれたまま笑い合ってる老いふたり

和歌山市 磯部義雄

人間の身勝手猫は許せない
まだ進化伸び代自覚する八十路
一品と一本増えた誕生日
子や孫が呉れる嬉しいお年玉
平成が終りに近い退位論

和歌山市 上田紀子

のし袋一足早く春を呼ぶ
若いねと褒めれば五歳若返る
無念無想未来の私に種を蒔く
荒波に揉まれた雑魚が見せる意地
手の内を読まれてからの大勝負

和歌山市 柏原夕胡

左手の癖を見抜いている右手
貫禄はあるが貧乏揺すりする
スタートの気持ちに戻る還暦後
鳩ポッポ平和ボケなら有り難い
ありがとう重ねて愛はまるくなる

和歌山市 喜田准一

田舎から届く嬉しい冬野菜
よく出来た男俺より先に逝く
トランプのひと声世界揺れ動く
区別するやりたい事とやれる事
繰り返す小言が困る狭い視野

紀の川市 北山絹子

国上げて期待している稀勢の里
優しさがほしい女の吹き溜まり
いい人が出来たらしいという噂
美人にも人それぞれの好みあり
酒に生き酒で心の刺を抜く

和歌山市 楠見章子

マスクして少うし口を休ませる
ワンテンポ遅れたリズム性に合う
ソロバンを弾けば合わぬことばかり
立ち話影がゆっくり伸びていく
一段落ついた夕陽が目に沁みる

和歌山市 坂部紀久子

怠けてる私見ている綿埃
次の次考えながらリング剥く
真っ白な雪道罪の数々よ
便利過ぎる世に逆らって一万歩
主役にはなれぬ器と知ってます

和歌山市 玉置当代

踏み出した一歩大人の茨道
北風に負けるものかと寒椿
梅一輪見つけ目白が来て遊ぶ
梅一輪陽だまり求め猫という
水仙の笑う姿は亡母に似て

和歌山市 土屋 起世子

みどり児のように清くは生きられぬ

そこそこに暮らす仲間と笑い合う

ストレスが溜まると浪費したくなる

鈍感で無口で人に慕われる

百均で買ってる整理したものを

和歌山市 福井 菜摘

そつとしておこう自力できつと立つ

見ない振り聞かない振りで和を保つ

往年の鋭気はないが渋い味

親と子の会話途切れるカタカナ語

歳月のおかげ呼吸が合ってくる

和歌山市 堀 富美子

バレンタイン遺影のチョコも忘れない

子に追われてる内は花かも知れぬ

お若いと言われすんなり受け止める

ストレスが百均の籠満たしてる

終章へ心の友がいる至福

和歌山市 松尾 和香

朝日さし今日も命にありがとう

頑張れと励ます友の文嬉し

先生の声励みに生きる日を伸ばす

句会旅頭の中の宝物

日本地図頭の中で遊ばせる

和歌山市 松原 寿子

手紙の束はどけば檸檬ころげ出る

精いっぱい生きる叱咤も受けてなお

涙もろくてやっぱり駄目な女です

大根のお札に一句添えておく

背に鞭を打つ人がいて毯になる

海南市 小谷 小雪

大鍋に吹きだまりの噂も煮る

冬の朝力を溜めてから起きる

円周率時どき凄いなと思う

邪心ありまだ似合わない白い服

とりたてて良いことないがまあいいか

海南市 堂上 泰女

深海魚あなたはそれで満足か

大切にしてくれるからして上げる

フェデラーは強いな海馬研いでるな

私の背で仕込んだ子の一途

以下余白まだまだ続く青い旅

岩出市 藤原 ほのか

ジャンプして愛を確と手に入れる

あの時のあの一言がしみわたる

あの時はどうにかなると信じてた

伝説の人は今でも光ってる

伝説となった話に惚れなおす

紀の川市 宇野 幹子

待ちぼうけ雪が冷雨になってゆく

日が射さぬ前頭葉と暮れなずむ

封を切る母の匂いに包まれる

花吹雪刹那の命光らせて

眼間に時時亡母が顔を出す

紀の川市 楠原 富香

リハビリの汗は期待を裏切らぬ

負けない介護それが私の恩返し

無口だがいざと言う時役に立つ

道の駅土地に根付いた夢を買う

合格へ祖母のへそくり動き出す

紀の川市 山東 日出男

百人が描く絵画は百通り

斑点が微妙に違うてんと虫

クレオパトラの顔を誰も知らない

盛り蕎麦をフォークで食べるパリジェンヌ

つくしんぼ春の序曲を準備中

紀の川市 辻内 次根

なるほどとスマホのボタン押している

絵手紙は花をくすぐるように描く

躊躇わず譲る気持にまだなれる

独り者欠伸がでると寝る準備

南無と手を合わせて肩の荷を降ろす

田辺市 岡本 昇

夢持っていれば貧乏こわくない

年齢にめげずやることだけはやる

控え目と自負しています気の弱さ

それにしてもでっかい妻の旅靴

足ることを知って勿体ないを知る

鳥取市 池澤 大鯨

里の母の教えを守りケチ守り

通じたつもりいつもそっぽ向かれてる

便秘など肉食系に無縁です

わかっててどうして手など出さないの

ノートさえ芸術品と見なす目だ

鳥取市 加藤 茶人

原石の濁り私の愛で除去

月給の封は切ってたその昔

お迎えを待ってますよと医者通い

俺死んで何人泣いてくれるやら

美女と言えども天使にはほど遠い

鳥取市 岸本 宏章

雪国もだんだん雪に弱くなる

八十路坂登るオタオタオタオタと

早口のコント笑いが囁み合わぬ

マイナンバーカード作ってそれっきり

俯いて咲いた花にも蝶は来る

鳥取市 岸 本 孝 子

ダイヤ婚飾る顔です磨かねば
いただいた命大事に生きてきた
あなたより先には逝けぬなど時効
湯豆腐を食べて胃腸を喜ばす
トランプが出るとチャネルすぐ変える

鳥取市 倉 益 一 瑤

初売りの蟹を横目で通り過ぎ
鬼は外鬼がやさしいので困る
寝て起きてみればささいな事ばかり
ユーモアを半分交ぜて打つ釘だ
笑い転げてやがて悲しくなるジョーク

鳥取市 坂 本 とも湖

封じ込めておいた孤独が顔を出す
スランプを逃れるサブリ飲んでおく
殺生はするなとアラ―なぜ説かぬ
愛と憎乗せて浮き雲どこへ行く
アフリカの飢餓も大地も見捨てられ

鳥取市 棚 田 大

OKの返事はよいが従わず
雪かきの孫に昔を思い出す
猿もまた過疎の道路で会議する
雪かきで会話もはずみ元氣わく
あきれるよ雪にもビール冷やしてる

鳥取市 谷 口 回 春 子

わが歳を教えてくれた三センチ
子育ての記念誌それは母子手帳
厚着をしても心の中は冷めたまま
ほっとする湯船の中は極楽だ
義父母逝く故郷遠くなってきた

鳥取市 永 原 昌 鼓

太陽のエキス戴き生きている
多難なり差し歯がポロリまたポロリ
掌中の玉を見上げる孫ふたり
失せ物へ胸の騒ぎが治まらぬ
君が代をまた歌いたい次期五輪

鳥取市 中 村 金 祥

紅梅に酔ったか僕も頬を染め
まじまじと顔見ることが多くなり
趣味は仕事棺桶までも持ってゆき
良い方に予定が狂う時もある
追伸を重ね重ねてやつと封

鳥取市 夏 目 一 粹

水らしくなるのは冬の真っ盛り
二呼吸置けば話は丸くなる
奪うとは哀しきことよ雪つもる
夫婦独楽最期はコロリ共倒れ
後輩が語る人生だが泣ける

鳥取市 西川 和子

八十路とやこんなに脆い力瘤
僕は僕僕が頑張るしかないか
他人さまの慈悲に縋るしかないか
荒波の中で余生を持て余す
巻き戻し出来ぬ人生の愁

鳥取市 平尾 菜美

嘘でいい友のなぐさめ欲しくなり
お手頃の値札私を黙視する
手を振って見送るデイよ御無事でと
又ですかトップ次つぎ頭下げ
残照の余命いくばくどう生きる

鳥取市 福西 茶子

笑って笑ってやつと鎮めた腹の虫
バビベボすんなり言えて赤を着る
昨日よりビッグになった雪ダルマ
好きですと言ったら直ぐに終わる恋
足腰は丈夫綱渡りは御免

鳥取市 前田 楓花

待ちばうけ夫は外で食べて来た
錆びついた鎧まとって戦する
愛犬の最期の夜は抱いて寝る
コッコツと暮らす二人になってゆく
掃除機がゴミも不満も吸い込んだ

鳥取市 山下 凱柳

記念日を一人で祝うのは侘し
過労死に政府もやつと腰を上げ
お年玉に年金消えて残寂し
ラッキーとアンラッキーの狭間生き
相性が悪い今更嘆いても

鳥取市 吉田 孔美子

割烹着に明日着る物を一括り
道端だ畦に歪みは許されぬ
花が咲く畦を歪めて種を蒔く
私有地が道をいびつに家沈む
極彩色失意のときに観る着物

鳥取市 吉田 弘子

やりたい事できる体を慈しむ
加齢かな重荷になったまつりごと
冗談もめっきり減った差し向かい
これからは過去を清算して生きる
少女像まだ戦後を引きずって

倉吉市 猪川 由美子

ああ年金また引き下げてどこへ行く
ケイタイで新聞を読みテレビも見
世知辛い世使う頭が壊れるわ
一喜一憂天気予報がよく当たり
電話より手紙書くのがわたし好き

倉吉市 山中 康子

見ず知らず友が一杯川柳塔
醍醐味を味わいたくて趣味一途
ふと思う大きな揺れが来ないかと
腹の底たしかめ何も彼も任す
みんな浮きうき快晴の催し場

米子市 後 藤 宏 之

はずれても気持伝わる祝い歌
授業料大分払った歌いぶり
脱線はしょっちゅうするがいいコンビ
ひらめきの扉案外頑固者
文字どおり名水の名で人を呼ぶ

米子市 後 藤 美恵子

振袖の袂に親の折り入れ
春を待ちこたつて花の塗り絵する
狭庭に芽生えた鳥の置き土産
この人を掘れば宝がきつと出る
スポーツマン痣に根性見え隠れ

米子市 竹 村 紀の治

数の子のレシビネットへ訊いてみる
八十二独りで唄うバースデー
前触れも無く字忘れに物忘れ
遠い日のことは昨日のことのよう
自分では納得して大掃除

米子市 中 原 章 子

手順よく洗う冬晴れ気持ちよい
慣れなくて自動改札身構える
気の若さに反射神経追いつかぬ
空いているセルフレジには馴染めない
心配性信じることで軽くなる

米子市 成 田 雨 奇

自選句を読み終えた時計報聞く
エアコンを抱きしめたいという寒さ
毒のある泡の一つがぼくである
その線で行くかとおとは乾杯だ
積んできたものがそのまま出る川柳

米子市 吉 田 陽 子

ライバルがライバルらしくなる春だ
静観のつけが時には重くなる
川柳誌置くわたくしのテリトリ
余生余生と一日を濃く塗り過ぎる
昭和平成あと一つだけはしごする

鳥取県 石 谷 美恵子

蟹スキへ地酒ピツタリ遠友来たる
五体満足脳味噌だけがシャンとせぬ
愚痴吐いてみやげドッサリ里帰り
ビルの上鳥になりたい人が立つ
病夫を看る夫のリズムで日が暮れる

鳥取県 斉尾 くにこ

徒然にはがき職人やってます
ペンネームつけて無敵となる日記
生き方のサイズ直しにダイエット
お話のサビはまだかと眠くなる
読み終えて視線うつせば窓に雪

鳥取県 竹信 照彦

山陰にドカ雪やつと降った雪
ドカ雪を除雪するのも久し振り
三百台立往生は想定外
停電にオール電化の怖さ知る
文明の利器だが自然には勝てぬ

鳥取県 西谷 悦子

家族愛支え合つては生きている
形なくとも夫の気持ちは胸伝う
ラジオアナ相撲実況すごい口
豚肉とちぎりこんにやく仲が良い
児のいないオムレッツ姿消すハート

鳥取県 松川 行男

確認を出来ない話聞かせてる
領けば我が意を得たり長話
水やりはいらぬ大根雪の下
さびしいな向こう三軒皆空き屋
この頃は教育テレビ介護欄

鳥取県 山下 節子

筆マメな友の賀状が届かぬが
濁りない少年の瞳に未来の図
蟹の泡何か不満がありますか
初競りの松葉蟹など食べれない
失敗も笑って許す度量もつ

松江市 小川 注湖

床の中今日一日を並べ見る
反省する知恵を持つから人となる
晩酌二合今日の幸せ刺身食う
水晶のようなその指どう保つ
今日の無駄いいいいそれ栄養だ

松江市 川本 畔

遅刻して堂々衆を斜め読み
泳がせて白魚の過去をチェックする
納得はせぬがコックリ一つした
演歌とは明日のエナジー漂わす
二割ほど青春はまだ引きずって

松江市 藤井 寿代

白鳥の飛来今年もありがとう
返礼に宍道湖の夕日をどうぞ
スマホから目が離せない病
ライバルに遅れないよう爪を切る
夕焼けの真ん中で待つストライク

松江市 松本文子

空白を埋めるこれからの世界
鳥には鳥の悩みもあらう鳴いている
賀状の奥からいろいろな声がする
大切な足だひよろひよろしてるけど
逃げはせぬ私はずっと此所にいる

出雲市 伊藤玲子

美しく刺を隠して冬薔薇
前列に座ってはしたない私
おちよぼ口今日は手弱女しとやかに
よろめけばむんずと掴む影が居る
隠してもワクワクうれしさは零れ

出雲市 岸桂子

打ち明けて友の丸みに丸くなる
亡母の形見に戦の匂いまだ残る
鉢に水犬もあずけて二人旅
島根医大の窓の灯りはまだ消えず
造花には散る悲しみはわかるまい

出雲市 小白金房子

生かされて哀しい世相見て老いる
一杯の冷水命つなぐ朝
縁側で孫と絵本の字を拾う
綾とりの手からこぼれる童唄
火吹き竹くらしを語る春炬燵

出雲市 多久和敬子

人間の暮らしカラスに看視され
孫去ってさびしさ残るおもちゃ箱
開店に財布たつぷり膨らませ
変化球投げてでもキャッチ出来る夫
引き出しの昭和ガタガタ音を立て

雲南市 菅田かつ子

風花やマネキン今日は寒かろう
楽しくてついつい眼鏡置き忘れ
美容院出ると寄り道したくなり
口下手な夫電話は苦手なり
路線バス医者の人気も聞いて来る

雲南市 松本昌

悟りには無縁我欲の強い人
休みとは無縁零細企業です
ピアニシモ女は扱いにくいもの
バストウエストヒップみんな崩れて今があり
健康とガス抜き老妻連れ歩き

島根県 伊藤寿美

忘れたい過去を覚えている他人
パリローマ観たが京都をまだ知らず
鍵穴を覗けば波の音がする
今ここでわたしが退けば風が風ぐ
四コマ目転んだ父が起き上がる

岡山市 工藤 千代子

同名の人は他人に思えない

ブライドを守り通している笑顔

ポジティブなブライド下を向きません

電子レンジがわたくしに指図する朝

ゆるゆるのスカートふわふわのココロ

岡山市 丹下 凱夫

信じているところに梅の花が咲く

お月さまだけには隠し事がない

卒寿にもなればぼつぼつ渋くなる

煩惱の数だけ木刀振っている

カモフラージュ痛い痛いと言っている

岡山市 永見 心咲

五分咲きのさくら助走の鶴と似て

私の気質はさくら停められぬ

あがいてもさくら吹雪のどまんなか

過去形の友が岸边に浮いている

からくり時計二度目の意外性がない

岡山市 藤成 操江

出不精は加齢と冬のせいにする

何ひとつ実らないけど忙しい

生真面目に歩いた細いほそい道

泣く笑う少なくなつて日は西に

憧れた昭和の星が又ひとり

岡山市 前田 恵美子

手帳など要る生活はしていない

祝杯の後はひたすら食べるのみ

運なんて風の吹きよで右左

生きたとはビックリ箱の蓋開ける

さあ歩こう椿が咲いて目白鳴く

笠岡市 藤井 智史

楽しんでプラス呼び込む介護する

満点としない仕事の自己評価

極めたい介護一筋根を下ろす

革命を起こす勇気を研いでおく

イエスアイキャン結婚をしてみせる

岡山県 池田 たか子

美しい雪だ凶器になる雪だ

念仏のように断捨離となえてる

顔あげて輝く福寿草が好き

うつむいてけなげなシクラメンも好き

影絵したキツネがない障子張る

岡山県 高岡 茂子

白酒は空になつてゐる罐の壇

笑い声必ずきける句会行く

缶ビール一口飲んで飯作り

はばかりず半身不随腕を組む

年重ね男女気にせず友作り

岡山県 田中 恵

ふるさとが遠くになった冬の月
やれやれ座る我が家の指定席
逆立ちをすれば変身できますか
つくしても泣いても嫁に無い権利
青春の真っ只中に登山靴

岡山県 山縣 のぶ子

過疎に住み街の騒音になじめぬ
タマゴ御飯かき込んでいる朝寝坊
お日様と遊んでみたい土竜の子
おしゃれしていても愚痴吐く主婦仲間
しつとりと過去と調和の床柱

広島市 岸 本 清

健康に暮らせることの尊さよ
預貯金は無いがたっぷり有る情
天敵の杉の花粉がまた鬨る
雪見酒したいが今日は禁酒の日
恵方巻妻と二人で半分こ

竹原市 石 原 淑 子

きな臭い地球危ぶむ流れ星
病室をのぞく陽差しと雀二羽
半身麻酔恥辱を捨てて手術台
病窓で想う是か非か安楽死
ありがとうベッドの上の骨休め

竹原市 岩 本 笑 子

雪しんしんまずガソリンを入れておく
ミカン二個今日も元氣な朝御飯
チョコ一つ夫よ買おうか買うまいか
握手してまた善人に戻りたい
薬飲むきれいな星の下で飲む

宇部市 平 田 実 男

完全に灰汁が抜けると只の人
私を思う娘の口が過ぎ
本当に馬鹿なら阿呆にはなれぬ
見た目には幸せそうなベアルック
駄菓子屋へ昭和の味を買いに行く

防府市 坂 本 加 代

執着が消えて自由の朝が来る
妄想が倍に膨らむ君の留守
罪な人リップサービス振り撒いて
風雪に耐えてきたシワ裏切れぬ
いい人になってカリスマ何処へやら

松山市 栗 田 忠 士

踊り場に未完の夢が捨ててある
断ち切れぬ未練へ入れる鞭一つ
石一つ抱いて刹那を生きている
川柳の森が私の現在地
ドーナツの真ん中辺のはひふへは

西予市 黒田茂代

クリオネの出番北海道に冬
雪やこんこの歌を忘れる温暖化
同姓同名びつくりさせた計報欄
九人兄弟末っ子の夫だけ残る
友禪を着ると豊かになる心

高知県 小澤幸泉

教え子と永遠の別れの夜が過ぎ
教え子の葬儀静かに過ぎてゆく
静かなる脳病院のたたずまい
足の裏近ごろ少し頼りない
つくしんぼ今年も君に会えました

唐津市 坂本蜂朗

虫歯など一本もない総入れ歯
たまに來る子や孫に聞く世の流れ
皆叫ぶ平和この頃軽過ぎる
気まぐれな大衆好む型破り
手土産に笑顔を添えて見せる謝意

唐津市 山口高明

霧雨にけむる湖面の浮御堂
ガンビアの奥地電気がまだ点かず
同情はしても結局他人ごと
裏方のほうがわたしの性にあう
悪ガキの方を憶えていた恩師

熊本市 杉野羅天

自然が泣いている原発の汚染
トランプなら空にカーテン張るだろう
復興の嘆き孫請け曾孫請け
地震雪台風句会の日狙い
自動運転AI乗せた未来像

熊本県 岩切康子

ブルーシート瓦に換わり先ず安堵
OB会お元氣背なが懐かしい
学友^{とも}優しすぐ来て修理してくれた
院内感染面会謝絶大ショック
墨画展日本画も観て刺激され

沖縄県 森山文切

ふくらはぎ何にも主張していない
ゆるいカーブなのに花が置いてある
極秘事項を描いたベラベラ漫画
甕として生きて男は逝きました
宇宙から作句をせよという指令

札幌市 小沢淳

すぎまじきものに出会った猫の恋
国境閉塞除菌し悩む渡り鳥
今更も運を呼び込む書をめくる
嬉しさは鍋の蓋から零れだし
教科書は理想世間は甘くない

札幌市 三浦強一

良友と悪友がいてほくがある
騙されてばかりも遺産だと思ふ
カジノ法年金族はカヤの外
サンマ焼く大根おろしほくの役
終活と思ういやまだとも思ふ

弘前市 浅田隆樹

東京に雪が降るとか軒つらら
雪捨てのダンブと歩く一万歩
新雪に新聞届く靴の跡
雪しんしん五感全てが白になる
遠雷かいい除雪車の走り出す

弘前市 稲見則彦

くまモンに癒されている雪津軽
雪掻きの軍手にもある自尊心
種選びしている今が僕の春
鳥の目で見てみたい過去の道
オルガンの重低音と水割りと

弘前市 岡本花匠

卒寿路へじっくり構え道たどる
介護士の気遣い受けて和まされ
掛け声が口ぐせとなる人生路
久しぶり和人横綱祝福す
雪道の杖にすぎるも滑る脚

弘前市 今愁女

春立つ日津軽は深い雪の中
慰みに自分に買ったチョコケーキ
プーチン帰りまだまだ遠い北の島
安易には戻りそうない北の島
トランプには影武者数人要るでしょう
(二月七日北方領土の日 2句)

弘前市 須郷井蛙

安売りチラシうまくキャッチする
お化粧がゼロの野菜で道の駅
鐘二つ残念賞で夢抱かせ
床の間に長刀ありて母元氣
訃報有り特急便の回覧板

弘前市 高瀬霜石

聞く耳はあるが実行力がない
小さな冒険大人になってからもする
秒針のコチコチ 点滴のボタリ
騙されるたびに背骨が太くなる
邪魔だ邪魔だと掃除機をかけられる

弘前市 高橋洋子

あるがまま肩肘張らず老いの道
ひとつやふたつ古傷あつて蓮の花
八起き目で行き着く先はケアホーム
老人斑長寿の証と受け止める
ピンチにはめっぽう強い破天荒

青森県 松山芳生

仁丹に溶かす小さなわだかまり
生活のリズムたまごの特売日
だまし絵を震い立たせた燠である
乗り遅れました無人駅のベンチ
乾盃を笑顔で埋めた孔雀の間

さいたま市 星野育子

人生の節目と岐路にある出会い
初心者マークを付けて敬老会
わたしを強くした君の無関心
甘口も辛口もいる評論家
魚にも余生はあるか水族館

東京都 川本真理子

死んだらみな星になるって どれが誰
病室から見下ろす街の無表情
姑に学んだ日々を生きたこと
死と言えば死である花瓶の切り花
繰り返す話そう忘れないように

東京都 まえで とよこ

春風へ朝の散歩を再開す
絵手紙のひとつしはしなつかしむ
高級野菜箱におさまる金時芋
ふかしいもやはり戦後の味がする
認知症思ひ出追って歩きだす

横浜市 菊地政勝

あたたかい言葉を添えて行く見舞
けなげにも客見えるまで咲きつづけ
子を産めの掛け声だけで策がない
闇に目が慣れるまで待つこのくらし
折り返し下り坂だと限らない

富山市 島 ひかる

新同人も人間陶冶塔の下
同友会いのちの詩を読みこなす
川柳を友とし友が増えてゆく
出前授業たくさん種が発芽する
お彼岸に逢いに行きます花手桶

可見市 板山 まみ子

外面は横綱我家では貝に
食料を積んで乗り込む雪の道
フクシマに次々起こる予想外
要る物もそうでないのもバーゲンで
星空のかなたの国の子を想い

大山市 金子 美千代

ツイッターに右往左往の世界地図
いつの間に最年長というツアー
嫁さんの後をちょこまか付いて行く
衛兵の直立不動一時間
日本は完璧すぎる国のように

犬山市 関 本 かつ子

静岡市 渡 辺 芳子

転ぶこと頭に入れて昇り降り
お天氣に振り回されて半乾き
有難く五十五年もクラス会
心配を拾い集めている眉間
帰りには大根下げるスニーカー

愛知県 早 川 遡 行

振り返ることはもうない丸木橋
酒飲まぬ友で音信不通なり
帰省する子に玄関は開けてあり
八十になったかそうかあと少し
トランプに一喜一憂する株価

水煙草

(つづき)

沼津市 鳥 沢 無 午

内側を磨いて見えてくる自分
幽霊になる程未練ないこの世
夢ばかり食べてひもじくなってゆく
王様以上に時間の無駄遣い

一りんの河津ざくらが春を呼ぶ
ちぎり絵に逢って生き甲斐寒き日も
曾孫のピアノ覚えの早いこと
けじめづけやるべき時よう生きる

江南市 脇 田 雅 美

節目ごとに予防注射を打ってます
卓袱台に煮物いっぱい乗せる母
人柄で導き上手趣味の会
竹割った気性が家族和ませる

豊橋市 西 郷 紀美代

溶けてきて爺に似てくる雪だるま
寝転んで占領されているソファ
遅咲きは太輪でした努力人
抜け穴の働き方にある殺意

(前月号) 大阪市 吉 田 知 之

神仏どっち参ればいい日本
都会では托鉢姿みかけない
酉年はいつもバタバタ貧乏性
何しても貧乏くじで損ばかり

川柳塔の

川柳讃歌

(148)

上方芸能評論家 木津川 計

妻なのよおばあちゃんとは呼ばないで

亀岡 哲子

禿げ頭に黒のサンGLラス、名脇役だった殿山泰司は好き勝手に生きた人だった。ある日、家へ帰ると口うるさい婆さんがいるので、そばにいる女の子にあれは誰だと聞いたら、アラあなたの奥様よに愕然、するとその婆さんが、そこにいる女の子はお前さんの娘だエにまた愕然、暫く震えが止まらなかった。「家へ帰るのはよくない、心臓に悪い」と。哲子さんもご主人に「おばあちゃん」と呼ばれて憤然、あなたの奥様よ、ではない妻なのよと。

出世する酒と出来ない酒があり

早川 週行

何が切ないといつて「二次会は負け犬ばかりの酔いとなり」以上の切なさがあるのか。出世組は一次会でさつと姿を消し、うだつの上りようもない負け犬たちが傷を舐めて慰め合う。平手造酒もそうだった。千葉周作門下

の逸材が酒乱故に蒙った破門。まっとうにゆけば男平手もてはやされ、今頃は殿の招きの月見酒。それがやくざの用心棒に墮しては涙の顔で見る流れ月でしかない。が廻行さんは逆流を廻行、今じゃ出世して旨い酒を呑む。

人間を斜め切りしている噂

古今堂 蕉子

笑福亭松鶴さんの「胴斬り」が絶品だった。夜陰、侍の試し斬りに遭い、胴体を真横に真つ二つに斬られた不運な男はどうしたか。上半身は風呂屋の番台になって満足。なんでもつと早うに斬られなんだかと。下半身は麵を踏む職人になってよそ見はせん、飯は食わんわで親方は大喜び。が真横には斬れず、通常は袈裟懸け。即ち蕉子さんの斜め切りである。そんな噂を立てられるのもこのひとの万事斜に構えた見方故。男を川柳でずばつと斬る。

好きという嘘と嫌いという嘘と

牧野 芳光

女の「おおきに」の両義性だ。その抑揚でサンキューにもノーサンキューにもなる。男の子もややこしい。詩人・島田陽子の「うち知ってんねん」が秀逸だった。「あの子かなわねん／うちのくつかくしやるし／ノートはのぞきやるし／わるさばかりしやんねん／そやけど／うちのことがまいたいねん／

うち知ってんねん」。芳光さんも曲者である。女の言う「好き」と「嫌い」の真実が判るというのだ。遊び人だった昔なればこそである。

言い勝って負わせた傷を思いやる

久保田 千代

だから本物の詩人に頭を下げる。吉野弘の名作「祝婚歌」の一節だ。「正しいことを言うときは／少しひかえめにするほうがいい／正しいことを言うときは／相手を傷つけやすいものだと／気付いているほうがいい」また「完璧をめざさないほうがいい／完璧なんて不自然なことだと／うそぶいているほうがいい」とも。千代さんも言い勝ったものの相手に負わせた傷を思いやる。千代さん、正しいことを言うときは「少しひかえめに」がいい。

創作の限界嘘も底をつく

石橋 芳山

すると身辺の日常ばかりを書いた小説の神様。志賀直哉は嘘も底をついたが故だったのか。それで「神様」になれるのか。「心境小説的な私小説は、あくまで傍流の小説であり、小説という大河の支流に過ぎない」と痛烈に志賀を批判した織田作之助の名評論「可能性の文学」は創作の本流は虚構だと主張したのだ。芳山さん、身辺の日常を書いて川柳の神様になるか、虚構の創作で再生するか。

自選集

小島 蘭 幸

遙か遙かに父の齢を越えて古希
大好きとささやく孫はまだ二歳
医者嫌い治療力はまだあるようだ
健康保険証は行方不明です
百二歳東京五輪視野に置く

奥田 みつ子

子の嫉親のしつけが物を言う
お子さまランチ先に目がゆく華やかさ
子の意欲買うが力は今ひとつ
老いの身に静かな二階雲速し
打てばひびく言葉に君のあ・り・が・と・う

川上 大輪

つまらない夜です一寸裏返す
あと何度残ってますか誕生日
どのページ見ても遊んでいる私
どこまでの白が続いて行くページ
時どきは胸の火種をチェックする

小西 雄々

ブライドを気にするほどの職につき
リハビリを終えて希望の空を見る
奪ったら返さぬ国があり困る
苺食う札束たべるように食う
酉年は八回だけど羽搏かぬ

斉藤 焔

春うらら孔雀は派手に羽広げ
軽音楽にゆったり浸る種袋
玉葱の生命力をいただこう
千の菊千の祈りを抱いている
のびのびと夢語り合う土筆たち

新家 完司

心臓のパワーが失せて寒がりに
病名は強度川柳中毒症
どこよりも安らぐ宇宙安酒場
酒浴びて透明になる修業中
へこんでも飲めばポポンと元通り

津 守 柳 伸

ひとりではないと造花が匂い立つ
くすりより食養生に自負がある
玉子焼賞味期限にせかされて
湯タンポも低温火傷する魔物
前進も後退もせぬ雪のみち

都 倉 求 芽

いつの日か空気になれる夫婦まで
自分だけ歩いて気がすむカタツムリ
冗談が当たってしまった顔の歳
チラシみな信じるわけがないサブリ
やまぬ雪翌朝の屋根楽しみに

土 橋 螢

天国も地獄も照らす初あかり
文字通り通行止めになる峠
友だちを誉めて社会を広くする
わたくしの都合で明日も日曜日
一月は天から白いくくりもの

西 出 楓 楽

運命の神様嫉妬深いらし
春来たというのに心猛吹雪
相談役は楽隠居とはいかぬ
かむすべる日常会話するでさえ
無理したらダメよと無理を強いられる

仁 部 四 郎

町内の総会花見のおまけつき
あいにくの雨は止むはず花見酒
マンネリの折詰がいい花見酒
花見酒臨時ニュースはないはずだ
お花見に護国神社が許可をくれ

前 たもつ

余命などにと気にせずよく笑い
どっこいしょここにも効果オノマトペ
老いもよし人は見ぬふりしてくれる
ハイタッチ園児に触れて若がえる
歳取らぬ魂胸に抱いている

三 宅 保 州

近道を行くと得てして行き止まり
盆栽の夢は気ままに伸びること
ゆるキャラの中身学生アルバイト
治ってもまだ飲んでいる玉子酒
作ってもほとんど使わないカード

宮 西 弥 生

裏通りすっかり明日の冷えになる
裏を見せ表を見せて老い暮れる
体力の衰えを知る風の道
冬のバラやさしい顔は作らない
街の汚れふるい落として山の駅

リハースル

八木千代

往きつ戻りつしながら坂を下りている
平らな面もあるので油断してしまふ
危ないときは五歩も十歩も後戻り
あの世にもやはり山坂あるだろう
手探りで踏み出す実はリハースル

両川洋々

大空がムンクの叫び跳ね返す
愛してるなんて空手形を貰い
テロの血でヒト科の大地汚させぬ
予言的中やっぱ神は居るんだね
血の匂う記事には飽きた記者のペン

井笠川柳会 第18回 笠岡大会

とき 5月27日(土曜日) 開場 9時30分
開会 午後1時 締切 午前11時30分
ところ 笠岡市保健センター(ギャラクシーホール)
笠岡市十一番町1-3 Tel.0865-62-5701
笠岡駅から④バスで伏越下車 徒歩4分

課題と選者

事前投句「守る・護る」(2句)

小野真備雄・安原 博・大家風太3選
者による共選。天位の中から1名に市
長賞として句碑を贈呈
所定の用紙または便箋に2句併記のうえ、
住所・氏名・電話・所属柳社明記

投句料 1000円と共に4月29日必着で送付のこと

投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡2289

井笠川柳会 宛

Tel. 0865-62-6200 (戸田さだお)

当日投句 (各題2句)

「軍 手」	久保田	半蔵門	選
「峠」	小 島	蘭 幸	選
「年 金」	長 島	敏 選	
「屋 根」	矢 沢	和 女	選

当日席題 (1句) 高 木 勇 三

当日参加料 2000円 (弁当・大会誌)

主 催 井笠川柳会

句 集 の 森



椿 守

八木千代

木の机 鳥の匂いがしてならぬ
二月十四日 椿に鳥が来ますよう
わたくしの中を通って咲く椿
満ち潮の時刻に手紙書いている
書きすぎぬように大事なひとに書く
桃の木の向こうのひと世ふた世かな
潮騒を連れてこの世の月が出る
今はたましいの時間で月の下
月の子を産むかも知れぬ水たまり
大切な人も向こうで濡れている
わたくしの枕に三日月の匂い
切々と空は手紙を降らすなり
われは雁 月の真上を渡るなり
微笑仏になった椿を知っている
椿の忌 いとしい人よ死ぬでない

(平成十一年三月二〇日発行)

学校（小・中学校）のトイレが、まだまだ和式が多いと聞いて、正直ビックリした。

自宅は勿論、町の公衆トイレだって、みーんな洋式なのに、これじゃあ子どもたちが学校のトイレに入りたがらないのも、無理のない話である。

某月某日。とあるデパートのトイレでの出来事。

入り口で、小学校の低学年とおぼしき可愛い少年がつぶらな瞳で僕を真つすぐに見つめて、突然こう言った。

「おじさん。あのー、お願いがあるんですが……」

少年の真剣な眼差しを、僕もしっかり受け止め答えた。

「坊や、一体どうしたんだい？」

「実は……流し方がよく分からないのです」と、僕を個室に連れて行つた。僕はすぐ、納得した。

そのトイレは——水を流すのが、よくあるフツのレバー式ではなくて——便器の後方に付いているボタンを押すタイプで、そのボタンがまた小さくて、そして押すには結構な力があるタイプなのであった。

僕は「お安い御用だよ」と答え、ボタンを押した。

彼の立派なウンコは、ゴーツと気持ちよく流れてゆき、それを見て、彼もホツとしたのだろう、ニッコリ僕に笑いかけ、大きな声で「ありがとうございました」と言い、元氣よく駆けて行つた。

僕は、少年のウンコを一瞬愛しく思い——日本も、この先、まんざら捨てたもんじやないぞ——と呟いた。

温故知新

『たかすぎきゅう高杉鬼遊川柳句集』から

人さまの金なら時に束で持つ

叩いたらテレビがびっくりして映り

そのうちに読む本だから積んである

珈琲で出会ううどん屋で訣れ

つるはしの煙に腹が減ってくる

マツチャマチ雛人形も大阪弁

ひとりでは来るところでなし中之島

始末書で済むあやまちはずすぐ忘れ

母と子に政治冷たいものと知り

信号を深夜まじめにひとり待ち

おおきにで今日も一日無事に暮れ

連翹のしあわせ多き花の列

人を焼く煙も春の風にのり

夫婦とは半端同士でまるく住み

父になる人が廊下で待つている

字の下手な男も筆を選っている

生きるのもひとり死ぬのもひとりなり

子ができて鬼がミルクをあたたため

水煙抄

西出楓楽選

上尾市 中村伸子

いつもとは違う道行くこれも旅
寝なくてもいいと決めたら深夜便
しそわかめ故里偲びおむすびに
出かけない でもマニキュアを塗ってみる
夫の一言句になったよと見せる「塔」
インスピレーションカチッと合った心地良さ

松山市 柳田かおる

ペン先が冴えて一気にエピソード
ノーと言う勇氣玉虫色のなか
真ん中はどうも落ち着かないわたし
秒針に追いかけられて休めない
廃屋へむかしを忍ぶ鬼瓦
ワntenポ遅れて的をついてくる

尼崎市 藤田雪菜

支えてる大根足にありがとう
一人住まい留守電にして冬の風呂
せっかちな性格誰に似たのやら

インターホン私鏡へ走らせる

平凡な今日が過ぎゆくありがとう
枯れ枝にツンと青い芽上を向く

池田市 太田省三

廃屋の傾く額に感謝状

叶えたい美女のお酌と床柱

隅っこに座り直した無位無官

すんなりと鮎の骨抜く嫁を誉め

手を振って笑みを浮かべる対向車

母傘寿荷物の紐の堅結び

大阪市 横山里子

小鳥来て優しくなった言葉尻

聞いている見知らぬ男の一代記

この人も孤独なんだろう一人言

病んでから無神論者を引つ込める

どんくさいお互い様と笑い合う

根がいらちスローライフは身に付かず

白河市 鈴木 たけし

標本木お待たせねえと五六輪
再開の校舎に満ちる子等の笑み
学校があるから路線バス走る
這い這いが見つけた床の小宇宙
タンポポへ歩き始めた手が伸びる
除染廃炉つまりは埋めるだけでしょう

横浜市 長 島 亜希子

悪いとこみんな親似で片づける
恵方巻食べぬと福が来ませんか
身分証明に出番があつたパスポート
びかびかの廊下スリッパ脱ぎましょか
若いんだもの腹もすくでしょ修行僧
厳しい修行頑張ってるねいい笑顔

堺市 梅 木 澄 空

振舞い酒おかわり顔を覚えられ
助かつた駅の置き傘ありがとう
奉仕品とて到底買えぬ桁違い
誕生日しみじみ突くひとり鍋
女子会と言うに憚る古希なけば
出来不出来問わずすすきり投句終え

岡山県 大 杉 敏 夫

籤運の悪い私と妻の愚痴
年号が代わる号外待っている
掘り炬燵会話続かぬ差し向かい

老いふたり旧正月の雑煮餅
トランプ氏よりも年金減るニュース
妻の留守食事代わりの米の汁

福岡県 本 田 さくら

ろう梅の香りまわりをやさしくし
眠れぬ夜過去と未来が交差する
鏡みて「まねをするな」と孫が言う
古希の坂夫婦もタマも医者通い
わが庭の水仙春を連れてくる
青春の楽しい時間巻き戻す

沖縄県 島 尻 卓

朝帰り鬼は外だと締め出され
占い師自分のことは占えず
嫉妬心判断力が逃げて行く
バランスを取るのが苦手マニアです
自家製の味噌に拘る心意気
年寄りの自慢話はまだ聞ける

箕面市 寺 井 柳 童

襟をたて駆け込む屋台夜鳴き蕎麦
心斎橋行き交う人は外国語
美しい女医の診察脈乱れ
世話焼きのおばちゃん減ってさびしいな
忙しい人ほど人に気を配り
トンネルを抜けると雪の道の駅

東京都 高岡 弥生

末っ子のお弁当作りあと少し
ドキドキの合格発表子と歩く
あと少し春はそこまで受験生
冬らしい寒さになってホッとする
少しずつ歩き出してる子の人生

横浜市 巖田 かず枝

慰めの言葉探して寒見舞い
微力だが守りたい者物がある
湯たんぽとネルの寝巻きの幼き日
ボロボロの辞書に助けを求めてる
巻き戻し出来ず世界が揺れている

横浜市 川島 良子

古希までの宿題連れて春がくる
抜け道は沢山あった筈なのに
静と動バシッと今日を切り替える
豪快な笑いの裏にある孤独
聴こうかな黙ってよかな迷い箸

豊橋市 小松 くみ子

タイムセール詰め放題へ持つ特技
優先席学生下を向きスマホ
目だけでは判別できぬ人の顔
ならえ右中身ともかく多数決
ゆったりと陳皮の香り老いの風呂

豊橋市 藤田 千休

大蒜と芋を控えた初デート
長生きの秘訣語らぬ紀元杉
国籍を変えたくないたらバ蟹
丁寧説明します手前味噌
方言でやっと仲間に認知され

鈴鹿市 小河 柳女

甘ずっぱい昔の路を歩いている
美しい絵だ風のアートを眺めよう
夜明けの光 再生をするわたし
泣きに行く海があるのでゆったりと
哀しみの背骨を通る木枯しだ

大阪市 磯島 福貴子

寒風に一条乱れぬユリカモメ
老い二人二月いっぱい冬籠り
来し方と行方問うてる七十五
虐待に声上げられぬ子があわれ
大寒波人智およばず雪に泣く

大阪市 柴本 ばつは

さすが四月蒔萩草がうれしそう
一畝は花も咲かせている余裕
光りもの捨てて野良着が板につく
麦わら帽子オシヤレに被り畑仕事
三時ですお茶しましょうと腹時計

大阪市 高杉 力

アベックが死語になったはいつのこと

面白いことは言えねど大阪人

大阪弁スマホ変換一苦勞

焼きそばでご飯を食べるエネルギー

欲しい服やっぱりセール除外品

大阪市 田中 ゆみ子

三猿もいいが生きてる気がしない

誰が何を言おうと好きなものは好き

慰めにもっと不幸な話する

春はあけぼの今日も予定がたとある

麦を踏む夕日を使い切るまでを

大阪市 宮村 満寿恵

九割は老人バスのバスの客

この帽子脱げない訳が他にある

古い師晚年良いと喜ばせ

露のとう酒によく合うほろ苦さ

三食の他に別腹あけてある

大阪市 森 廣子

悲しみの中で温もり求め合う

月並みなお世辞に心通わない

嘘ついた女の指は美しい

傾いてまだ軸足は耐えている

めんどりにノルマは重い日に一個

大阪市 平井 美智子

風評に飛沫感染してしまふ

三日程してから湧いてきた怒り

爪だけが伸びて私の中の冬

猫の髭数え淋しさ順送り

少しずつ萎えて優しくなった息

泉大津市 助川 和美

騙されたふりして楽し四月馬鹿

亡母の着物スーツに化けて命得る

初雪に今日は早めに酒の燗

謝れば済む事なのに意地を張る

読みさしの小説横に葛湯吞む

貝塚市 吉道 あかね

昨日と同じ今日が終わって有り難い

平凡なお箸二膳が並ぶ幸

麦飯の味を知ってるから強い

赤札に貧乏性が顔を出す

副作用あるなと思う美辞麗句

河内長野市 原 熊 知津子

重心を少しずらして母という

メンタルを試されている持久戦

目をそらすことが上手になる都会

もぎ取った深夜の林檎匂いたつ

シロツメクサの髪飾り春呼ぶ少女

河内長野市 森田 旅人

生きてます心配なくと雨戸開け

古家にメシ風呂炊けた電子音

お隣の元氣旗日に旗あがる

黙す子の孤独を父は読みとれず

癌の妻支え舞台をわしづかみ

河内長野市 穂口 正子

母恋しええ塩梅のたまご焼き

ここんとか笑ってすます知恵はある

ほどほどが分からんさかい恨まれる

見かけほど劣化してないマイハート

時系列無視して妻が恨み吐く

堺市 小林 若芽

若い芽は夢みています冬木立

平凡が好きで波紋を避けている

面影を追うている間に暮れ急ぐ

先送りするとチャンスが目減りする

つらいのは介護をされる母でした

堺市 近藤 治子

庭の木々剪定されてかしこまる

すつきりとした部屋にいる三が日

深呼吸おいしい空気まだ無料

一晚の魔法一面銀世界

すつきりと片付けすぎてさがし物

高槻市 三谷 白黒

我家では家内ファーストうまくいく

元氣だが介護保険の高いこと

手摺ない階段妻の手をとって

これからは長持ちさせるだけの日々

一キロはタクシーよりも歩きます

豊中市 上出 修

順風だ肘掛け椅子にご満悦

心身にブレーキ掛かる高齢期

ロボットに職を奪われトホトホホ

便乗に鬼もびつくり恵方巻き

寒ブリもフグもおしまい二月尽

寝屋川市 岡本 勲

なみなみと注いで本音をこぼさせる

会議後の本音とちがう酒の席

披露宴を三回もした女運

逃げ方も生き方もダメ石をケル

浄土まで普通の運で良しとする

羽曳野市 磯本 洋一

愛犬を預けての旅高く付き

地震国それでも懲りず再稼働

この寒さそれでもビール冷やされて

上ト口の味を覚えた孫恐い

地球儀を回し平和を祈る日々

箕面市 中山 春代

茹で卵つるんと爽やかな朝

なまむぎなまごめ朗読の輪に入る

黒門市場馴れぬ言葉に包まれる

セーターの毛玉を春の陽が笑う

先生の笑顔が好きなランドセル

八尾市 田邊 浩三

添え書きの返事はいつも一年後

給料日昔は妻が出迎えに

終電に今日も門灯怒ってる

呑む時の姿勢はいつも褒められる

じいちゃん背中丸いと冷やかされ

大阪府 小栢 こずえ

嫌いな事好きになるのも生きる知恵

隠し場所忘れ家中かきまわす

輝もひび割れも無い指平和

端役でも役に立ちたい老いであり

すぐそこの記憶の扉開かない

大阪府 神野 千恵子

つぎはぎで味が出てきた知恵袋

スマートな椅子に座ると肩がこる

芽が出ると言われた種を今も抱く

閻魔王舌を抜くのに疲れ果て

リニアカー使い日本でなに急ぐ

大阪府 高木 道子

転びなやと老老介護の医者めぐり

相槌を打ったばかりに句が逃げた

真夜の冬点滅信号律義です

駐車場私の車どこやった

鈍行に乗り換え暮らす風の日々

神戸市 興水 弘

赤い灯に虫も男も蠢いて

定位置のテレビの前で老いてゆく

空元氣やっぱり老いはかくせない

あなただけよ言っでは風をまき散らす

おばちゃん等おしやべり囃子乗りに乗り

神戸市 玄 番美恵子

福寿草音符となつて母唄う

温い床あと三分の至福かな

団欒もいつの間にやら病む話

夢いくつ母の背で聞く子守唄

春はそこくよくよするのもうよそう

尼崎市 清水 久美子

餌付けした椿にヒヨとヒワが来る

建国の日到手作りの国旗出す

8時間寝てもしんどい深夜バス

身知らずが平気で虎の尻尾踏む

トランプと都知事が並ぶ変わり雛

加西市 山 端 なつみ

冬眠中変身出来ぬ私です

瘦せた時着る服だけが增えていく

掴み取り欲張った手が抜けぬ口

誰にしよう祈願されすぎ困る神

サクラサク知らせまだかと電話待つ

宝塚市 丸 山 孔 一

やあといい よおと返すだけの仲

二股も不倫もテレビもて榮し

オバハンの会話亭主の下ろし金

自分さえ良けりやいいのか世の流れ

若作りしても写真が歳を言う

奈良市 高 橋 敬 子

動ける間七十路に丁度いい台詞

二枚舌マスクの下で構えてる

堂堂と嘘言えるのも武器と知る

ハグの仕方安倍さん見ても真似出来ず

記憶違い言われて脳があわててる

奈良市 森 中 博 一

肺がんにお手柔らかにと握手する

五七五指のリハビリしています

人間が干支考えた深い智恵

すぐ忘れスマホ勧めた孫なげく

今気楽やがて孤独がやってくる

和歌山市 北 原 昭 枝

春一番門扉を叩く花だより

ひと色を足して近付くはるの音

氣をもんで長い一日待つ返事

終の日へ一本道をゆっくりと

無駄でない一日だった墓参り

和歌山市 倉 橋 悦 子

免許返上心配ことがひとつ減る

ファックスとメールで済ますお付合い

ほろ苦い早春を食むふきのとう

たればと過ぎた未練が顔を出す

少しだけ意見を述べて役がつき

鳥取市 奥 田 由 美

減量後おやつ過ぎたかりバウンド

願うから逢いに来たよと母の夢

連泊でリフレッシュするフルムーン

雪ずりの音にも過敏震災後

花吹雪散らし終えたか弘樹逝く

倉吉市 大 羽 雄 大

税抜きを見落としレジを困らせる

告白に一升瓶が転がった

計るたび背丈がちぢむ老い加速

待ちどおし朝刊配るオートバイ

減量はしたが動きは変らない

倉吉市 岡崎 美知江

売れぬ家雑草だけがのびている
てにをはを変えたら謎がとけました
空の青幾度勇氣をもらったか
大根のつかり具合を石に聞く
望む事たとあります年女

倉吉市 中村 毅

茶柱が立ち大吉も出たのだが
チヨコ舐めると進駐軍を思い出す
豪雪に三日間ほど冬籠り
豆まきを知らんぷりして鬼瓦
釘を打つ音とリズムにプロとアマ

倉吉市 宮田 風露

大雪に足を奪われ炬燵抱く
澆測と生きて傘寿を迎える日
明日もまた予定を入れて床に就く
夫が逝きあつという間の十八忌
諍いの後は静かな黙秘権

米子市 池田 美穂

これ以上もう玉手箱開けないで
年金のふた月分でランドセル
物溢れ砦すつかり塞がれた
パー出せば運も一緒に飛び出そう
泣き落とし効力すでに期限切れ

米子市 野川 宣子

神様のエールが届く初みくじ
若い力がわっしょい我が家盛り上げる
悩ましいポーズどきどき股大根
チヨコレートまず一番はおとうさん
鍋の中までポーズ決めてる松葉ガニ

米子市 見山 温子

酒一合逃げた魚の自慢する
おでんの手間省いて走るコンビニへ
降る雪をながめて老いの日過ぎていく
節分の豆食べに来るハト三羽
ほめ言葉社交辞令もいい気分

鳥取県 門村 幸子

個性の差うさぎも亀もみな仲間
命はある何とかなるさ明日もある
犯人はわたし深爪してしまふ
また一人心許せる人が減る
骨量と好奇心減る負けられぬ

雲南市 永見 安子

やつと出た一歩これから二歩三歩
球根を土にねかせて春を待ち
「ありがとう」今から稽古積み重ね
土いじり出来ない冬の一人言
メ切りがあつて元気になる動き

島根県 福間 左余

雪深さなかつたならば老い弾む

安売りの声に弾んだ我の欲

独り寝もいぞ寝言を叩かれず

養老院呼ばれぬように八千歩

忘れてもいい事だけが残る耳

瀬戸内市 片島 秀月

送迎車行きかう朝や麦田風

句作りは独りがいいね山眺め

口笛の招き上手でメジロくる

妻と手を繋げて歩く雪の道

春便り孫吉報で茶が旨い

瀬戸内市 東 楨 ますみ

下り坂声も背中もまるくなる

わたくしの城が鏡の奥にある

てっぺんをめざすカタツムリの決意

くすぐると棘もまあるくなってくる

二列目の席でのんびりする欠伸

瀬戸内市 宮 宅 比佐恵

明日の風信じてこの身任せよう

不便でも免許返した身の軽さ

過去の苦の肥やしあるから生きられる

寒波にも齢にも負けず虹を追う

詳細はホームページと言うけれど

玉野市 片岡 富子

しもやけに負けていたのは遠い冬

向い風まわり道して楽に生き

突風にまだ屈しない底力

ノンアルのビールに替えて休肝日

ナビ頼みそれでも地図と睨めっこ

府中市 田辺 和子

まだ夢を持てる力を見せましよう

考えるよりも動けと人は言う

軽口をたたき返答待っている

不器量な林檎ばかりの袋詰め

億年の節氣の惑う去年今年

三次市 伊藤 寿子

宝石店気軽にのぞく日もあった

姉の死へ我が終活が離れない

六人の口を養うこの手みる

鏡みるルージュ差したらまだ若い

自慢して上げよう亡姉のど根性

広島県 日谷 寛

あたたかいひとだな春の虹のよう

ふんわりとわたしを乗せて春の雲

あたたかい気持にさせる春の泥

存分に今日を生きよと春日和

わがままを許してくれる春の海

西予市 西田 美恵子

北風も男も強がりばかり言う
よく出来た噂へ感心するばかり
感情は出さずニコニコ恐い人
君の足元照らす小さな灯になろう
雨とだけ書いた日記を忘れない

高知市 三谷 松太郎

その涙待ちかねたんだ稀勢の里
十九年長かったぜよ日本発
好きながらちよっと苦手の抒情うた
老い話したくないけどネタ尽きず
冬の蚊の世間知らずが居間散歩

北九州市 小松 紀子

老いるとはこういうことか物忘れ
あの世では恩師囲んで句座囲む
お昼だな何もせぬのに腹時計
体の声あれやこれやと多くなる
食べれる時食べておこうルンルンと

佐賀市 真島 久美子

柔らかい嘘もう少し見ていよう
俳人か詩人か窓を開け放つ
結末を溶かしてしまふ人の肌
哀しみは明日が好きと言っている
爪を切る境界線を引くように

沖縄県 高良 秀光

向かい風酒でまぎらす意気地なし
誉められてオダテに乘じ墓穴掘る
人の道沈む瀬あれば立ち泳ぎ
ほつておけ弱虫毛虫いじけ虫
師の言葉心にきざみ糧にする

札幌市 斉藤 宏子

雪原を貸し切りにして大の字に
若者の宇宙語の中雪まつり
落ち込みを治す薬の五七五
命抱く母の大地は春ま近
高齡は未知への挑戦湧く気力

塩竈市 木田 比呂朗

今晚もミラーボールに誘われる
デユエットの歓喜そのまま持ち帰り
春最中妻のスマホも弾みがち
スクロールだけはとつても上手い妻
ファーストの一致都知事とトランプ氏

男鹿市 伊藤 のぶよし

炊きあがる二合ひと日の生きる糧
また一つ灯りが消える過疎の窓
アク抜きを今日も任せるワンカップ
世渡り上手アラとマアとで恙なし
アマダ籤足して一本春の運

大阪市 田中廣子

池田市 上山堅坊

義父の声心に残るお説教
暖房で汗をかいてる無駄遣い
鶏の声田舎の朝を思い出す
ポイントに釣られて買った派手な服

大阪市 梅里南天

交野市 田岡九好

お酒より医者のはしは疲れます
薬湯を今日は霧島明日草津
寒空に蛙の話聞いている
羽毛着た恐竜を観て今日は寝る

大阪市 前川善之

河内長野市 中島一彌

冬の空月も冷え冷え細くなる
幸せを探して歩く一人者
大寒に白いスイセン顔を出す
八十六やつと解ったお茶の味

大阪市 松田聰

河内長野市 渡邊修

日本丸ここがふんばる分岐点
コマージュに誘われ買ってみるサプリ
豆まきも各家庭から消えてゆく
商魂に乗せられている恵方巻

大阪市 吉田知之

堺市 羽田野洋介

弁当にだしまき玉子喜ばれ
にわとりは玉子生むためケージ飼
コケコッコの声に昔はね起きる
修行僧早寝早起きひびだらけ

新緑の道 wait する冬の脚
灰色の日日へきらきら一行詩
もう一度の酉年思う八十四
長生きの予感まだまだ酒旨い
日めくりや追手を撒いてすり抜けて
老醜をさらして旅にあこがれる
しみじみとただしみじみと夕明かり
まだ生きるつもりメモを記しおり
冬の京千枚漬の白を食う
老いふたり豆撒きは絶え鬼居着く
初物の空豆見つけご満悦
干大根残酷なまで痩せ細る
寒波来て引っぱりだこのチャンチャンコ
中高年本音当てられ苦笑い
娘来てごちそうさう冷凍庫
中高年すきまの席もごめんやす
もう今さら新しいこと真つ平だ
一年の計は度々書き換える
拒まれてやっとなかった人の情
変り身の速さ誇った遠い日々

堺市 松永庄三

ネクタイをしみじみ眺む定年日
姑にしらんぷりして教え請い
採血のチクリが怖い大男
高齢にて以後欠礼の賀状増え

堺市 大和峯二

同じなら楽しく笑い生きていく
笑うこと金がかからぬ健康法
寂しさを笑いで満たす古希の坂
許す気になって楽です元氣です

豊中市 荒木郁子

老いの道迷いながらもチャレンジを
ほんわかと笑える記事に餓えている
笑うことプラス効果の若返り
トランプ節日本馴染めず踊れない

豊中市 荒巻夢

褒められて今日という日を歩み出す
サブリメント頼りないけど保険です
納得を求めるわれを友笑う
土塊もまざり都会の雪だるま

豊中市 貝塚正子

高僧の散華拾ってお守りに
良い天気今日は頭が良く回る
手巻き時計秒針の音なつかしい
要らぬこと口出しもめるもと作る

豊中市 木藤こみつ

日本中おひさまマーク日本晴れ
ファーストクラスも同じように揺れている
下手くそな大阪弁は耳障り
青い血管を私の赤い血が流れ

豊中市 源田啓生

来世は時間ない世に生まれたい
家事仕切る母さん矢張り偉いなあ
衰えを受け止めながらさりながら
老々の介護バランス切れそう

富田林市 小出修三

故郷の桐と思い出語り合う
主婦業も週に一日休みたい
心まで読めぬが妻と仲がよい
テレビ切られると不思議に目が覚める

羽曳野市 安本美喜

よく喋りました血圧上昇中
お揃いの赤きセーター礼拝堂
信号を渡る時のみ手を握る
解凍の春到来を告げる鳥

枚方市 坂本ミヨノ

あの衣類今も香残る想い人
白寿まで生きると夢で感謝して
お湯巡り地酒に惚れて二泊した
コンサート心満ち満ちデートする

枚方市 山口 弘委智

加齢ですのがれられない響きもつ

日の甘さ風の辛さが無限生む

白い雲青い空へと赤い風

雑談も喜怒こもごもに縄のれん

八尾市 前田 紀雄

世の乱れせめて桜の花愛でる

おもいやり予算我が家は有りません

無理せずに義理人情はそこそこに

民主主義だんだん脆くなって来た

八尾市 山川 寧

バレンタインチョコを味見て迷う振り

怪我をして言訳できた怠け癖

蘇った王者フェデラー三十四

優しい声醜い心カバーする

大阪府 畑中 節子

変わる世に変わらぬ味のおでん炊く

無住寺の低き土堀に蔦かずら

畑仕事一人舞台に汗が友

ゆつくりと鎧を脱いでゆく加齢

神戸市 近藤 勝正

新元号楽しみもあり寂しさも

立春は字面だけでも心浮く

春告げる花も縮かむ今朝の雪

あの人の指先世界掻き回す

尼崎市 永田 紀恵

没句集その内誰かきつと出す

飲み干した銚子逆さに振る未練

表彰式以下同文にひと括り

吾が神器入歯補聴器老眼鏡

伊丹市 延寿庵 野鶴

あまちよろい話に乗って臍を喰む

どん底でこちらの向きを変えてみる

胸に灯のともるみすゞの温い歌

生き抜いたカラクリがある笑い皺

伊丹市 平井 富夫

飲んで食て横を向いてるうちの猫

エレベーターエスカレーターつけた寺

いい夢だ続き見るため二度寝する

パンダさんあんなに太る笹竹で

川西市 日野岡 和之

過ぎ去れば悔し涙も温かい

遅咲きの花は苦労の日を告げず

心地良くヤル気コン気に本気でず

さわやかな笑顔空気も丸くする

篠山市 永井 かほる

つまずけばぬくもり呉れる亡母の愛

焚く風呂はぬくもりしんから温まる

雪の中野菜は緑春を待つ

立春すぎ窓の日差しも強くなり

篠山市 長澤 喜弘

遺産争いできる近所が妬ましい
亡き親の休眠口座氣にかかる
戸籍追う知らぬ先祖に思い馳せ
B29 濃い鉛筆か孫が問う

篠山市 長谷川 善輔

もう年を越さんでええが豆数え
成田山流行りの顔が豆を撒く
朝帰り柊鱈に迎えられ
大雪に埋まった今日は春立ちぬ

篠山市 藤井 美智子

よく聞こえよく見えていた若い頃
鏡からいやでも老いが見えてくる
逆らわず自然にまかすおだやかに
ご冥福お祈りします友想う

三田市 九村 義徳

現役を去ってする事増えました
惜しまれて引いて行くのは感無量
円満の秘訣お互い堪える事
街路灯影が私を追い越した

三田市 幸田 厚子

真珠には喜怒哀楽の種がある
キッチンofM妻の友
ひなロード古今を語る内裏様
皇居参賀お出ましまぶし長和殿

三田市 宗福 清司

あの娘にはセンスがあると言われたい
古希過ぎると第六感がままならぬ
妻不在井物で飽きてきた
世話役をフェードアウトで辞めたいネ

三田市 辻 開子

早寝して遅起きだけ寝がたらず
物干しが今日は寂しく暇してる
御日様の力を借りて日向ぼこ
この寒さ洗濯物で狭い部屋

三田市 東内 美智子

嚙下障害喉仏下手術して
経口食すべてミキサーとろみつけ
年越しそばおせちも通らず晦日過ぎ
ストレスがイライラためてぶち当たり

三田市 馬場 貴美江

福豆をまく手の上に春が来る
孫来れば諭吉に羽が生えてくる
ロボットに聞いてみよう迷信とは
マンションに鬼門等々あるのかな

三田市 松本 ゆかり

式ひかえうなじまぶしい孫娘
四階に住んで鵲と見つめ合う
家いえに鶏のいた戦中後
狭い土地持つばかりにこたごと

宝塚市 太田 としお

馬鹿になり日々新聞を読んでいる

厄介で何と危険な平和ボケ

戎さんの賽銭箱は特別製

地球は巡る私自身を中心に

西宮市 福田 正彦

声をはり立ちくらみした演歌節

正論に青いと言われ胸燃える

温もりをくれた夕陽に手を合わす

ぬるま湯に慣れてしまえばやけどする

三木市 山口 久子

辞書相手文字は書けたが句を忘れ

軽くなるひ孫九人のわが財布

七ころび八で起きたよ九十歳

あしたやる仕事残して昼寝する

奈良市 尾畑 なを江

ドカ雪の後は太陽まっっている

豆まきで日頃のうさも晴らしてる

義理チョコは止めて自分にあげるとす

飽食とダイエットする人の欲

和歌山市 鍋嶋 澄子

潮風に銀のカーテン細魚ゆれ

満天に流星の群富士で見る

冬日和ピーヒョロまわり森の中

落日の水面の光せまり来る

和歌山市 平田 元三

歩かずに楽した罰か寝付けない

一円の不足に札を出し惜しむ

新人に意見言わせる声の箱

誉め四つ叱り六つで指導する

和歌山市 福呂 秀子

思い遣り少し増やして夫婦独楽

節分に巻き鯨威張って自己主張

忘れずに寝具暖め冬の宵

好奇心煩惱消えず弾む日日

岩出市 村中 悦男

飾り付け豪華の前で迷う箸

卒寿と米寿六十余年添うた仲

弟が残した畑の菊供え

ひと言を飲んでまろやか喉仏

和歌山県 森下 よりこ

いつ迎え来てもおかしくない歳に

シチュー作って三日かかって食べている

自分ファースト一人ぐらしの気ままです

青空をバックに蜂と梅畑

鳥取市 大前 安子

少しの日差し待ってましたと雪を搔く

青空が好きもう雪はこりごりだ

摘み食いしつしつつの炬燵守り

搔いた雪かまくらとなり子等の宿

鳥取市 津村 律子

おいしいね言える夫が居て感謝
羽搏けとまだまだ脳に刺激する
目も耳も老化無駄口言わず三猿に
日本中新横綱に期待湧く

鳥取市 橋谷 静江

欲もなく得もなくなる夫婦連れ
寒い日の犬の散歩は重労働
久しぶり従姉妹と出会い皺比べ
食べ物が食べたいだけに歯医者行く

倉吉市 田中 紀美恵

抱きしめて孫よ世界へ羽撃けと
ぐいぐいとひっぱる友について行く
ぐいぐいと夫に手ひかれ五十年
もぐもぐと囁んで論すが孫そつぽ

倉吉市 堀 かずこ

初日の出心新たに幸祈る
願かける今年こそはと平穏を
クロッカス春待ちわびて芽が出たよ
こたつから寒いさむいと出られない

境港市 中井 虎尾

あやかった田舎銀座はカンコ鳥
食う口としやべる口とは別の人
冬の月美しきゆえ寒さ増す
お笑いあとは目じりをそつとふく

米子市 伊塚 美枝子

休肝日あしたにすると今日も飲む
ほろ苦さ春連れて来た路のとう
雑草が宣戦布告春が来た
雪解けて農婦も草も元氣出す

米子市 生田 和之

大雪の予報に覚悟して眠る
玄関を開けりや寝起きの雪の山
ベタ雪にスコップ苦戦質悪い
立ち往生地域総出のにぎり飯

米子市 池岡 たけし

震えることが減る季節よ早く来てくれ
夜の寒さ減り穏やかな日を待つてるよ
暖かい光を求めて春を呼んでいるんだよ
結び付ける縁はそこ等に在るものを

米子市 川本 美津子

掃除機で心の汚れ取りたいな
七草の名は忘れても粥を炊く
一人言増えた妻には要注意
雪被るパンジー強く生きていた

米子市 田村 周子

八十路坂登って行こうわっしょいと
これからは観光県で金もうけ
わっしょいと掛け声ばかり動かない
春雷にがばと起きたら銀世界

米子市 永井三津子

広い世で出会えた夫に感謝する
愛犬逝く人間並みの葬儀終え
星空のまたたきに似た命抱く
臆病と言つてた彼が執刀医

鳥取県 飯野菖子

明日の日も分からぬ寿命今日生きる
刃こぼれもあるから時を待つて見る
青い空白紙になれと慰める
さっぱりと言つて返した心地よさ

鳥取県 児玉規雄

川柳で笑いの虫を育てて
啓蟄に浮気の虫も動き出す
良い悪い虫の居所分らない
苦虫はいくら囁んでも殺せない

鳥取県 下田茂登子

戦後を知っているから米と味噌
過疎に一人行く場所なんて見つからぬ
食べ物も底をついてる冷蔵庫
大雪にバスも運休山間地

鳥取県 橋本整

老いてなお頑張る脳に大吟醸
曇る日も照る日も越えてダイヤ婚
弱音など吐いては駄目と九十坂
歳月の早さとまどう老いの日々

松江市 相見柳歩

長いこと歩いていた君となら
あの世へは遠い道のりひとり行く
仏との約束結ぶ善をなす
共通の使命みんなが仏の子

松江市 中筋弘充

地球温暖化本当ですか春の雪
災害が起きて呼ばれる評論家
逆転の発想好む砂時計
白と青以外許せぬ柔道着

松江市 山根邦代

ストープに見守られてる心地良さ
ロボットも怖いと思うシーベルト
ゴミ出しを案じてもらう雪の朝
雪景色心乱れること多し

出雲市 黒目英男

人は人自分の道をまっしぐら
晩成を夢見て今も本を読む
辛抱と努力花咲く稀勢の里
恵方巻き商魂によりはやり出す

安来市 原煩惱児

宇宙から眺められてるかくし事
米寿尚離せぬ意地の石つぶて
故郷の川外来魚に占められる
病院も節分蕎麦も豆もあり

広島市 松尾信彦

暖冬が歳時記兼ね雪降らす
旅仲間どちらもあるさ雨に晴れ
育爺の娘と妻への子守唄
あの人も頼まれたのか葱選ぶ

尾道市 小畑宣之

勤勉と正直者に神宿れ
喜寿過ぎても因数分解覚えてる
若返る薬が欲しい白寿翁
荒れ狂う心を癒す静座して

竹原市 若年幸子

旧友に会う記憶のかげら繋ぐ旅
ごぶさたの墓前に積もる雪積もる
九十六恩師の葬儀へ杖の友
笑いじわ増やして今日の幸数え

竹原市 土井輝恵

母代り姉は小さき骨壺に
背負う物やつと降ろして棺に入る
ありがとういっぱいいっぱい棺の中
居なくてもちゃんとやれるが寂しいね

竹原市 六田半徳

鴨庭で赤い南天食べつくす
久しぶり何時まで続く立ちばなし
悪いクセ締切り間際に取りかかる
ひらめきはすぐメモせんと忘れます

府中市 岸田武

冬帽子歩き疲れてよく喋る
ちよつと飛ぶ必死の逃避冬の蠅
ささやかな祝儀マジックペンで書く
シャンソンを歌うのがいて白け気味

三原市 鴨田昭紀

突然変異から才能が発芽する
人生のエンドゾーンに入り込む
組板のリズムで朝が来た昭和
仏壇を拜んで朝が始動する

三原市 笹重耕三

イチローのバットがこだわりを通す
抜け道を探しています核のゴミ
一センチの雪でニュースになる平和
ほとぼりが冷めると見えてくる根っこ

山口市 青木隆子

親切を風の如くに貰った日
電動のチャリが広げるテリトリ
風邪の床おでこに母の手の温み
風邪治り復活をした元氣節

山口市 中前幸子

ぱつんと空いた穴から未来図が見える
クククと笑う真夜中の鳩時計
薄墨色の過去から起きてきた影よ
夜のプランコ月光と仲がよい

岩国市 上村 夢香

再就職朝日拝んでまず一步
年下にあれこれ指示をされる日々
絵手紙の真ん丸い文字こぼれそう
ときめきは今も秘かに燃えている

宇部市 高山 清子

時により男にもなる寡婦の腕
子宝という言葉が消えた文化の世
卒寿過ぎ百まで生きる希望持つ
ひらがなで間を取っている聞き上手

下松市 有海 静枝

出過ぎては突風またもろに受け
風通し良いとも言えるすきま風
神知るや鎮守の杜でしたいじめ
関係を瞬時に絶った消去キ

松山市 郷田 みや

後戻りはしない吊り橋の真ん中
用意された器に載せる自然体
ひとり旅してみたいとは思うだけ
行き止まりそこまで行ったことがない

今治市 渡邊 伊津志

口下手が見ぬ振り聞かぬ振りをする
国宝の鬼面世相を何と見る
赤トンボ空の高さへ吸い込まれ
じゃんけんの込めた力にない効果

大洲市 花岡 順子

団塊と呼ばれ厄介者になる
金の卵と言われた頃もあったのに
結局は金の鳥には成れなんだ
後押しを周りにさせる登り坂

唐津市 岩崎 實

妻逝きて三月も待たず嫁の父
嫁がぬ娘還暦迎えつくしくれ
川柳塔老いの生きざま万華鏡
戦友を声を出さずに歌ってる

山鹿市 中山 好汰

立春とは名ばかりで山は雪
初春の計画どこへ飛んだやら
高齢者専用免許できぬやら
神頼みサブリメントに手が延びる

山鹿市 前田 幸子

建国日日の丸見えぬ最近
おじいさま十三回忌孫揃う
パソコンを孫から習うお縁側
立春に梅三分咲き恋ごころ

山鹿市 柳田 白沙

ダイエット明日からする今日も誓う
ハイヒールだんだん私避けている
君忍ぶ桜の花も同じ顔
人肌のぬくもり懐かし故郷へ

那覇市 前川 真

言い過ぎて一般論と口ごもる
お辞儀する曲がったきゅうり籠に取る
星になる前にやりたい事をやる
語尾をあげ甘えてみたい空の母

沖縄県 あら さくら

崖つぶちのんびり脳が動き出す
おでかけに飴玉入れて咽予防
ついに来た老いの兆しを垣間見る
ああ悲し胸につきたい皮下脂肪

沖縄県 ももと

筋トレでパーフェクトです骨密度
夢の中指折り作句朝忘れ
日本一緋寒桜のバスツアー
酉年は五運六気で頑張るぞ

沖縄県 すみれ

悪妻と良妻みごと演じきる
春よ恋ヒラリ可愛いワンピード
指文字で背に書くもじはなんとよむ
猫のボスぬき足ギョロ目しのび足

シドニー 坂上 のり子

真夏日の葉影こんもりジャカランタ
久々のマダムロシヤスに酔うくしやみ
トランプの母ってどんな人だろう
猛暑日の水道ほとばしり出たお湯

札幌市 富永 恵子

沈丁花雪の窓辺で便り書く
夕月も秘湯の宿の一皿に
相席におひとつ如何冬の旅
風まかせ遊び心をジグザグに

弘前市 高森 一 吞

みんな嘘誰も気付かぬ風見鶏
信念を貫く竹の潔さ
ひと芝居打って無駄足多すぎる
生返事手触り良くて悩まされ

松戸市 山下 明子

あと五年頑張れるよと励まされ
葬祭の積み立て金でバスの旅
身綺麗にお金要ります高齢者
湯上りの揃いの浴衣夢芝居

伊勢原市 小田 幸子

偶然に人犬に会い友となる
いつだって旅のお供は君だった
ふとさがす側に居るはず愛犬を
重ねた日々思い出という袋詰め

佐渡市 高野 不二

足あとをつけずにおこう雪景色
眼鏡かってまだ本屋には寄るつもり
本屋の棚見によるだけで満足し
再放送見てもやっぱり面白い

(鳥沢無午さん、渡辺芳子さん、脇田雅美さん、西郷紀美代さん、吉田知之さんの句は44頁にあります)

新川柳鑑賞

(62)

麻生 路郎

集団の威力蚕が音をたて

(満 秋)

蚕というものは蒼白い繊細な肉体を持っています、一寸触つても潰れそうであり、死んでいるのか、生きているのか判らないほどの静かさで棲息している。ところが、沢山なかいこが、桑の葉を食むとなると物凄い音を立てるので、作者はそこに集団の威力を感じとつたのである。一つの発見である。

青草に寝転んで極楽だ極楽だ

(粗 影)

青草に寝転んで春の大気を心ゆくまで呼吸しているさまを実に率直に大胆に詠んでいるではないか。

三月を才、雑草は忘れてず

(高 志)

三月ともなると、庭の雑草までが青々と芽を出すことを擬人法で巧みに描写した句である。この句などは全く表現技巧によって生かされた句である。

余つ程のすばら仙人掌こりやいいや

(不 二)

仙人掌しゃばてんと言うものは、水をやらいでも、うっちゃらかしにしておいても結構生きているものだ。よつほどのすばら者が「こりやいいや」と共鳴したのもムリはない。

銀行の担保の家の白樺

(三林坊)

銀行へ担保に這入っている家に白樺が咲いているというだけの句であるが、没落しかけている家の寂寥さが出ていてしみじみとしたものを感じさせられる。

しかし、白樺はその家が銀行へ担保に這入って居ろが、居るまいが、そんなことにはかわりもなく清純な姿を見せているのである。

こぼれては咲きこぼれては咲き朝顔の

(梅 志)

朝顔はなんとなく儚ない感じのする花である。咲いたかと思うと、すぐにしぼんでしまう。この句からどっかに凡人の生を思わせられる。表現技巧の妙味がこの句を生かしている。

龍舌蘭眼を刺しそつなつれこみ屋

(梅 志)

通り筋から少し外ずれた街にあるつれこ

み屋の状況をうまくつかんでいると思う。

「眼を刺しそつな」が、いかにもよく利いている。温泉マークのザッパクな感じと違って、竜舌蘭による寂びのある刺激をねらったところにつれ込み屋と街の調和がとれており、このつれ込み屋の主人の人物までうかがえる。

車庫のためだけの車庫前停留所

(不 二)

車庫のあるところ、あまり人家は密集していない。車庫の事務所以外には全然用のないところさえある。それでも、車庫で働く人たちが乗るための車庫前という停留所がある。一寸ゼイタクな感じがしないでもないので面白い。

順序不同とどん尻を慰める

(むじな)

俺が俺がの世の中で、あちらをたてればこちらがふくれる。こちらをたてればあちらがふくれる。そんな時に、順序不同として発表する便法がある。一番どん尻に自分の名前が掲げられても順序不同としてあるので、その四文字に慰められて辛抱するといふのである。

どん尻に自分の名前を並べられた人の心理を巧くつかんでいる。

橘高薫風句抄

〔橘高薫風川柳句集〕平成十三年発刊

やせつぼち あんな度胸も持ちあわせ

バンガローから朝刊を読みにくる

白樺を削っただけの遭難碑

強引な碁をうつ髻をよしとする

使い込み 女に甘い人だった

神前で傲然といるベレー帽

用心棒 国の訛がまだとれず

傘さしてやってる方が刑事なり

その次の船で刑事も島へ着き

ポケットに隠し切れない 手錠にて

夜の汽車 空気枕を譲り合う

鯛買ったことが長屋に知れ渡り

横丁の夕日の中の紙芝居

弁当の大きい順に朝を出す

更生の一日二日雨が降り

別居して以来 物質主義となり

鳶の輪の下は一面水害地

淋しさは 義肢に靴下履かせて出

筆勢が良うて無心の字に向かず

ベレー帽着て看板屋夢を持ち

セーヌ河畔の貸間で今日の画家となり

現職の間は小さい家に住み

日本へ少し落ち目のジャズバンド

ゲイバーのナンバーワンは高商出

氷屋の子を預った水都祭

図書館も市庁も古びた水都祭

瓦斯タンク傍で結構人が住み

煙突の高さも高し 此花区

火気厳禁寒々として城があり

猫の眼にさえ 暇人とうつるならん

誹風柳多留一二篇研究 46

細井龍夫・伊吹和男
山田昭夫・石川道子

小栗清吾

清博美

375 拾奴八もん本所でうりはじめ

細井 赤穂浪士たちは手を尽くし、本所の吉良邸に侵入することを試みたが、吉良邸に入り込むのは容易なことではなかった。そこで間十次郎光興は煙草屋に扮して吉良邸に出入りするようになった。そこで先ずは「八文粉」と称する十奴八文という安い煙草から売り始めたであろう、というのだが、勿論、商品は各種そろえ、五十文もする高級品の国府も扱っていたであろうことは類句からも分かる。五十文の国府を四十七文にまけたり、つまり、安くして吉良家の家臣と仲よくして、その間、細かく邸内の様子を偵察したのだった。

武士のきざみたばこと身をやつし 八六4

多葉粉屋はいつちはむきのい、問者

五十のこくぶ四十七文にうり 天五梅2
たはこ屋じやないかといふとけさに切

清賛。

376 かくれるをにこりくとおくりぜん

細井 送り膳は宴会に出席できなかった人に届ける膳部・料理のこと。

老人だろうか、湿瘡があるからと宴席に出るのを遠慮された人に料理を届けに行ったら、湿を掻き掻きにこにことしてお礼を言い受け取った。

上五が「かくれるを」の誤刻だと仮定すれ

ば、届け先の子供が恥ずかしがって物陰に隠れるのを見て、笑いかけながら膳部を手渡している、となろう。

おくりぜんひへをかきく 札をいひ 九28
おくりせんしりのねぶとを見てかへり

安五信3

伊吹 後説の方が自然か。

小栗 同。子供に限らないが……。

清「掛かれる」としたら、さて、どのような解になるだろうか？

377 雨やとりごおんとついでしかられる

細井 俄雨に出合い、鐘楼で雨宿りしていたが、なかなか降り止まないで、つい、退屈まぎれに鐘をついてしまい、叱られてしまった。

釣りかねをもちやそびにする雨やとり

一三7

雨舎りきせるを出してしかられる 五9

雨舎りつばくろ追てしかられる 明四礼4

清賛。おおらかで、実にいい句だと思つて

378 三両のゑいゆふたちのまんまなり

細井 中間は年給三両と一人扶持（日に五合の玄米）であつたので三^{サレン}一とか三一侍と卑しめて言われた。

薄給なのに、常に人前に出られるよう、きちつとした服装でいなければならなかつたが、実は着のみの着の袂、身一つというそのつらさ。玄関番あたりの悲哀。それをサンピンとは言わず三両の英雄と茶化したもの。

三両で常きらで居る其ひとさ 四二九

三両でもふ武士の部にはいり 四二七

小栗 賛。「英雄」という用語の必然性がよくわからないが、そのようなことか。

清 賛。「三両のあいゆふ」、小栗氏「必然性がよくわからない」とされる。何かのモジリかも知れぬ？

379 三まひハやにむにかたをひつたくり

細井 三人で交代しながら駕籠を担ぐのを三枚肩、略して三枚というが、走りながらの交代なので無理矢理ひつたくるように見える。

いそぐ駕おあしを式本ましてかけ

一〇二 38

三ンまひハちよきのよふだとむす子い、

安四鶴 1

三まいで行極楽のおもしろさ 三六 34

清 賛。プロにはプロの業がある。

380 神棚を毎朝拝むとをりもの

細井 通り者（博徒）は信心深いというよりは縁起かつぎなので、毎朝必ず神棚に拝礼をする

うらないにさいなんと出る通りのもの 六 10

清 賛。神頼みの毎日。

381 へんじやうなん子四郎兵衛にとつかり

細井 吉原の遊女が男装して（変成男子）脱廓をはかつたが、大門の内側にある四郎兵衛会所の見張番の目はごまかせず、見破られて捕らえられてしまった。

やさおのこ待テと四郎兵衛ひとつらへ

一九 2

四郎兵衛に女之介はとつかり

一六 18

四郎兵衛にとかまへられるふぐりなし

二三 27

清 賛。

382 土こねのやうな女郎をくゝしあげ

細井 前の句と同じく遊女の脱廓失敗の景。

吉原の四周を取り巻いている御歯黒溝を渡って逃げようとして、左官の土捏ねみたい

に足を泥だらけにしている女郎を捕え、縛り上げた。

寛元卿 1

土こねのよふな女良ハしばれる

徳二 27

江戸で田へ這入ると女郎くゝされる

伊吹 賛。死に物狂いに逃げたため、足だけでなく全身泥まみれの女郎だと思ふ。

山田 賛。でもこれは実景というよりは趣向でしょう。

清 その通り。

383 つりかねのはなし芝から京へとび

細井 芝の増上寺の大梵鐘は厚さ尺余、口径五尺八寸、高さ丈余もある巨大なもので、鐘声は熊谷、安房上總まで届くとか話をして、たが、いつの間にかやら話題は京都に転じて、方広寺の鐘の踐文に「国家安泰」と家康を分断する銘があつて、家康の怒りに触れたんだつてというような話になった。話は簡単に百里も飛んでしまふ。

上總迄きこへる江戸のうなりこへ 三三 31

英語 de Senryu ⑥4

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

sofa が欲しといふ 妻の うらわかく

*a still young
and pretty wife
wants a sofa*

乳の出る機械に 母はなつてゐる

*mother becomes
a breast milk
machine*

<i>still</i>	まだ	<i>young</i>	若い	<i>pretty</i>	可愛い	<i>want</i>	欲しが	<i>mother</i>	母
<i>become</i>	～になる	<i>breast</i>	乳房	<i>milk</i>	乳	<i>machine</i>	機械		

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句 ④インターネットで交流

2016 年はガーナのハイク・センリュウが世界デビューをした年ですが、その先駆けとなったのが、同年春に刊行されたインターネット・ハイク・ジャーナル誌の *The Mamba-Journal of African Haiku Network* です。ガーナのアジェイ・アゲイパー (Adjei Agyei-Baah) と、ナイジェリアのエマニエル・ジェッシ・カルジャン (Emmanuel Jessie Kalusian) によって生まれた *The Mamba* の第一号には、ガーナ、ナイジェリアをはじめザンビア、ケニア、チュニジア、ソマリアの作品が網羅されています。タイトルになっている *The Mamba* は、アフリカの毒蛇のことです。表紙は今にも跳びかかりそうな毒蛇の写真がアップされていて、異文化を満載した刺激的なアフリカ (アフリカハイク) の世界に読者を誘います。 *The Mamba* から作品の一部を紹介しましょう。

harmattan winds/ opens door/ to no-one (Emmanuel Jessie Kalusian ナイジェリア)

熱風のアルマタンが戸を開ける誰もいない

full moon—/ cumulus clouds slowly/ form a wolf (Patrick Wafula ケニヤ)

満月や綿雲が狼の形になるゆっくりと

feeble breeze wafted—/ a free air-conditioner/ to the poor's delight (Ali Znaidi チュニジア)

かすかなに風が漂い無料のエアコンは貧者の喜び

leaves run/ each to a place of rest/* Mooya (Nshai Walumzimba ザンビア)

それぞれの落ち着き先へ木の葉が走るムーヤ風 *Mooya はロズイ語の風の意味

三窓宛薫風葉書

楽原道夫

岩井三窓に宛てた橘高薫風の葉書七通を、東京の古書店から入手した。薫風は川柳雑誌「三窓は一番傘」と所属柳社は異なつたが、若い頃からの柳友であつた。もつと多くの葉書を薫風は送つていたことだろうが、三窓が大事に取つていた葉書だと考えられる。その意味での資料的価値もあるもので、記録しておく。

葉書七通に、通し番号を年代順に付しておく。番号の下の日付・受付時間は、消印による。1のみ「住吉」の消印で、他は全て「大阪中央」となっている。1は川柳雑誌社（大阪市住吉区万代。路郎の自宅）に行つたついでに出したものであり、それ以外は自宅近くで出したものだと思う。薫風の住所は、すべて「大阪市北区堂島上二一五二」であり、旅館「立花屋」を営んでいた。昭和40年1月に雅号を薫風子から薫風に改めたので、6の葉書から薫風となっている。

三窓の住所は、1が「豊中市服部南町一―二」で、2からは「豊中市中桜塚元町二―一三三」に変わっている。

当時の官製葉書は5円で、7は私製葉書の年賀状で切手は貼られていない。昭和41年7月1日から料金が7円に改定されている。5円葉書の寸法は、9 cm × 14 cm、7の私製葉書は、10 cm × 14・8 cmで現在と同じである。5円葉書の絵柄は、1のみ国会議事堂で、他は夢殿である。文中の／は、改行を示す。

1 昭和36年11月20日 後0―6

御結婚おめでとう存じ上げます。

益々、人生と川柳をお磨き下さい。

祝吟

三文オペラ オ二幕へとかかりたり

『句集三文オペラ』は、昭和34年8月に

刊行された三窓の処女句集。『句集三文オペラ』を刊行したのは、三窓の人生にとって幕開けであり結婚は第二幕である、というように、ブレイクの戯曲「三文オペラ」からの連想で、人生を芝居に見立てた句。この句は、「川柳雑誌」昭和37年一月号にも発表され、句集「有情」「檸檬」「愛染」「古稀薫風」「師弟」「橘高薫風川柳句集」「喜寿薫風」に収録された。

2 昭和37年10月15日 前8―12

薫風自筆の「10／11」の日付あり。

樗敬介氏から便りあり、番今句会から「有情」を借りて／歸り深更まで三読したとのこと。兄が熱心におす／、めして下さつてゐるありさまが目に見え、嬉しい限り存じます。中野アキオ氏からも買つていたける便りあり。／河童の吟一氏の／長崎は初旅にして隣につく／は一卷の映画ですね。この間の記念句会の後の雑誌で、／頭にあるながら、口に出なかつたのはこの句です。／それに、例会句報という中の愛日という作家の句が、粒が揃／つていて、訴える力があります。／この度はほんとにありがと

う。「蘂」諸兄姉に「有情」御喧伝下さい。

句集『有情』は薫風の処女句集で、昭和37年9月23日刊。

『川柳総合事典』の「河童」の項に、(昭和四二年一〇月一日創刊。(略)従来からあった同名句報とは別に、「ひこばえ」を一月号から改題したもの」とある。

3 昭和38年1月8日 後0—6

薫風自筆の「1/8」の日付あり。

ケンサン会は二十七日(日)一時から小生宅／で開きます。／新春のことですから、お出まし願えればこち／らのメンバーの氣持も改まり、結構かと存じ／ますので、御夫婦お揃いでお越し下さい。梅柿兄／にも案内しましたが、他に適当な方々、どうか兄からお誘い合せ御来会下さいます様。／題は「新春雑詠」です。

ケンサン会とは、薫風が明和病院退院後結成した「明和川柳研究会」の例会とは別に、薫風の自宅で毎月開いていた研鑽会のこと。当日の句を一人一句ずつ挙げておく。

一月四日たこ焼を売るお婆さん 三窓

春や春犬のうつわも光るうち 新子

川蒸気春を運んで来てくれず 梅柿

旅遠く来て新年の柚子を買う 千尋

おめでたい人間を見ていた老松 舟遊

正月へカラーを一本買ってくる 菁風

七転び八起き of 春の雑煮祝う 牧人

寝正月ガス中毒をしてへんか 薫風子

初春の句帖へ汚点のような文字 晃

初日の出大きく息を吸い入れる 弦月

初詣夫に離れて祈ること 久美子

正月の障子きっちりしめられる 夢虹

妻という元日のもう暮れかかり 清生

4 昭和38年3月28日 後0—6

薫風自筆の「3/27」の日付あり。

ケンサン会 三月三十一日(日)一時、小生居。／題「愁」です。／姫路の新子女史

来会の予定ですので、やゝ／遅巻きながら至急御案内申上げます。／暖くなりまして、身体がばや／としてしまい句も／進捗しません。先日(十八日)和歌山の中村晴魚さん／がお見え下さり、一時間余り話し

合いました。

5 昭和38年9月27日 後0—6

薫風自筆の「9/27」の日付あり。

豊中みどり会の御案内を頂戴いたしました。／が、平日の／夜は、出ることあたわずです。／ので、失礼します。私は豊中句／会へ長い間の欠席で、「有情」を出版した後の、九月か、／十月の句会に一度出た切りました。／が、夢虹君にいわせると／老朽した句会そのもので魅力なしのことですが、それに／しても、川柳文学句会の日と同じ一日になさるなど、ひよ／として意地の悪い見方、受け取り方をされるやも知れぬと、他／事ながら心配です。豊中句会に協力もせず云うのも／おかしいですが、わざわざ来豊されて超党派句会を祝福／された、故竹二氏の霊に対しても、三窓君顔むけが

(葉書の表へ続く)

出来ないではありませんか。／竹二、句沙弥集もや／が出てくることでしよう。／大いに期待しているのです。／番全の一万句集も近／刊の由、御同慶に耐え／ませんが、聞くところによると、／新子女史が「三文

オペラ」／にならって、充実した句集を出す気になったとのこと／で、これも大いに期待の持／てることと存じています。

時実新子は、昭和38年12月に処女句集『新子』を刊行。

6 昭和40年8月27日 後0—6

薫風自筆の「8／27」の日付あり。

「葉」七号拝受。水府さんへの哀計の文は／心をうちます。句箋散華も良いが、作品が／だんだん混乱して来ているようです。過渡期の／脱皮の途上にあるのかと思います。／すが淋しい。／「檸檬」の広告あんなに立派にして下さって深謝します。羽曳壑の井上圭太君は堺市中モズ／公団住宅7の302に退院、将来性ある若い作家です／から目をかけてあげて下さい。奥さんによろしく。

句集『檸檬』は、奥付では昭和40年7月11日発行となっている。7月11日は薫風の誕生日である。しかし、7月11日には出来上がっていないかった。「川柳塔」昭和40年11月号の「未来へ続く抒情」薫風句集「檸檬

」に寄せて——早川清生に、〈事実上の発刊が路郎師追悼句会の日であり、かつ水府氏の没せられた日であるのが偶然だが示唆に富んでいる〉とある。

私は句集『檸檬』を三冊持っているが、そのうちの一冊には、表と裏の見返しに同じ文面の一枚刷りが貼付されている。

〈噫 麻生路郎先生

麻生路郎先生は七月七日午後九時二十分逝去されました。句集『檸檬』は印刷の途次にありま／した。／先生に新刊を手にして戴き／たかったのに。／ご高評を仰ぎ／たかったのに。無念です。／せめて新刊第一号をご霊前に捧げ、先生の絶筆となった『檸檬』の序の教えをまもり、精進を／続けます。

七月に寒死たてて師を葬送る

昭和四十年七月十日

橘 高 薫 風

「川柳雑誌」昭和40年8月号「柳樽室」

に、〈橘高薫風著、麻生路郎序「れもん」

が、七月末新刊発行されました〉とある。この一枚刷りが貼付された『檸檬』は、8月6日の路郎追悼句会で出席者に頒布されたものではないだろうか。なお、「七月十日」

は路郎の誕生日である。

7 昭和42年12月30日 後0—6

これのみ、宛名が「岩井三窓様／奥様」と連名になっている。

謹 賀 新 年

わが家は皆壮健であります。殊に長男は、守護神の／波夷羅大將の弓矢姿のように威勢よく、姉達を困ら／せております。

お元日 わが家の波夷羅大將も 薫風 人恋いの 今年も遠い旅をせん

昭和四十三年元旦

大阪市北区堂島上二丁目五二番地

橘 高 薫

〈お元日 わが家の波夷羅大將も〉の句は、句集『肉眼』『愛染』『古稀薫風』『師弟』『橘高薫風川柳句集』に収録されたが、初出が分からなかった句である。

この年賀葉書のみ印刷されたものである。「薫」は本名。「高」が「高」になっている。以前、御長男の充さんにお聞きしたところ、当時の本籍は「高」で、後年「高」に改めたそうだ。

愛染帖

新家 完司選

(投句) 299名

和歌山市 古久保和子

うがいする音に音符を付けてみる

(評) いたずらっ子のように、ガラガラするときにリズムを付けるだけで心が軽くなる。自分の人生を楽しく出来るのは自分だけ。

三田市 東内美智子

徘徊は多分スーパー通う道

(評) 徘徊するほどボケても、毎日通っていた道は身体に沁み込んでいる。飲兵衛諸君なら「たぶん飲み屋へ通う道」だろう。

笠岡市 藤井 智史

御住所というほどの地に住んでない

(評) では「御住所」に相応しい土地とは？ 関西なら芦屋市六麓荘、関東なら田園調布か。そんなものに負けたらアカン。胸を張ろう！

伊丹市 延寿庵野鶴

ひらがなの一筆箋に油断する

(評) 奥床しい花模様の一筆箋に流麗なひらがな。しかし、眉に唾を付けて読み直してみると、何やら妖しいような怪しいような？

八尾市 高杉 千歩

八十を若いと思う程に生き

(評) 壮年期の10歳の差は何とも感じないが高齢になってからの10歳は大きい。作者90歳。「90を若いと思う程」生きていたきたい。

大阪市 平井美智子

繃帯を巻いて主役になっている

(評) 指先の繃帯だけでも「どうしたの？」。首から腕を吊る大怪我ならしばらくは英雄。心配してくれる仲間たちは人生の宝だ。

羽曳野市 中川ひろ介

たんぼの綿毛のように酔っている

(評) ふわふわりホロホロりと優雅な微酔。そのあたりで止めておけば「あっぱれ！」なのだが……。悪友共から逃げるのが至難。

八尾市 山根 妙子

風邪移す人無くひとり卵酒

(評) 「風邪は誰かに移したら治る」とはしばしば言われている俗説だが、「移す人」さえいない、ほろ苦い「ひとりの卵酒」である。

藤井寺市 鈴木いさお

漁師は散骨 樵は樹木葬

(評) 死後にも魂が存在するなら、生き甲斐であった生業の現場へ戻るのではないか。それなら、骨も同じ所で無に還るのがベスト。

鳥取県 斉尾くにこ

大切に拾われるのはカルシウム

(評) 厳肅に拾っているのは故人に対するエ

チケット。どなたの骨でも、数年後には落けて消滅する「カルシウム」にすぎない。

八王子市 川名 洋子

老人じゃない七十四の私

神戸市 上田 和宏

人身事故駅の乾いたアナウンス

鳥取市 福西 茶子

股割きをして股下変わらない

沖繩県 森山 文切

ケータイにひとりにさせてもらえない

青森市 守田 啓子

糖質の少ない方の春が好き

奈良県 谷川 憲

しんとして紙の音だけの会議

倉吉市 岡崎美知江

終活のノート書くのは夜がいい

長野県 丸山 健三

切り札はひとつ桜の切手貼る

佐賀県 真島久美子

自由には飽きる束縛には慣れる

神戸市 奥澤洋次郎

めんどりが時告げるからややこしい

東京都 川本真理子

葬式でしか会わない人とハグしあう

大洲市 中居 善信

以下同文くらいの賞は二三枚

河内長野市 穂口 正子

嫌なこと書いて破ってまた明日

神戸市 細川 花門
初鏡吾が貧相が笑うなり

羽曳野市 徳山みつこ
わたくしをこまめに回す褒め言葉

尼崎市 山田 耕治
きれいな人ねと余所見とがめられ

神戸市 山下 明子
手打ち蕎麦木のぬくもりの空間で

河内長野市 中島 一彌
目薬をさしてテレビの作品見る

海門市 堂上 泰女
子の短気論す私はより短気

弘前市 高瀬 霜石
バーゲンで探す来季の冬装備

鳥取県 門村 幸子
泥酔の三步手前で盃伏せる

鳥取県 幸子
赤ちようちん揺れてる雪の降る街で

紀の川市 辻内 次根
「あゝしんど」雪掻きの手に湯気が立つ

山岡富美子
サプリメントの売れる理由の分かる歳

河内長野市 山岡富美子
金もない名もない穏やかな余生

岡山県 山縣のぶ子
満面の笑みをカラスに突かれる

スタートは昭和のウサギ小屋だった

奈良市 大久保眞澄
姑の縮小コピーです 夫

枚方市 寺川 弘一
資格にはならぬが後期高齢者

生駒市 飛永ふりこ
入れ替えのシャンプーまでがこねている

寝屋川市 伊達 郁夫
憲法のすべてを読んだことがない

倉吉市 宮田 風露
バスの中会話途切れたまま降りる

堺市 村上 玄也
追い越しも割り込みもある社の人事

大阪市 津守 柳伸
トランプの占い凶と出そうだな

大阪市 津守 柳伸
車椅子押せる身体をキープする

西宮市 福島 弘子
おだやかな空気ただようバルコニー

西宮市 弘子
念を入れ鱈と豆と恵方巻

鳥取県 児玉 規雄
柏汁は濃い方が好き下戸だけど

鳥取県 児玉 規雄
母逝きて介護日記はもう書けぬ

西予市 西田美恵子
我が家には居所の無い神仏

西予市 西田美恵子
ピーと鳴ったら言えと留守電急ぎ立てる

大阪府 高杉 力
旅立ちを安い日にするバック旅

球じゃなく路を見つけた春ゴルフ

唐津市 岩崎 實
歩行器でただ歩くだけ寒の入り

豊橋市 小松くみ子
デスクワークかつこいいけどコタツ番

箕面市 広島 巴子
鬼嫁じゃないと炬燵で豆食べる

弘前市 稲見 則彦
雪雪雪止まずまた雪雪雪

鳥取県 竹信 照彦
大雪は無言吹雪は声上げる

鳥取市 大前 安子
掻いた雪がまくらとなり子守する

防府市 坂本 加代
雪を積み急ぐ車は目出し帽

鳥取市 池澤 大鯨
老妻はコタツの守りで雪掻かず

三田市 尾崎 一子
寒いねー言えど返事の無いひとり

沖繩県 禰 ももと
防寒のはおる茶羽織母仕立て

岡山県 田中 恵
雪国を思えばなんだこの寒さ

箕面市 中山 春代
五センチで降った消えたと騒がしい

奈良県 渡辺 富子
冬はいい鍋をつつけば皆笑顔

鳥取県 西谷 悦子
山茶花が散りたくないと雪に耐え

河内長野市

坂上 淳司

全没もとうとうこれで三ヶ月

神戸市

能勢 利子

行き詰まり句材探しに街に出る

堺市

内藤 憲彦

同窓会うける一句を用意して

貝塚市

石田ひろ子

ぬた和えの分葱で春を引き寄せる

京都市

三宅 満子

一番に咲いてちやほやされる梅

岡山市

丹下 凱夫

観梅のめあては酒を飲む処

鳥取市

前田 楓花

冷たい手と握ったまんま離さない

東大阪市

北村 賢子

重い腰伸ばして羽根も生える春

三田市

堀 正和

春ですよ偶にスカート穿きなほれ

紀の川市

宇野 幹子

浮き雲へ乗ってゆきたい春のウツ

箕面市

出口セツ子

老春とばかりに埋まる予定表

高槻市

島田千鶴子

柏手が聞こえ神様よっころしよ

香芝市

大内 朝子

目一杯若づくりしてどっこいしよ

明石市

梶谷 和郎

「どっこいしよ」の声は私の杖代わり

橈原市

居谷真理子

けつたないな人やうどんが嫌いやて

大阪市

奥村 五月

山ほどの葉を飲んで酒タバコ

豊橋市

藤田 千休

盗み酒始めちよろちよる中ばつば

堺市

矢倉 五月

誤解とく話にちよつと酒が欲し

三原市

笹重 耕三

一杯二杯わたしの好きな数え方

大阪市

井丸 昌紀

酒足していよいよ枯れてゆく句想

羽曳野市

吉村久仁雄

立ち飲みの足は今でも鍛えてる

堺市

澤井 敏治

ほどほどを試しそこねて二日酔い

那覇市

前川 真

朝の字に月が揺れてる二日酔い

姫路市

古川 奮水

妻逝つて米のエキスを増やすまい

シドニー

坂上のり子

朝起きた気分で今日を生きている

三田市

久保田千代

わが道を行く拘りを捨てず行く

奈良市

米田 恭昌

期待などせんがやつぱりタイガース

大阪市

平賀 国和

恋う人の実家も消えて空の里

豊中市

藤井 則彦

呼ばなくても来るのに呼ぶと来ない猫

米子市

見山 温子

野良猫が老いを慰め遊びにくる

大阪市

田中ゆみ子

いい街だ猫とのんびり話する

西予市

黒田 茂代

歳のせいでしょうか夫の食べこぼし

香南市

桑名 孝雄

長生きのつらさ君等は判るまい

高槻市

安田 忠子

無料バス運転手さん声やさし

鳥取市

岸本 宏章

縁談を三つ纏めた凄い妻

豊橋市

西郷紀美代

来客にラーメン臭をファブリーズ

京都市

都倉 求芽

なんべんもトイレに立つて会終わる

海南市

小谷 小雪

七難を避けたく冬も日焼け止め

池田市

上山 堅坊

麗人の強い磁力に氣をもらう

寝屋川市

平松かすみ

ほほえめばほほえみ返す乳母車

米子市

竹村紀の治

わたくしに何の罪かと熊の声

京都市

榎本 宏子

わたし似なら美人と母の無責任

豊中市 水野 黒兎

福島にいまなお続く苦といじめ

島取市 永原 昌鼓

待たされてまた待たされる拉致家族

日高市 根岸 方子

戦争は嫌いキライと亡母の文字

河内長野市 渡邊 修

トランプが北のボス似て手をたたく

島取市 津村 律子

毎日がトランプさんと小池知事

三田市 福田 好文

三回忌終えてカラオケ歌う寡婦

河内長野市 谷 久美子

ストレスはカラオケ店に置いてくる

宝塚市 田中 章子

後期です運転してもいいですか

河内長野市 村上 直樹

まだ傘寿紅葉マークは断固拒否

島取市 倉益 一瑤

免許証の無傷にあつた運不運

寝屋川市 籠島 恵子

がんばりが足りないといふは笑つとく

松山市 郷田 みや

自分とは約束しないことにする

神戸市 山崎 武彦

くちびるが甘いムードを恋しがる

大阪市 栃尾 奏子

長期戦そうして母の勝ちとなる

老齢化 少子化 貧困の烟

八尾市 山川 寧

コマージュシャルすぐスマートになれそうだ

芦屋市 黒田 能子

定年後縦の世間を横にする

福井市 伊藤 良一

絵手紙で介護暮らしを告げる友

島取市 奥田 由美

点滴の針がどこにも入らない

枚方市 小林 わこ

好きだった亡父に貰った高血糖

奈良市 阿部 紀子

再検の通知もしやが付きまそう

倉吉市 大羽 雄大

主治医には内緒で医者を変えてみる

横浜市 菊地 政勝

若いはず日が昇っても爆睡中

河内長野市 原熊知津子

ブレーキが壊れたように子が育つ

和泉市 横山 捷也

鈍感がいいとマンボウいつている

男鹿市 伊藤のぶよし

譲つてた席譲られる五十の日

大阪市 藤田 武人

老いたとは言つてはおれん末っ子だ

米子市 後藤美恵子

来過ぎかな言いつつ友はやって来る

堺市 梅木 澄空

うわべの顔もへのへのもへじい奴だ

河内長野市 藤塚 克三

頷いてくれるお方の胸を借る

岩国市 上村 夢香

美しく生きた証の低い腰

田辺市 岡本 昇

生みたての玉子の温み思い出す

富田林市 中井 アキ

心まで裸になれる露天風呂

広島市 岸本 清

逝つた友新しい友みなご縁

鳥取県 石谷美恵子

仏壇の造花をはずみ頼む留守

唐津市 坂本 蜂朗

眠れない起きて座れば出るアクビ

豊中市 貝塚 正子

修身があればと思う世の乱れ

宇部市 平田 実男

形振りをかまわず足の爪を切る

紀の川市 北山 絹子

床下に埋める小銭が増えてゆく

堺市 加島 由一

飛び出せる金は茶釜に入れてある

西脇市 七反田順子

万馬券当ててギャンブル依存症

河内長野市 松岡 篤

寝る前にタンス預金を確かめる

三原市 鴨田 昭紀

共選欄

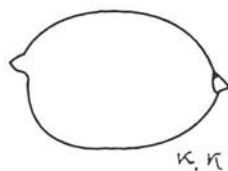
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 392名)



「青」 北野 哲男 選

トランプ流赤信号も青という
青天の霹靂トランプ大統領
青大将薙家の主と言われても
丸呑みのお味はいかが青大将
青丹よし平和な国の裝飾語
へらず口叩くが残る蒙古斑
剃り跡は練行衆の青修二会
倅せのサファイア光る薬指
藍よりもやさしい青がマイカラー
豪雪にブルースカイを待ち侘びる
崩壊のはじまり青い実が落ちた
青年のまま軍服の父が居る
群青の海に九条捨てないで
青二才言われた頃の好奇心
青筋を立てる若さがウブです

大阪府 近藤 正
川西市 大坪 一徳
府中市 田辺 和子
堺市 奥 時雄
鳥取県 竹信 照彦
堺市 坂上 淳司
富田林市 山野 寿之
唐津市 山口 高明
松戸市 山下 明子
倉吉市 田中けいこ
藤井寺市 太田扶美代
八尾市 山根 妙子
尼崎市 永田 紀恵
小野市 田中 辰夫
鳥取市 池澤 大鯨

「青」 安土 理恵 選

青空がこぼれて咲いたイスフグリ
青いとこまだ残ってる君が好き
目が覚めるLEDの青信号
ソーダ水の青から飛んできた返事
憧れの藍一滴を滴らす
幸せのラビスラズリのフェルメール
群青も藍も仲間と嬉しそう
青汁を飲んで野菜を疎んじる
つつましくロマンを秘める青いバラ
青空をかついで少年が走る
まだ青い伸び代がある証拠です
懸命に生きて見つけた青い鳥
青い鳥今日一日はわたくしと
コマーシャルに負けて青汁飲んでいる
いっぱしの口をきいてる蒙古斑

藤井寺市 増井ヨシ枝
香芝市 大内 朝子
奈良県 安福 和夫
枚方市 小林 わこ
大阪府 森 廣子
奈良市 宇賀 史郎
大阪市 古今堂蕉子
大阪府 神野千恵子
和歌山市 北原 昭枝
堺市 柿花 和夫
米子市 後藤 宏之
寝屋川市 富山ルイ子
富田林市 関 よしみ
鳥取市 岸本 宏章
東京都 川本真理子

青穂が直った頃にまた転ぶ
 まだ青いリングレモンに選挙権
 青春の汗がはじける甲子園
 俺お前飲めば十五の青い雲
 青春の一幕でした片思い
 被災屋根青いテントじゃ雀来ぬ
 逆上がり出来たあの日の青い空
 青畳ニッポン人を謳歌する
 まだ青い伸び代がある証拠です
 青年が銃と教典合わせ持ち
 青い目の浴衣姿の粋なこと
 青い目が優しく語る河内弁
 子には子の親には親の青写真
 青森の青がほんものだと思う
 クレヨン青が足りない島育ち
 青いとこまだ残ってる君が好き
 まだ青さ残し七十台に入る
 あの時とちがってみえる青い空
 よく吠えたあの青春が懐かしい
 青い海静かな眠りレアメタル
 青息吐息母の細腕繁昌記
 青臭い話に和む同期会
 未来地図勝手に描いた青かった

大阪府	田中ゆみ子
和歌山市	古久保和子
箕面市	大浦 初音
河内長野市	村上 直樹
鳥取県	山下 節子
倉吉市	岡崎美知江
三田市	谷口 修平
弘前市	高瀬 霜石
米子市	後藤 宏之
大阪市	内田志津子
奈良市	米田 恭昌
大阪市	藤田 武人
犬山市	関本かつ子
青森市	守田 啓子
堺市	加島 由一
香芝市	大内 朝子
神戸市	奥澤洋次郎
三田市	上田ひとみ
大阪市	川端 一步
西宮市	緒方美津子
大阪市	大川 桃花
尼崎市	清水久美子
鳥取市	福西 茶子

長すぎる青いリボンの拉致家族
 ブルシャンブルーゴッホも真似た北斎画
 こんな字を書くんだったの青丹よし
 青穂が直った頃にまた転ぶ
 青い絵具ばかりが減って少年期
 場を読めず正論を吐く青蛙
 手の中へ掬えば解ける海の青
 哲学者も俳人も居る青テント
 引き出しにまだ青雲の志
 青臭い意見核心ついている
 青空は戦を見たくなひと言う
 青年のまま軍服の父が居る
 幾万の無念が沈む青い海
 父さんの歴史を語る青インク
 青カビにヒトの命を救われる
 青い殻脱いで風景が変わった
 青春の門は切なくほろ苦く
 青くさい哲学持つて子は巣立つ
 そのままで行けばいいよと海の青
 ロマンよりまずお洗濯青い空
 シャガールの青にこころを遊ばせる
 青々と苔は日陰を友とする
 一途さが青を纏って生きている

米子市	中原 章子
高槻市	原 洋志
大阪市	藤原千恵子
大阪市	田中ゆみ子
松山市	宮尾みのり
札幌市	小沢 淳
大阪市	平井美智子
大阪市	大川 桃花
和歌山市	武本 碧
和泉市	横山 捷也
大阪市	原田すみ子
八尾市	山根 妙子
大阪市	津村志華子
豊中市	池田 純子
奈良市	米田 恭昌
奈良県	谷川 憲
藤井寺市	鈴木いさお
奈良県	渡辺 富子
長岡京市	山田 葉子
奈良市	大久保眞澄
弘前市	斉藤 苺
寝屋川市	森 茜
寝屋川市	龍島 恵子

老いてなおスローライフの青写真

青くさい哲学持つて子は果立つ

正攻法だけしか知らぬ蒙古斑

激戦地忘れるほどの空と海

少年の青い正義を持て余し

難民の涙が誓う青い海

河底の捨てが見る青い空

ジーパンで夫は万年青と呼んでます

青春の門は切なくほろ苦く

あの恋は青い私の春でした

ブルシヤンブルーゴッホも真似た北斎画

フェルメールの青に魅せられ美術館

紺碧の彼方で契る空と海

シャガールの青が好きだという女

幸せのラピスラズリのフェルメール

青春の真つただ中のプレスリー

トランプの前での首相青かった

何時外す総理の胸の青リボン

お別れのブルートレイン泣く尾灯

秀句

掬ったら無色放てば海の色

青空がこぼれて咲いたイヌフグリ

ポケットに渦巻く青いアンピシヤス

東大阪市 佐々木満作

奈良県 渡辺 富子

尾道市 大本 和子

沖縄県 あらさくら

西予市 西田美恵子

八尾市 宮西 弥生

茨木市 島田 誠一

西脇市 七反田順子

藤井寺市 鈴木いさお

吹田市 木下 敏子

高槻市 原 洋志

神戸市 富永 恭子

大阪市 栃尾 奏子

神戸市 細川 花門

奈良市 宇賀 史郎

京都市 清水 英旺

松江市 川本 畔

三田市 福田 好文

京都市 都倉 求芽

榎原市 居谷真理子

藤井寺市 増井ヨシ枝

大阪市 升成 好

切なさを胸に秘めてか海火乗

あの頃の私は青く弾けてた

時々海馬を放つ青空へ

紺碧の彼方で契る空と海

青雲を抱いてとび立つ新天地

掬ったら無色放てば海の色

崩壊のはじまり青い実が落ちた

励ましの手紙太字の青インク

青虫のままで一生終えるかも

雪の中青葉は甘くなつていく

少年のジャンプが蒼天を揺らす

ポケットに渦巻く青いアンピシヤス

ミサイルに汚されそうな青い空

北斎の青迫り来る浪の音

青田刈り過ぎて人事の目も利かず

まだ青いリンゴレモンに選挙権

シャガールの青にあの日の僕と君

海の藍空の青より渦巻いて

青雲の息吹き校舎に満ちて春

秀句

アルバムをめくれば青い風が吹く

青畳ニッポン人を謳歌する

領海線の向こうも同じ青い海

藤井寺市 高田美代子

岩出市 藤原ほか

岸和田市 宮野みつ江

大阪府 栃尾 奏子

羽曳野市 中川ひろ介

榎原市 居谷真理子

藤井寺市 太田扶美代

京都市 都倉 求芽

三田市 堀 正和

弘前市 浅田 隆樹

三原市 笹重 耕三

大阪市 升成 好

松江市 中筋 弘充

大山市 金子美千代

堺市 奥 時雄

和歌山市 古久保和子

貝塚市 吉道あかね

弘前市 高森 一吞

河内長野市 村上 直樹

岡山県 田中 恵

弘前市 高瀬 霜石

羽曳野市 吉村久仁雄



買い物を詠う (1)

最近「テレビショッピング」や「カタログ通販」そして「インターネット販売」などが広まり、自宅に居ながら買い物が出来る時代になってきました。

しかし、少しお洒落をして買い物に出かけるのは、退屈な日常からの脱出。心身ともにリフレッシュしてくれれます。沈みがちな人には「買い物療法」が有効であり、頻繁に買い物に出かける高齢者は長命だという統計もあります。

スーパールのチラシが妻の愛読書

新聞のチラシが決める晩ごはん

激安のチラシにサブリまた増える

行つてあげようか店じまいのチラシ

焦つたら派手なチラシに騙される

えらい熱心に読んでいるなど覗き込んだら、新聞記事ではなく折り込み広告。競合スーパールの表示価格と写真を見比べて「今夜のオカズは？」と策を練るのも主婦の仕事。

近ごろ目立つのは健康ブームに乗ったサブリメントの広告。最初は激安だが執拗に継続を進めてくるのが常套手段。

閉店セールや決算処分等の派手なチラシに乗せられ過ぎてはいけませんが、購買欲は旺盛な好奇心と生命力の為せるところ。気力の失せた人はチラシさえ覗きません。

大阪のオパチャン端数まず値切る

夕方はシール貼る人追いかける

滑り込みセーフで半額の刺身

矢倉 五月

山崎 早苗

泉水 冴子

半額で買つて半分腐らせる

レシートを集めて悟る無駄遣い

値切るのは大阪の文化であり店主とのコミュニケーションでもありません。負けてくれなかったら「ほな、なんかちゃうだー」と、子供のように粘るのも大阪のオパチャン。

割引シールを貼つてゆく時間は店によって違いますが、生鮮食品などの半額シールを待っている人は多く、中には店員に「はよ、貼つてー」とブレッツシャワーをかけるツワモノまでいます。しかし、いくら半額だからといって必要以上に買うのは無駄遣い。あとからレシートを眺めて反省です。

節約の誓いを胸にスーパーへ

スーパーの疑似餌タマゴにまた釣られ

スーパーの竹の子ニハオと笑顔

スーパーへ眼鏡忘れて値が読めず

食料も水もコンビニから補給

コンビニで揃えるつもり老い支度

コンビニのトイレを借りておでん買う

コンビニの敬語と日本語の行方

どの街でもスーパーマーケットやコンビニに負けて個人商店が消えつつあります。店主との親しい会話がなくなるのは寂しい限りですが、これも時代の流れなら仕方ありません。

スーパーの目玉「お一人さま一パック限り」のタマゴに釣られて「節約」の誓いを忘れてしまうのも元氣な証拠。

高級なものはありませんが、日用品から惣菜まで、日常の暮らしには困らない程度のものを揃えているのがコンビニ。「千円からお預かりします」には、まだ馴染めませんが。

山本希久子

原 静子

東川 和子

村上 玄也

高橋 良子

三浦 強一

工藤千代子

石橋 圭子

藤岡 圭子

日置みどり

「曲がり角」

(投句 245名)

大内朝子選



幾つかの恋も芽生えた曲がり角
煙草屋とポストが角にある昭和
少年をわくわくさせる曲がり角
曲がり角何度かすぎたお肌です
明日に似て先の見えない曲がり角
曲がり角苦手な人が立っている
過信して奈落の底の曲がり角
曲がり角に矢印のあるあたたかさ
曲がり角悪魔が招く蜜の味
あの角を曲がれば景色変わるはず
曲がり角監視カメラに睨まれる
ドキドキと一緒に次の角曲がる
曲がり角決断の時かも知れぬ
子の厄年隣の寺も参つとく
ビル風に飛ばされそうな曲がり角
師の一言暗い気持ちが消えていた
OKかNOでこの先決められる
曲がり角父のタクトに導かれ
食い違う意見夫婦の曲がり角
下向いては見えない曲がり角

八尾市 高杉 千歩
豊橋市 藤田 千休
三原市 笹重 耕三
箕面市 大浦 初音
奈良市 森中 博一
倉吉市 大羽 雄大
米子市 中原 章子
白河市 鈴木たけし
米子市 後藤美恵子
弘前市 福士 慕情
三田市 村田 博
堺市 矢倉 五月
八尾市 村上ミツ子
大阪市 藤原千恵子
堺市 坂上 淳司
神戸市 上田 和宏
大阪市 坂 裕之
生駒市 飛永ふりこ
三田市 久保田千代
池田市 上山 堅坊

Uターンもうここからは気取らない
紆余曲折繰り返してつづ来た絆
忍び足角を曲がってから走る
君とのこと出合い頭の事故でした
曲がり角杖の倒れる方へ行く
曲がり角はくの磁石は酒を指す
曲がり角少し止まって風を読む
曲がる度大きく丸くなる男
曲がり角ひとつ違ってから迷路
運不運みんな見て来た曲がり角
岐路に立つときは必ず右曲がり
曲がり角ここに仮面が置いてある

佳句

神さまが私を試す曲がり角
あの角を曲がり未来へ踏み出そう
人生の曲がり角には母の声
引き返す勇氣も欲しい曲がり角
曲がり角翼広げる用意する

人

曲がり角越えて人間らしくなる

地

曲がり角曲がる 強まる軍事力

天

日めくりを一気にはがす再起の日

軸

煩惱が目覚める春の曲がり角

藤井寺市 太田扶美代
東大阪市 北村 賢子
堺市 村上 玄也
奈良市 大久保眞澄
札幌市 三浦 強一
香南市 桑名 孝雄
東大阪市 佐々木満作
富田林市 山野 寿之
和歌山市 喜田 准一
弘前市 稲見 則彦
大洲市 花岡 順子
佐賀市 真島久美子
鳥取市 岸本 宏章
上尾市 中村 伸子
豊橋市 西郷紀美代
高槻市 富田 保子
宝塚市 田中 章子
三田市 上垣キヨミ
弘前市 高瀬 霜石
青森県 松山 芳生

「世話」

(投句 243名)

成 田 雨 奇 選



順繰りにお世話され合う生きる道
世話好きが介護に生きる世の流れ
為し遂げた介護に我を自画自讃
母の自負傷つけている下の世話
糠床の世話に昭和の香りする
風邪見舞熱々おでん隣から
頼まれて世話した夫婦砂掛ける
さて次の世話になるのは何科やる
世話をした牛送り出す辛い朝
お接待受けて巡った遍路旅
世話好きなひとの軽くて低い腰
黙々と奉仕に励む舞台裏
世話好きで下戸で万年幹事役
下世話ではあるが長らく生きた
世話になるはずの子供が居候
見ちゃあいらねえぜと世話を買ってでる
世話をした土のもらす実が甘い
自立心世話が焼けた子ほど早い
世話好きなら女房傍で妬く亭主
眠れない時はラジオの世話になる

鳥取県	門村	幸子
堺市	大和	峯二
紀の川市	楠原	富香
尼崎市	清水久美子	
大阪市	内田志津子	
西宮市	福島弘子	
藤井寺市	田付絹枝	
高槻市	富田保子	
和歌山市	磯部義雄	
三田市	村田博	
和歌山市	北原昭枝	
紀の川市	山東日出男	
堺市	澤井敏治	
紀の川市	辻内次根	
米子市	池田美穂	
弘前市	高瀬霜石	
豊中市	水野黒兎	
米子市	中原章子	
鳥取市	谷口回春子	
倉吉市	中村毅	

医者よりも世話になつて貼るカイロ
悔しいがやはりルーベの世話になる
他人ばかり写していつも欠けている
世話好きなら小鳥赤い実植えてつた
世話女房何にもできぬ人が好き
世話焼けた亡父でも僕の心柱
球根を肥らせ夢を繋いでる
寒い日は世話物読んで暖を取る
あと少し世話は掛けぬと四股を踏む
呑み会の世話役ならば買って出る
妻多忙ボクのご飯はネコのと
音もなく世話を焼かせる春の雪

佳 句

堺市	奥時雄
西予市	黒田茂代
高槻市	原洋志
大阪府	高木道子
橿原市	居谷真理子
高槻市	初代正彦
富田林市	関よしみ
八尾市	山根妙子
大阪市	笠嶋恵美
三田市	堀正和
奈良市	大久保眞澄
倉吉市	牧野芳光
豊中市	上出修
河内長野市	穂口正子
八尾市	山川寧
上尾市	中村伸子
米子市	後藤美恵子
河内長野市	谷久美子
高槻市	富田美義
紀の川市	宇野幹子

天 軸

桜咲く春へ姑を抱きおこす
人の世話ばかりで終りそうな妻

初しよ教室

題一 掴む

居谷 真理子

今月の課題は「掴む」。私たちも伝えたいことをしっかり掴んでから十七音字に整えましょう。あれもこれもは無理、焦点は一つに絞ります。

(原は原句 参は参考句)

原 五七五掴みそこねた鰻かも

(東)美智子

参 掴めない鰻にも似て五七五

原 福豆を掴み横綱告げる春

道子

「春」は言わずもがな。横綱を強調。

参 横綱が豆を掴めば鬼は逃げ

原 最後のチャンス掴みそこねて振り出しへ 清司

参 あめのチャンス掴みそこねて振り出しへ

原 驚掴みしたい相手に爪立たず 博一

参 驚掴みしたい相手に立てる爪

原 国民の心を掴むトランプさん 律子

参 国民の心掴むトランプ氏

原 お日様を両手いっぱい赤子の手 義徳

明るい句ですね。「手」が重なりました。

参 お日様を丸ごと掴む赤子の手

原 雑誌から心を掴む表紙の絵 紀美代

参 表紙から心掴んでくる雑誌

原 兄弟でのり巻き掴む食べ競う ミヨノ

参 兄弟で競って食べる恵方巻

原 一歩ひく掴み所を持たぬ女 明子

参 ひかえめで掴み所のない女

原 晩学の意識高揚辞書つかむ 秀光

参 晩学の意気高らかに掴む辞書

原 チャンスです夢を掴んで走りたい 英男

参 チャンスです夢を掴んで突っ走る

原 チューリップ春を掴まえ新芽吹く 洋一

参 チューリップ春を掴んで吹く新芽

原 UFOキャッチャー掴み損ねたぬいぐるみ 一彌

参 UFOキャッチャー逃げたぬいぐるみが笑う

原 UFOキャッチャー掴みきれずにまたコイン こみつ

参 UFOキャッチャーまたもコインを掴まれる

原 路の臺掴んでたしかな季の温み (燭) 節子

参 路の臺ぞつと掴んだ季の温み

原 うちの人掴みどころのない人だ 温子

参 うちの人掴みどころのないお方

原 明日つかむハートにしみるコップ酒 (門) 幸子

ハートとコップ酒、何だかミスマッチ

参 明日掴む意気地にしみるコップ酒

原 瀬戸際で掴む一本薬探す 孔一

原 揺れるバス吊革掴み身を託す (貝) 正子

「掴む」「掴み」は入れずとも

参 瀬戸際で薬一本を探してる

参 吊革にこの身を託し揺れるバス

原 つかんでもつかみつけて逃げられる 真一

参 掴んだのに掴み続けて逃げられる

原 喉からも手が出て匂を掴み取る 真

参 喉からも手が出て欲を掴み取る

原 胃袋を掴み良縁孫娘 厚子

説明過多。「胃袋を掴み」に焦点を絞り

参 胃袋を掴み良縁引き寄せる

原 川柳を夢の中まで掴んでる (山) 久子

面白い句です。こんな詠み方もありますよ

参 川柳に夢の中まで掴まれる

原 国会答弁わざと要点掴ませぬ なつみ

参 国会の答弁尻尾掴ませぬ

原 民衆の心は手では掴みません 寧

参民衆の心掴めぬ汚れた手

原初孫は家族皆なをわし掴み

(田)廣子

皆は「みな」「みんな」と読めますね

参初孫は家族全員わし掴み

原成り行きで掴んだ縁も金婚を

勝正

参成り行きで掴んだ縁で五十年

原老いのハート掴んでみてはどうですか

原八起き目で掴めましたか女運

主人公を自分にして強い句に

参僕のハート掴んでみてはどうですか

参八起き目で掴めましたよ女運

原コーヒーをのんで心を掴んでる

参コーヒーを飲む間に心掴んでる

原裏切られ掴み洗いで落ちぬしみ

参裏切りの掴み洗いで落ちぬしみ

原掴んだら離したくなる幼児性

参掴んだら離したくなる癖がある

原近寄った運を生かせぬ器量です

参近寄った運も掴めぬ僕の指

原大金を掴み分からぬ使い方

参大金を掴み途方にくれている

原しっかりと乳房を掴む新生児

おっぱいを飲んでいる情景でしょうか

参一方の乳房も掴む新生児

原お御籤で掴んだ当たり放さない

参御籤で掴んだ吉を持ち帰る

原だとしても掴んだ薬は頼られぬ

参掴んだがやはり薬には頼られぬ

原明日のため掴む哲学そこかしこ

参明日のため哲学掴む昨日今日

原逃さぬと焦った警句ババ掴む

参逃さぬと追って掴んだババの札

原掴む風右手左手相違あり

独自の発想、表現が固くて残念！

参風掴む右手左手それぞれに

原何事もこつを掴むに時間かけ

参何事もこつを掴むに要る時間

原あの時に掴み損ねた恋を悔い

参あの時に掴み損ねたまの恋

原福袋つかむ己の運不運

参福袋つかむ小さな運不運

原掴みたいキラキラ星を背伸びする

原チャンス掴めぬ小心者の私です

助詞はとても大事です。いろいろ差し替え

てみましょう。

参掴みたいキラキラ星へ背伸びする

参チャンス掴めぬ小心者は私です

原大金を掴んだとたん覚めた夢

出来上がった句ですが同想多数

参夢のような金を掴んで覚めた夢

【佳句】

ビヨンヤンへ夢を掴みにアスリート

掴めたとかナブン見せる得意顔

辛掴む友に笑顔を整える

初登園ママの手ぎゅつと放さない

掴んだら放さないのが僕の主義

努力して掴める夢もあると知り

倅せの尻尾掴んで放さない

幸運を掴んだはずの玉の輿

運掴むために握力鍛えてる

掴まり立ちそろそろ靴をプレゼント

長い爪上手に使う掴み取り

【今月の推せん句】

こつ掴み面白くなる手内職

掴み取ったトップの地位を持って遊ぶ

言葉尻掴まれ風が吹きはじめ

紀雄

亜希子

旅人

知津子

敏昭

里子

俊雄

池美穂

福貴子

由美

近藤 治子

坂上のり子

高橋 敬子

川柳塔鑑賞

同人吟 水野 黒 兎

―3月号から

落ち椿小さな秘密抱いたまま

山 本 希久子

椿の花がほとりと落ち、なおも地上でその赤い色を留めているのを見て作者の胸に唐突に、或は必然的に湧き上がる思いがあつた。自分を支えてきた何らかの信念または矜持といったもの。人に示すようなものではなく、密かに抱いてきた小さいけれど色褪せぬ私だけの秘密、そんな秘密をいつか果てる時までそつと抱いていまいしうといった思いであらう。

書き初めは「カ舞吼」と決めて腕まくり

岸 本 清

今年こそ飲みたいトラの祝酒

寺 川 はじむ

「カ舞吼」とは歌舞伎の語源となつた「傾く」をもじつた造語で、今年の広島カープのスローガン。一方「挑む」がタイガースのスローガン。ベテランと若手が丸となつて挑み、祝い酒となるか。

人間を斜め切りしている噂

古今堂 蕉 子

真正面から堂々と勝負を挑まずに、闇討ちのように不意に横から刃が襲つてくる。日常の生活の狭間で、またネット上での中傷や根も葉もない噂話を「斜め切り」という卓抜な楚辞で表現をした句。つまりらぬ噂などには負けぬとの気持ちが現れている句と感じました。

凜とした背筋八十路を駆け抜ける

岡 本 昇

八十、傘寿、八十路、八十路坂などの言葉の句が多くあることに気づきました。この句は「凜とした姿」が梅の古木にも似た味わいを示す気持ちの良い句。一方七十がまだ若いよと言われている

七十がまだ若いよと言われている

浅 田 隆 樹

といった句があるように、若いかな否かは年齢が必ずしも絶対的要素ではなさそうで百寿から見れば卒寿も傘寿もまだ若く

じわじわと迫る老いなど背負い投げ

鳥 田 千鶴子

といった嬉しい心意気の句もあり、この若々しい気持を私は見習いたいです。

首一つ斬られる覚悟して背く

夏 目 一 粹

もまた見習いたいのが、なかなか真似のできない覚悟であります。

戦々恐々トランプ世界変えまくる

猪 川 由美子

時節柄、このようにトランプ大統領関連の句も多く、総じて新大統領に対して危惧する内容の句でしたが、逆に

オバマさんがやはり立派と立ち話

菅 田 かつ子

と前大統領の株が上がった結果になつて諸川柳子の目は厳しく世を睨んでいます。

生年月日が真つ直ぐに立っている

谷 口 義

艱難あり、喜怒あり、哀楽ありの人生であつたが、今となつてはすべてを肯定的に見ることが出来る。そんなご自分の歴史を生年月日と表現し、それが真つ直ぐに立っているとは実に見事な、かつ羨ましい境地に到達されていると感嘆する。

ピーマンがふと虚しさを口にする

永見 心咲

ビタミンが豊富で緑黄色野菜の代表格のピーマンであるが、小学生などは味も匂いも嫌いだと忌避するし、中身は空っぽと揶揄されたりで、ほんとにピーマンで可愛そうと作者は同情。

スープ煮る 多分幸福な一日

川本 真理子

ことごとと材料を煮立ててスープを仕上げる。ふくよかな匂いの満ちる台所。「多分」ということばに若干の願望と確信とをないまぜて、今日のひと日の予定をあれこれ考えている。

さつと席立ちそよ風になる少女

梶原 弘光

そよ風になった少女とはいひ表現ですね。せつかくの厚意、ありがとうのひと声を添えて譲られた席でひまわりにでもなつてそよ風に揺れることにしましょう。

お互いが掘り出しものと笑い合う

吉村 久仁雄

丈夫で長持ち、年を経ることに味わいの増す見事なご夫婦。琴瑟相和すとはこのことでしょう。

極上の声でひとりの電話口

徳山 みつこ

とろけるような甘い声だろうか、めりはりの利いた知的な声かな、それとも透明な声だろうか、などと想像するのも楽しい句。向う側の電話の声もきつと迦陵頻伽の声にちがいない。

ふる里を守る人いるクラス会

奥澤 洋次郎

ふる里を出ることもなく、ひたすら代々の家業や農業を引き継ぎ、地元にしつかりと根を下ろした同級生がいることを誇りに思い、畏敬の念を抱いた句。

言い勝って負わせた傷を思いやる
不問に付した傷の重みがつきまとう

久保田 千代

支え合って生きる人間の微妙な関係をやさしく表現した「思い」の深い、地味ではあるが人情の機微に触れた二句。

日に一度じつと手を見る爪をみる

石谷 美恵子

じつと手を見るだけなら啄木が百年も前にやっている。対句として「爪をみる」と付け足したところにこの句の妙味が生まれた。

岩塩で育ったにちがいない頑固

吉田 孔美子

頑固さを表現するのに類を見ない絶妙な発想の句。岩塩と頑固の頭韻が見事で「ちがいない」の「が」音がそれを更に強調の効果をあげている。とは言うもののこの頑固さに何か愛嬌が感じられるのは岩塩効果でしょうか。

新薬にマウスの屍累累と

竹村 紀の治

一つの新しい薬が誕生するまでには実に長い期間の研究・実験の繰り返しが必要であり、やつと有望と思われる物質が見つかると有効性、副作用などを研究のため、動物実験をすることになり、多くの場合、マウスが利用されるわけです。多くの製薬会社では人類のためにこうして犠牲になった実験動物たちの供養の行事を毎年行っています。

いまはむかし許し合つ日の真珠湾

まえで とよこ

一線を越えヒロシマと真珠湾

加川 靖鬼

オバマ氏のハグと折り鶴無にするな

安福 和夫

水煙抄鑑賞

— 3月号から

山田 葉子

ストレスは誰にでもある通りゃんせ

高良 秀光

アチコチ寄り道しながら、うちにもやって来たストレス君。ま、素通りも出来ないだろうと懐の深い秀光さん。ストレス君も長居はしないでしよう。

ひらがなの子にひらがなで返事書く

中山 春代

読む人の心を温かくする句で、リズムもいいですね。春代さんからのひらがなの返事が届いて、喜んでいるお孫さんの様子が目に浮かびます。

夕べまで持てぬ起きがけの決心

大羽 雄大

私も、朝「今日は机の上を片付けよう」などという、ささやかな決心をしたのに実行できないことがあるので、同じような方がいらつしゃると、安心しました。

草に寝て宇宙のパワーひとり占め

日野岡 和之

少年少女の頃を思い出させてくれる一句。あの頃は恐いものなんてなかった。歳を重ねても、少年の目と心を持ち続けている作者に拍手！

まあいいか呟き軽くする心

伊藤 良一

「まあいいか」と自分に優しくしていると、他人にも優しく出来るような気がします。軽くなった心で、まわりを明るくしてあげたいですね。

主夫力を試されている妻の風邪

田中 ゆみ子

「寝てたらいよいよ」と優しく言ってもらって寝ていると、食事は出て来ない。結局、ふらついた頭で起き出して、食事の仕度をした主婦も多いのでは。

エレベーター見知らぬ人と居る不安

貝塚 正子

ドアが閉まりかけたところに飛び込んできた人と、わずか数秒か十数秒でも、密室で二人きりになると不安を覚えます。その点シースルーのエレベーターは、誰かが見てくれているようにいいですね。

行った気でテレビ楽しむ美術館

小 栢 こずえ

いつか出掛けて見るはずだったが、結局行けなかった世界の美術館。今はテレビで美術館巡り。今日はスペインへ飛んでプラド美術館。来週はフランスへ行っでルーブル美術館。テレビって便利……。

自分から年は名乗らぬこととする

児玉 規雄

「聞かれたらパンダの年と言うの」と言っている友達がいますが、年齢不詳でいつも若々しいです。歳にとらわれずに、前向きに過ごしていきたいですね。

ボロボロと喧嘩相手が欠けていく

鴨田 昭紀

お互いに何を言っても、何を言われても続いて来た仲間が、最近一人また一人と旅立つてゆく。まだまだ仲良く喧嘩をして、元気をもらいたかったのに。

お互いに耐えたと思っ夫婦仲

脇田 雅美

私ばかりが耐えてきたと思っていたのに、オヤツ、お互いだったのかと気付かされる時がありますね。お互いに謙虚に向き合えるのがいいですね。

第23回 川柳塔まつり

と き 平成29年10月7日(土)

開場：午前11時 出句締切：正午 開会：午後1時

ところ ホテル・アウリーナ大阪 4階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 (近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車) 電話 06-6772-1441

《同人総会・議事》午前10時より

平成28年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成29年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「おじいさん、おばあさん」 川柳塔社 西村哲夫氏

兼題 「もしも」 鳥取斉尾くにこ選

「歌」 兵庫久保田千代選

「追う」 愛知早川遼行選

「プレーキ」 青森福士慕情選

「時間」 番傘川柳本社 主幹 田中新選

事前投句 「魚」(9月1日必着) 川柳塔社 主幹 小島蘭幸選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正午(午後5時頃終了予定) ※各題の「天」位に賞呈

◎会費 2,000円(当日頂きます) ご昼食は各自でお済ませください

◎呈 記念品

《懇親宴》

と き 平成29年10月7日(土) 午後5時～7時

ところ ホテルアウリーナ大阪 3階 葛城の間

☆会費 7,000円 先着申込み 130名様

☆宿泊 ホテル・アウリーナ大阪 8,000円(朝食付き)

* 事前投句および懇親宴のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(ご希望の方は事務所)にて9月1日(金)までに本社事務所宛、お送りください。

* 懇親宴のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主催 川柳塔社

大阪市天王寺区大道1丁目14-17-201
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490
振替 00980-4-298479



(投句 281名)

暦の上ではもうすっかり春なのに寒いですねえ。毎年、こんな言葉を挨拶代わりにしています。



なごり雪の美しさに見とれたり、「やっぱりお水取りが終わらないと温かくならないね」などと、その昔、おばあちゃんが同じことを言うていると笑っていたのに、自分もきつちり同じことを言っているの思わず苦笑、です。

それではナビと一緒に。

羽曳野市 吉村久仁雄

おろし金次の出番はいつだろう
(評) おろし金を使う料理はごく日常的と思っただけ、そうでもないのでしょうか。出番、どんどん増えてほしいです。

松山市 栗田 忠士

独り居の私を包む月の暈

(評) 雨が近付いてくる証の月の暈は、

それでもじんわり温かい。独り居の身に自然は厳しく、また、優しいのです。

河内長野市 山岡富美子

お互いに発光体で手暗がり

(評) それぞれが発光体としての役にはたっていないところがミソ。必要としているようでありしていないようであり。

寝屋川市 森 茜

わたくしのオアシスそつとしてほしい

(評) 大切なオアシスは往々にして無礼者が進入してきます。それは人間だけとは限らないようです。

橿原市 居谷真理子

かまぼこも板と別れる時が来る

(評) なーるほど、こんな発想があったんですね。今度、かまぼこを食べる時は何だか切なくなってしまうそう。

枚方市 小林 わこ

何事も君のためですあしからず

(評) こんなふうに言われてしまえば反論の余地はございません。おっしゃっている御方のなすがまま、ですか。

沖繩県 森山 文切

飲み込んだ言葉は月になりました

(評) ポエムですねえ。飲み込んだ言葉は我が身の内で満ちたり欠けたり、物語を紡いでゆくのでしょうか。

枚方市 海老池 洋

今日というページを元氣よく開く

(評) やさしい一句ですが、こちらにも

元気が伝わって来て力が湧いてくるような気になってきました。

神戸市 奥澤洋次郎

憧れの地は砲弾の中にあり

(評) 世界中がすべて平和な時は残念ながらありません。美しい国の有形無形の宝物が、この一瞬にも壊されています。

貝塚市 石田ひろ子

文豪をスマホで軽く読む息子

(評) あんなに分厚く、何冊にも書かれていた名著も、今や指先ひとつでスライスイ、時代は変わったと思うことしきり。

島取市 永原 昌鼓

プロポーズ月夜はよした方がいい

自尊心まだ少しありハインズ読む
大変だ日本語これにかけている

大阪府 石橋 直子

大花野からふわり招待状届く

ユニークな友達だけを待っている

長野県 丸山 健三

立て札に気づかなかつたのが不覚

ヒッチハイク私に魅力ないらしい

日置市 前田 洋子

誤字脱字ないかと句会掲示板

月の夜に一日一善を誓う

東大阪市 佐々木満作

河内長野市 谷 久美子
楽譜見て覚える迄のドレミファソ

倉吉市 山中 康子
トランプの強気世界がヒビワレル

米子市 八木 千代
フロントに返し忘れたルームキー

尾道市 大本 和子
ラストオーダーまで十秒という焦り

大阪市 坂 裕之
大げさに理屈並べて腹探る

札幌市 三浦 強一
国境へ壁メキシコへ請求書

男鹿市 伊藤のぶよし
母さんの愚痴が聞けない七回忌

紀の川市 辻内 次根
無花果の葉っぱ初めの隠し事

鳥取県 斉尾くにこ
寒がりで打たれ弱くて庶民です

弘前市 浅田 隆樹
メニューには津軽言葉も載せてある

横浜市 菊地 政勝
生きている実感が沸く僕の影

鳥取市 夏目 一粋
花びらの軽さになってゆく余生

姫路市 古川 奮水
猫だってパンチぐらいは持っている

富田林市 中井 アキ
英文の付箋を付けて返される

大阪市 原田すみ子
ややこしい取説読んで夜になる

河内長野市 中島 一彌
赤提灯俄然元気になる御仁

松江市 石橋 芳山
恋文は大和文字にてそうらえば

塩竈市 木田比呂朗
夜桜に影も後からついて来る

海南市 堂上 泰女
青空をキャンパスにして梅開く

弘前市 稲見 則彦
夜の指定席ひとりぼっちじゃねえ

神戸市 細川 花門
どっちみち裏から見ても読めません

唐津市 坂本 蜂朗
人間の住めない土地を売りに出す

弘前市 高瀬 霜石
国境があるから核がなくならぬ

大阪市 若本 安代
掲示板歓声あがる宝塚

鳥取市 山下 凱柳
横文字で私を試す気なんですよ

三田市 北野 哲男
保険証医者ハシゴがまだ出来る

岡山市 永見 心咲
月欠けていまだ源氏は思案中

大阪市 江島谷勝弘
五十億年後太陽はあある

上尾市 中村 伸子
招待状お持ちでしょうかお嬢さま

箕面市 広島 巴子
月旅行サインしたいがまだかしら

大阪市 森 廣子
影法師連れて夜道を一人行く

高槻市 松岡 篤
思春期はイケナイ本を回し読み

河内長野市 藤塚 克三
絵馬に書く願いの言葉多すぎる

和歌山市 玉置 当代
急がねば乗り遅れるぞ終電車

佐賀県 真島久美子
偏差値は他人のものになりました

枚方市 丹後屋 肇
陰と陽真実説いているらしい

河内長野市 木見谷孝代
日脚延び虫も私も動き出す

堺市 坂上 淳司
虚飾など不要シンプルイズベスト

和歌山市 北原 昭枝
待ちぼうけ平常心でじっと立つ

熊本市 杉野 羅天
気取った方がいいが分からぬフランス語

玉野市 片岡 富子
ライバルにも弱点あると欲が出る

6月号発表 (4月15日締切)



(平本 勝彦 画)

柳箋に2句

本社 三月句会

◇三月七日(火) 午後一時
ア ウ イ ー ナ 大 阪

寒の戻りを思わせる七日、三月句会は一二六名(投句六名)の参加で開催された。初出席は永田紀恵さん(尼崎市)。句会に先立ち過日亡くなられた参与恒松町紅さん(松江市)に黙祷を捧げた。

今月のお話は藤井則彦氏。題は「日本人と来世」。高齢化が進む中、今こそ「死」について深い理解を抱く事が充実した人生を送るためにも大切と思われる。昨今、来世を信じる人が増加。これは、あの世があると思えば死もあまり怖くなくなり、気持も少しは楽になれるということだろう。氏の心に響いた先達の言葉や句を多数紹介して締め括られた。

その中から代表して次の三句を掲載。
子よ妻よばらばらになれば浄土なり 路郎
この世からあの世は見えす差し向かい 薫風
あの世からこの世は見えて差し向かい 薫風

月間賞は 小山紀乃さん(西宮市)
(司会―蕉子・真理子)(協取―扶美代・隆彦)
(受付―久仁雄・志津子)(清記―憲彦)

席題「竹」 藤井 宏造 選

まだ言えるタケタテカケタ大丈夫
青竹を踏んでやせれば世話がない
積まれても竹馬の友は裏切れぬ
竹とは屋根の向こうを見ておいで
竹割ったような女でまだ独り
竹撓う母の姿に重ね見る
手間かけた筍飯に友集う
原爆に竹槍ついていた戦
青竹を踏んで老化に立ち向かう
竹割った様な娘が迷う恋
老舗だなお肉は竹の皮である
おむすびに復活したい竹の皮
トランプを向こうに竹のしなやかさ
子に面倒かけられないと竹を踏む
竹トンボ飛んだ昭和の肥後の守
懸命に生きております竹トンボ
苦にも耐え竹のしなりのような母
くすくすば茶筌も武器に早変わり
竹みつを大上段に振る首相
竹島が日本海で眠れない
母さんの竹の物差し痛かったり
竿竹屋声を掛ければほったくり
竹の節春の気合を響かせる
冬ざれに孟宗竹の葉がゆれる

三条を覚えて竹槍持たすのか
臘月ばくはかぐやと手をつなぐ
竹の子が好き松茸はもつと好き
絵を描いて子らに教える火吹き竹
粘りない男を笑う青い竹
内職に亡母がしていた竹細工
雪融けの川へ笹船流し雛
由布院の竹製バッグお気に入り
竹籠に春の息吹のアラカルト
竹馬の友旨いお酒にしてくれる
竹の根のように繋がる飲み仲間
月の夜は裏の竹やぶ見て廻る
竹光で死ぬる端役の名演技

佳

被災者に竹の灯籠鎮魂歌
戦争なら竹鉄砲でしませんか
竹人形のひと節ごとにある祈り
竹いっぱい植えて地震に備える
若竹の勢い嫉妬してしまふ

人

竹人形はなんなり語る秘めた恋
地
竹の子の意地踏まれても目指す天
天
姑の喪明けに竹の花が咲く
軸
竹とはあの娘の前で急降下

三宅 保州
栃尾 奏子
古今堂蕉子
水野 黒鬼
海老池 洋
黒岩 靖博
加川 靖鬼
木藤こみつ
木本 朱夏
鈴木 栄子
新家 完司
吉岡 修
升成 好
森 廣子
三宅 保州
西出 楓楽
江島谷勝弘
安土 理恵
渡辺 富子
村上 直樹
清水久美子

兼題「損」 大久保眞澄 選

惣領に残った物は親と墓
損はせぬ得しなかつただけの事
飲まずだけ損底抜けてございます
僕の場合は顔でいっつも損をする
五割引きやもん買わんと損やもん
君のためなら骨折り損も厭わない
余計なこと喋って損をしたカラス
軋んでもしかりお墓子握つてる
出血奉仕損をしているはずはない
損やなあ息子やつぱり嫁につく
民主主義黙って居たら損をする
夢しばし損を承知で買うジャンボ
身体ごと損を引き受け不意に逝く
おこぼれは拒否 善人のやせ我慢
損をしてなにわ商人得を取る
今日もまた割り勘負けの苦い酒
踊らにや損という程でない阿波踊
貧乏くじ引いたと妻の二言目
家計簿を開けば黙り込む夫
株屋です決して損はさせません
買うとすぐ待つてましたと下がる株
結局はかぶる幹事の小額入れ
この損はカジノ出来たら取り返す
損したらなおのめり込む依存症

上垣キヨミ
富永 恭子
川端 六点
太田扶美代
居谷真理子
安土 理恵
山本希久子
能勢 利子
山田 耕治
矢倉 五月
前田 紀雄
澤井 敏治
小野 雅美
吉村久仁雄
坂上 淳司
能勢 良子
清水 英旺
海老池 洋
山崎 武彦
松浦 英夫
永田 紀恵
緒方美津子
吉岡 修
松岡 篤

損したと後で気付いている財布
姉ちゃんのお古はつきり着せられる
イケメンで頭も切れる兄がいる
お兄ちゃんでしよと損な役まわり
口に出して言える損ならまだ軽い
損しても胸を張ってる男伊達
厄除けのつもりで掛けてます損保
なんでやねん黒字地下鉄民営化
損をしたような気がする休刊日
損してもいいよと役を買って出る
飲み会の下戸の財布は愚痴っぽい
四季報を遺して父は損ばかり
五円玉拾いギックリ腰になる

能勢 利子
鈴木いさお
森松まつお
木本 朱夏
升成 好
肥山 一文
荻野 浩子
江島谷勝弘
西出 楓楽
小山 紀乃
木本 朱夏
米田 恭昌
新家 完司

もう一枚買えば一等だったのに
百均で買うて次の日もうつぶれ
公害で地球の機嫌また損ね
駐車代けちり罰金刑にあう
リベンジのパチンコ返り討ちに遭う

住
内藤 憲彦
山田 耕治
水野 黒兎
島田 誠一
米田 恭昌
村田 博
時ぞで損も出来ないキャッシュレス
ものすごいロス腹立てている時間
天
ああの時の損が子を連れ礼に来る
好きでいてください損はさせません

軸
萩原 狸月

兼題「リボン」 矢倉 五月 選

永すぎる総理の胸の青リボン
栄光のリボン内助の功ちらり
来賓のリボンが欠伸する祝辞
さよならがりボン結びで座つてる
リボンかけてお返ししますそのイケズ
二次会は主賓のリボン邪魔になる
来賓のリボンのバラがエヘンエヘン
リボンの騎士は夫だったと今気付く
リボン不要軽くて貴重日本券
リボン付きの妻の下着を干してます
美辞麗句言葉のリボンだと思ふ
チームメイトの急死へ袖に黒リボン
初恋はリボンの騎士をやった頃
青いリボン拉致の嘆きはいつ終わる
胸のリボン背広でないと似合わない
勲章の代わりに女リボン付け
贈り物の証にリボン付けてやる
小指のリボン彼女に出会おうおまじない
リボン付け母にこにこ子に還る
たらい回しするのになリボンだけ換える
入れ知恵をしたのね紫のリボン
主催者のリボンがちよっとでかすぎる
来賓の胸のリボンを値踏みする
蝶蝶むすびのリボンに僕はだまされた

福田 好文
上垣キヨミ
島田 誠一
伊達 郁夫
大久保眞澄
吉岡 修
細川 花門
三宅 保州
前 たもつ
藤井 宏造
海老池 洋
村上 玄也
荒川 鈍甲
山岡富美子
市坪 武臣
籠島 恵子
片山かずお
長浜 美龍
渡辺 富子
川端 六点
安土 理恵
川端 一步
藤井 宏造
安土 理恵

リボンゆらゆら童女になつていく母よ
届くかなリボンを付けた意思表示
老ゆる日日帰国を待っているリボン

兼題 「はつと」

伊達 郁夫 選

ばつと見で歳は言うなとブルドック
肩パット外して丸いお付き合い
一喝でばつとはがれた目の鱗
嫁貰つてばつと明かりが付きました
ばつとした男でないが惚れた人
ローソクの灯りで仏間騒がしい
ご来光ばつと地球が目覚ます
ばつぱつと遣うと気分良いお金
休日にはアバンチュールの草書体
ばつと見はおしどり水中で足蹴
一瞬の際で逃がした青い鳥
悪さしたのか一斉に飛び立った
下車駅になれば不思議と目がさめる

汗知らぬテーブカットの絵空事
喪主になる黒い大きなリボン付け
丁重にリボンを結ぶ介護の手
エプロンのリボン結びが出来ぬババ
以下同文胸のリボンも淋しそう
夢を見るたびに大きくなるリボン
わくわくとリボン解いたら負の遺産
軽音楽に乗って蝶々になるリボン
家裁出るはらりとリボン解けました
ときどきとリボンをほどくあなた解く

空港で堂堂ばつと毒を塗る
ばつと見で人の度量は測れない
ジャンボくじ当たればばつと塔に寄付
最後まで元気に飲んでバツと散る
明日ばつと聞くつもり息づかい
筆跡でばつと名が出る顔浮かぶ
ばつと見は女よく見りや喉仏
切り上げてばつと行こうぜプレミアム
ばつとしない夫長持ちしています
ばつと見で惚れて中身でもつと惚れ
大物をバツサリ斬つた細いペン
足音でバツと離れた影ふたつ
客来るとばつと片付くのが不思議
席ばつと立つてくれたはおじいさん
ばつと来て用件だけで子は帰る
ばつとしない男仕立てる肝つ玉
本物ですバツとなんかありません
ばつとせん男が億の寄付をする
その時は派手に火花を打ち上げる
家中にばつと陽が差す孫の声
ばつと花咲かせたような女に逢う
トランプにバツと褒められ上機嫌
ばつと来て飲んで騒いで消えてった
飲み会ならばつとあつまる友が居る

ばつと見で歳は言うなとブルドック
肩パット外して丸いお付き合い
一喝でばつとはがれた目の鱗
嫁貰つてばつと明かりが付きました
ばつとした男でないが惚れた人
ローソクの灯りで仏間騒がしい
ご来光ばつと地球が目覚ます
ばつぱつと遣うと気分良いお金
休日にはアバンチュールの草書体
ばつと見はおしどり水中で足蹴
一瞬の際で逃がした青い鳥
悪さしたのか一斉に飛び立った
下車駅になれば不思議と目がさめる

指宿千枝子
山野 寿之
太田としお
酒井 紀華
金川 宣子
三宅 保州
籠島 恵子
清水久美子
木本 朱夏
緒方美津子
伊達 郁夫

上垣キヨミ
上垣キヨミ
村上 玄也
新家 完司
関 よしみ
矢倉 五月
鈴木いさお
中川ひろ介
田中ゆみ子
松岡 篤
海老池 洋
川端 六点
能勢 利子
上野多恵子
岩田 明子
飛永ふりこ
安土 理恵
清水久美子
前 たもつ
藤井 則彦
荒川 純甲
安福 和夫
木本 朱夏
江島谷勝弘

村田 博
山崎 武彦
西出 楓楽
市坪 武臣
細川 花門
加川 靖鬼
加川 靖鬼
新家 完司
三宅 保州
島田 誠一
居谷真理子
小島 蘭幸
田中 章子

妻の振るリボンに僕もじゃれている
真心に飾るリボンは無いけれど
三つ編みのリボン解いて少女羽化
かつよかつた黄色いリボン「ジョウウエイ
清らかな涙にかけてやるリボン
人 田中ゆみ子

森松まつお
中村 恵
山野 寿之
江島谷勝弘
藤村 亜成

前田 紀雄
居谷真理子
川端 一步
渡辺 富子
吉岡 修

佳 住
地 地
天 天

地 地
天 天

地 地
天 天

究極のリボンは黒でジイエンド
定年の夫へブルーリボン賞
軸 軸

萩野 浩子
村上 直樹

萩野 浩子
村上 直樹

職人の手元毘布のリボン舞う

職人の手元毘布のリボン舞う

職人の手元毘布のリボン舞う

美しい話に蕾バツと咲く

美しい話に蕾バツと咲く

美しい話に蕾バツと咲く

美しい話に蕾バツと咲く

美しい話に蕾バツと咲く

美しい話に蕾バツと咲く

美しい話に蕾バツと咲く

美しい話に蕾バツと咲く

美しい話に蕾バツと咲く

美しい話に蕾バツと咲く

美しい話に蕾バツと咲く

美しい話に蕾バツと咲く

美しい話に蕾バツと咲く

美しい話に蕾バツと咲く

美しい話に蕾バツと咲く

兼題「似る」 川端 一步 選

謝罪ショーよくもあんなに似たセリフ
悪いところばかり似て来た老い二人
千円も五万も同じ赤ワイン
飼主に似たか遠吠えだけの犬
パパに似てはくに似ているお婆ちゃん
俺に似たのか妻もとうとうドリンカー
深爪に似た後悔がつきまとう
いいかげん苛ち酒飲みDNA
幸せとどこか似ているシャボン玉
抱かれてる遺影と喪主は相似形
俺の子とガッテンをさす通知表
弟はピカチュウ僕はくまモン似
父と子のなんとよく似た飲みっぷり
母さんに似てうれしいと義理の仲
遣伝子の足の裏まで似てるとは
似顔絵を綺麗に描いて誉められる
反面教師ますます父に似る頑固
イチローとカズスの情熱似ています
雛壇に居丈高では似たふたり
犯人に似てるやんかと引張られ
父親の遣伝子だらうへソ曲がり
亡母に似てピンピンコロリと逝つて欲し
戦前に似てきた大国のおこり
妻に似た息子でかなりこうるさい

仁部 四郎
喜田 准一
内藤 憲彦
澤井 敏治
細川 花門
澤井 敏治
升成 好
江島谷勝弘
西出 楓楽
北野 哲男
北野 哲男
清水久美子
能勢 良子
緒方美津子
加川 靖鬼
清水久美子
吉村久仁雄
立蔵 信子
岩佐ダン吉
太田としお
山本 進
松本あや子
柿花 和夫
森松まつお

わたくしに似た人だから大嫌いなんでかな似た人好きになる不思議
縄のれん似たもの同士欄二合
惚れたのは亡母そっくりの片えくぼ
前屈み母に似てきた急ぎ足
本好きが似たかと孫に目を細め
気が付けば亡父にそっくり鼻メガネ
性格が似ても越せない父の旗
姉妹だが似ても似つかぬ派手な顔
嵐越え笑みも丸味も似る夫婦
太き指父そっくりだ鉤眉
マンボウに似ている春のような人
生いたちが似ていていつか無二の友

住

境遇の似た者同士響き合う
赤ちゃんは母と似た声好きになる
フクシマもチェルノブイリも瓜二ツ
地球に似る星へ引越す近未来
凍み豆腐亡母にそっくり妻の味

人

父に似て哀しいまでの愚直なり

地

食べ方も狼に似てきてよくこぼす

天

母さんと思わず呼んでみる鏡

軸

妻に似て娘二人はちと美人

西出 楓楽
山田 葉子
今井万紗子
村上 直樹
松尾美智代
古今堂蕉子
市坪 武臣
遠山 唯教
黒岩 靖博
飛永ふりこ
柴本ばつは
木本 朱夏
米澤 俣子
大内 朝子
山田 葉子
坂上 淳司
渡辺 富子
山野 寿之
鈴木いさお
新家 完司
岩田 明子

兼題「怪 我」 小島 蘭幸 選

よく転ぶ男が何故か怪我をせぬ
若さとは怪我を克服する気力
このシミもあの怪我さえも語り草
心の傷瘡蓋になる五七五
不注意の怪我です仏壇に詫げる
いつの間に折れたか父の肋骨
だれかれと噛みついたので歯が折れた
多少の怪我承知でいこうこれからも
春なのに脚のギブスがまだとれぬ
大怪我をするまで聞かぬ子を嘆く
傷癒すライバルからの挑戦状
妹を庇った怪我は至宝です
勇み足そんな怪我ならいいだらう
怪我を見せびらかしている武勇伝
お皿より怪我を案じてくれた人
走れ蹴れうちのラガーは傷だらけ
額のバンドエイド質問責めにあう
猫のせいにしておく顔の絆創膏
すり傷ぐらいで消毒包帯絆創膏
大きな怪我もせずながらえています
三浪ぐらい怪我のうちに人は入らない
こころの傷やんわり癒す膝の猫
立ち止まる時間をくれた軽い怪我
怪我しても飲んだら治る医者嫌い

福田 好文
水野 黒兎
久保田千代
松尾美智代
居谷真理子
田中ゆみ子
富永 恭子
立蔵 信子
藤井 宏造
藤村 亜成
田中 章子
清水久美子
岩佐ダン吉
村上 玄也
鈴木いさお
米澤 俣子
籠島 恵子
鈴木 栄子
藤村 亜成
江島谷勝弘
岩田 明子
渡辺 富子
山岡富美子
内藤 憲彦

幾山河生きて満身創痍なり

三宅 保州

絆創膏こころの壁に二、三枚

新家 完司

食べて寝て泣いて歌って癒えた傷

木本 朱夏

怪我せぬよう母に持たせた銀の鈴

今井万紗子

怪我したと思うひとつの恋終る

松尾美智代

怪我をして知った私の骨密度

内田志津子

大怪我ですんだと神へ礼参り

海老池 洋

怪我をしてようやく脱皮できました

山岡富美子

こんなにも瘦せちゃった疲労骨折

齋田 寿子

怪我人ゼロのけんか祭りで燃え切れず

吉村久仁雄

怪我人はいない全員即死です

川端 六点

怪我をするほどの責任持たされず

大坪 一徳

自転車で怪我したことは娘に内緒

川端 一步

佳

利き手にギブス酔うてたことはひた隠し

安土 理恵

おでこすりむいても鼻は大丈夫

小山 紀乃

美しい鎖骨に恋の擦過傷

木本 朱夏

事故一つどこにも怪我の無い不安

中村 恵

全没という怪我全治一か月

新家 完司

人

いたわってほしくてかさぶたをはがす

栃尾 奏子

地

交通事故の猫が赤ちゃん座みました

柴本ばつは

天

怪我ばかりしている弟がひとり

小山 紀乃

軸

鬼の形相だった大怪我だった

句会 燦 燦

二月句会を読む

岩 崎 眞里子

どうしよう……五十二句も選んでしまった。全部並べることも出来ないなら鬼になるしかないか。何たって二月なのだから。

ぼそつと言うつぶやき響く子の本音 宏子

子育でのポイントぎゅつと抱きしめる 楓 楽

子ども達を巡る悲しい事件が多すぎる。子らの本音を知っても防げるとは限らないが、知ろうとすることで会話が生まれ、言葉の底に埋もれた心をぎゅつと抱きしめる事だって出来る。

言葉の底に埋もれた心をぎゅつと抱きしめる事だって出来る。

言葉の底に埋もれた心をぎゅつと抱きしめる事だって出来る。

砲声の響く国にも呱呱の声 狸 月

愛されて愛するために居るこの世 眞理子

お伽話最後は善が勝っている かずお

悲しみは子ども達を巻き込み砲弾は今も飛び交っているが、何時の時代にも呱呱の声がある。耳に馴染んだお伽話には愛された記憶があり、愛するために生まれて来たんだと思える。

滔々と落ちる私の中の滝 美智子

メンドリが鳴いて始まる一大事 朱 夏

大声で泣きわめきたい時ほど、涙は無音の滝となり裡へと落ちていく。その静けさを切り裂くのは雌鳥。ごはんだよー。

脳味噌も手首も膝も固くなる 完 司

そうそう、腰も肩も背中も臓器も……それから、意思も絆も、結局は水に結局は土に 理 恵

可燃と不燃の選別ではない。目に見える物は土に、見えない

思いは水に……だろうか。句意を考え、しばらく立ち尽くした。

人生八十年煎じてみれば一行詩 花 門

私も八十歳になって言ってみたくなった。心の底で蘭幸さん

の「負けたまままで終わるいいではないですか」を唱えながら。

ゆつくりと西へ夕陽もわたくしも 希久子

終章へ向かう子守唄のように、ゆつくりと沁みてきた。

終章へ向かう子守唄のように、ゆつくりと沁みてきた。

心をゆめ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。

編集部

翠洋会(大阪)(前月分)佐々木満作報

ボランテアに希望のひかり垣間見る げんえい
希望と言う夜汽車今頃どの辺り 桃花
書初めの希望と言う字の墨の濃さ 捷也
シヨートステイ別な希望が湧いてくる 千歩
鳩胸に希望いっぱい娘は二〇歳 恭昌
貧しくても心の中に虹を持つ 昭
御年玉希望も添えて配ってる 舞夢
身の丈に合った望みをあたためる 理恵
夢の翼全開にして飛ぶつもり 富子
まだ希望あるのできつく叱っとく 楓楽
晩学の明日へ希望の寒椿 弘子
白寿まで生きる望みよ初ひかり 志華子
お茶の間は家族の絆太くする 満作
ちぎれ雲あはれは昨日の私かも みつ子
最大の味方はいつも家族です 日の出
家族の顔ひとりふたりと千の風 良子
赤ん坊日毎家族の顔になる 敬子
次郎法師井伊を守った女となり 蕉子
家族写真ばあちゃん一際ささくになり 紀子

卒寿過ぎ日々安穩に過ごしたい
人情が薄い都会に星が無い
古希の身に返り花など咲かせたい
桜咲いたさくら見に行こう
酉年はさんずい偏の酉で明け
見栄はって転ばぬ先の杖を拒否
断捨離の途中去年の餅にあう
お正月高いおせちは見えてるだけ
これからを想う胸底雪しきり
生命線くつきり強かに生きる

川柳塔鹿野か月鳥取(前月分)福西

晩年にキラキラ光る趣味さがある
キラキラとした昔の君と僕
キラキラの明日へ生きる一・二・三
恋びとの前もうしろもキラキラだ
きらきらと光る涙は武器となる
復興の見えない絆輝やいて
風上げでかつこつけすぎ腰ひねる
電線で首つりしてる奴風
ビニール風春風いっぱい空に点
しがらみの糸断ち切れず宙に舞う
風の糸切れちゃダメよと赤にする
手造りの風が笑って舞う平和
明らかな失敗隠し玉の興
あんな誰しらばくれるオタクスキめが
あの国はしたたかだけど民賃し
ありがとう幸福という宝物
飽きが来た四角四面の建前論
後がない死んだつもりで立ち向う
お荷物をしょってばかりのお人好し

照子 正雄 すみ子 義 浩二 公平 眞澄 善之 希久子 集一

茶子報

みさ子 草文 富久江 螢 綾子 小鹿 幸美 重忠 実満 恒作 振満 鯉子 蟹郎 照彦 京 さいお 盛桜 ゆり子

小荷物が届くと子らは開けたがる
提げるより担いだ方が荷は軽い
検診日胃に荷物ありますぐ手術
神からの初荷はいつも福袋
やがて着る胸に荷札の着いた服
荷崩れも絆をこわす程でなく
今はもう重い荷物の田や畑
明日から仕事はすると高いびき

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

煩惱を越えてムクムク湧く野心
ランドセル夢を詰め込みムクムクと
ムクムクと噂の種が風に乗る
セロファンを剥くとうめきだす未完
原子雲ムクムク広島が消えた
揺れてゆくふくらんでゆく山がある
病院にあって無いのか老人科
大山を望んで暮す贅沢さ
望むのは七福神が我が家に
望むのは日本人の横綱だ
この道はきつと望みが叶いそう
欲張った望みラララと散っていく
お望みであれば裸になりましょう
ペランダで大山望みながらお茶
いっぱいの望みがあつた若かつた
望むのは海を見ながら尊厳死
もう少しコチラにお邪魔致します
目を閉じれば望みどおりの空がある
演芸会大根役者ひとあはれ
大根を双手農大応援団
ふくよかな足もやれやれ干し大根

かおる 恵 好幸 すみれ 茶子 孔美子 弘子 和子

泰山 道子 紀美恵 くにこ 照彦 美彦 公恵 滋 悦子 陽之助 美恵子 美知恵 石花菜 龍枝 瑞野 紀の治 芳光 久芽代 玲坊 節子

大根を食べております平和です
大根を抜いた穴から叫び声
新年会大根役者せい揃い

しわしわの切り干し大根になった
そのままでいいんだ君も大根も
大根も天下をとったおでん鍋

川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報

菜園は一番すきなオアシスだ
節分に風邪を引くなよ鬼は外
向う傷ない男など日向水
老いの坂城が似合いの顔となり
調節がきかぬこころの空模様
お餅好き愛す杵搗道の駅
孫箏式幸せ満ちた別世界
冬空にサザンカの花勇気出る
孫が来る喜びくれるお年玉
ぬるま湯のような正月いいのかな
ちよこつと笑うだけでも幸せが

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

友情と愛情不器用に揺れる
我が輩は不器用過ぎるガンコ者
不器用で誠意ある人好ましい
不器用な父のお世辞は固いまま
不器用な母の短く細い糸
不器用な父に似ないで技術士に
不器用な人に惚れたは若かった
不器用な人に貰った安堵感
不器用で大阪弁しか使えない
不器用な妻のボタンを付けてやる

清 重利 貴恵 完司 三津子 重忠 哲男 真由 開子 幸子 照代 美智子 善輔 さゆ子 ばっは 敏晴 廣子 安代 雅美 満寿恵 里子 大子 芳香 いさお

不器用で雲の上から落ちました
不器用な高倉健がいた昭和
不器用だが文句言うのは負けてない
不器用な分だけ丁寧な仕事
不器用で世渡りへたで今もへた
ダイエツトやせて小さくなるばかり
ぶち当たり誤解のとけた青い空
蟹気楼ひとりよがりの恋でした
カルピスの味はしませんでした
始まりは勘違いから共白髪
おだてられその気になった軽薄さ
初恋の君はセーラー服のまま
社の気品受付嬢でほぼ決まる
熟慮して決めた一手が逆お王手
決めました胃にしみ込んだ茶碗酒
生まれたら死ぬとじなだが決めはった
多数派に絶対有利多数決
春場所へ決めた綱取り触れ太鼓
子に金は絶対貸さぬと決めている
意を決し少しぬるめの仕舞風呂
決められた季語に乱れる温暖化
選び方決めた時から覚悟する
決められず優柔不断三つ子から
はいはいの儲け話に鬼が出る
はいはいと動く夫は何かある

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦報

一歩 昌弘 勝弘 満知子 美世子 日の出 朝子 五月 ゆみ子 志津子 俊雄 萌 ひろ介 満作 哲矢 としお 福貴子 妙子 シマ子 重信 隆昭 舞夢 公平 ふりこ 直子 則彦報 幼 ひとし 慕情 小とみ

塗って塗って親に貰った顔がない
雑巾にされてじたばたせぬ古着
軽率なひと言結び目が緩む
心ない風に揺らいている火種
本物の愛を介護に試される
騒音と言われ泣いている除夜の鐘
栄光の陰逆光の過去がある
孫の絵に宇宙人似のじじとばば
飲み過ぎの境界線がややこしい
運の悪さ嘆いてばかり寝てばかり

佳句地十選

(4月号から)

村上玄也 選

山岡 富美子

選

雪を着た野菜はみんなあつたかい
森に出てゆつくり森の色になる
真珠灣海は濁ったままである
ぎゆうぎゆうの鶏舎で一羽空を見る
二番目を選んでしまふ癖がある
君以外目に入らぬと言うておく
出たおいで光つてごらん春だから
日の丸を出すそとみんな見て通る
殺処分する鳥何か言いたがる
山峡の夕焼け過疎は音もなく
芳生 次根 眞澄 ダン吉 知津子 まつお 廣子 章子 楓花 ゆたか

もう一寸走ってみたい好きな道

喜怒哀楽拾い集めて走るベン

新しいカレンダー今年が走り出す

走るのは男歩くのは女です

妻よ子よもう走れなくなりまし

水炊きを食べたにぎわいなつかし

雪しん村が眠るよ水墨画

ふるさとの水の甘さを知るメダカ

老いらくの時も今では水の泡

あれやこれ水に流して若返り

菜を洗う掌にこころ良い新春の水

ありがたい水は山から湧く宝

大河の一滴はじまりは澄んでいた

雪月花君は笑顔のまま逝きぬ

大吉が未だ当たらぬ初詣

歌がすきつ口ずさむ子守歌

計画になかったはずの医者通い

四年よトランプさんの影響は

雪景色三兄弟は走り出す

京都塔の会

山田

葉子報

青春はもがくがいさ手は出さぬ

正直もすぎて座の中騒がしい

御神木の一直線にある祈り

末の子を見上げてしまふようになる

家族団欒寡黙な父もよく喋り

あと十年は付き合つてよと髭剃り器

お隣さん気付いた時は他人さん

桶の中もがく鰻も年を越し

スタートは氏神様へご挨拶

規代

栄香

笹舟

比呂子

笑子

蘭幸

半徳

輝恵

鬼焼

節生

宣之

敬子

千代美

京子

厚美

歩美

栄恵

初音

汎美

史子

福子

ふりこ

哲子

弥生

昭彦

則彦

円笑

弘子

忠子

スタートからOB続く球探し

入社式蛙も鷹も神妙に

リタイアしてからもがく事が無い

ヨードンのドンが恐くて出遅れる

もがくより開き直つて抜ける闇

本心にもこんなもんと悟る歳

性格は三代親と影法師がもがく

真つ直ぐにウルトラマンが帰る星

アドバイス受ける素直な耳を持つ

スタートは確か一緒の筈だった

けんかには負けるわ酔えばすぐ寝るわ

ライバルの背中見えてるからもがく

スタートから恋と信じた勘違い

社会人へスタートを切る反叛の声

いやいやを覚えてからの反抗期

直角に曲がる傘寿の時間軸

産地直送土でお化粧したまんま

真つ直ぐな人には一応リスベクト

夕暮れが迫る書けない返し文

子が巣立ちそして始まる第二章

真つ白な豆腐はいつだって素直

隣から春の香りのお裾分け

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目

天が裂けても友が裏切つたりはせぬ

味噌汁の無い朝はない母の味

咲くためにエキスを溜めている根つ子

清濁を吞んで一皮剥けました

封じると明日の光りが届かない

どの彩にも染まりそこねて米寿過ぎ

元一

美津子

泰夫

かずお

文代

満子

求芽

宏子

鈴菜

保子

靖鬼

秋声

葉子

美籠

朝子

弘子

光久

英旺

洋志

万紗子

正彦

公子

洋子

妻々

無限

綴

昌子

美恵子

糊代に飯粒残る母の文

笑う度濁った脳が晴れてくる

味噌汁のエキスを今朝の靴を履く

つまずいた石から貰う生きる道

科学者のエキスピカドンついに産み

内緒です封印の恋一ツだけ

過労死をするほど俺は働かん

濁り水飲んで戦の中にいる

小包にふるりの心を封じ込め

神縄の民は心を封じられ

正論を封じるドンの鶴の声

子に流す汗は濁りのない雫

その時は濁った水も飲む覚悟

古里で会えばママかと温かい

お雑煮の陰膳続く拉致家族

紅梅に酔ったか僕も頬を染め

森のエキスを吸って美人にしてもらう

トランプの魔術か世界踊らされ

ママですすね冬でもパンツだけいな

ラブレターまめに出したがまだ独り

濁り水どじょうはそれがいいと言う

お米好きエキスをもつともっと好き

絞るほどエキ스가うまい母の味

筆マメな友の賀状が届かぬが

おすそ分け巡り巡つてまた我が家

B面に封じた本音付け加え

イジメへの封じ手うまくいかなないね

良心が濁りだしたら墓参り

川柳同友会みらい(鳥取)吉田

野蒜

千代

敏夫

雅女

とも

文香

清柳

孝柳

整

紀美江

みゆき

三千代

美佐枝

幸子

拓庵

金祥

一柳

凱章

回春子

善平

天翔

蟹郎

節也

克也

八千代

由美子

一粹

陽子報

千恵子

三日坊主川柳だけが長続き
俗っぽい枝から未だ飛び立てず
運転の荒さ知らない免許証
カラオケのリズムへ私押し通す
くちばしが黄色いままに齡重ね
懸命の汗失敗を乗り越え
極彩色の落葉踏む足に福なる
生きていだけで幸運だと思ふ
寒空や必死に生きる野良猫よ
御敵いが頭をかすめかしこまる
哀しみの穴を覗いてふたをして
ああ後期びつくり水に弱くなる
満ち足りた今日は傷ありリンゴ買
抱くものがない人形を買いに行く
ありがとう今日のあなたが福の神
深呼吸天地のリズム吸うために
隣人の節介裁くひとりばち

南大阪川柳会

津守

柳伸報

章子 美恵子 みどり 安子 葵 菜美 和代 一眸 真帆 三郎 和之 陽子 華蓮 七絵 游子 公弘

片隅でしぶとく生きる庶民たち
したたかに生きた母こそ殊勲賞
したたかな妻の配下に僕が居る
左遷地で趣味三昧で待つ再起
なぜ格差解いていけるのが資本論
米にさえ生まれ育ちを問いたがる
格差だと嘆く資格はないニート
少年の海に格差は通じない
並んでも美人が受けるインタビュ
親辛い学力格差は年取差
あの世ではこの世の善で格差つく
トランプの暴走良識はどこへ
風雪へ菰に包まれ咲く牡丹
独立という元号でどうですか
満天の星に家族の無事祈る
夢描いて余生ゆつたり生きんかな
偽ダイヤ輝きすぎて見破られ
今年こそと去年も確か言ったトラ
ビバルディ宮城道雄を聴いて春
ここに置いた物がなくなるはずはない
はしこ酒とは大違いはしこ医者

城北川柳会(大阪)

近藤

国和 弘委智 あさ子 博 勝弘 俊雄 東風 郁夫 裕子 克己 直子 柳伸 一步 更紗 志華子 昌紀 武臣 忠昭 たもつ 篤

節分会鬼は己の内にいる
亡き妻の枕を抱いて冬ごもり
思い出し笑いを聞いている枕
おおあくび亡き父のくせ真似してる
永らえて白寿かあしたばつくりか
迷った朝の心で決断す
ボケットの夢ふくらます春の風
古傷を塞いで過去を振り向かず
彼岸では鬼と仲よく飲みたい
ボケットのこみが昨日を語りだす
髪一本右から左で迷ってる
生き甲斐を探して迷うロスタイム
老人を見事演じて日向ぼこ
老いたとの思いが道を塞いでる
ゆつたりと季節を咀嚼する余生
街道を塞ぎ野良からにらまれる
若いと云われシルバー割引出しそびれ
ボケットに本命のチョコ義理のチョコ
ボケットでむすむすしている隠し事
迷い消え諦めばかり増えていく
足跡が迷っています雪の朝
本音と建て前ボケットふたつ持っている
枕元夢いっぱいランドセル
妄想の世界へ老春の枕
迷った梅と昆布のにぎりめし
悪いことしていませんがよく眠る
飲み屋街トイレに行つて戻れない

川柳塔なら

大久保眞澄報

縣 星雨 和夫 素子 直樹 一歩 集昭 寛昭 郁夫 千恵子 洋志 たもつ 修 満作 実 節子 志華子 堅坊 榮子 麗 俊雄 賢子 朝子 義昭 勝弘 正 弥生 完次

青い星の和平を期待日は昇る
いつの日か我が子抱きたい拉致家族
期待した以上の鯉の滝のほり

眠りから覚めて微笑む山となる
戦争のない平成を妬く昭和
真つ新たな希望が弾む春の靴

老春に咲かせてみよ恋の花
春百態風と遊んだ影ふたつ
早春賦唱えは昭和また来そう

春うらら少し伸ばした散歩道
春風に森の民話もしやべり出す
早春の風は受けよう真正面

明日という拘り抱いて春を待つ
早春賦つぶやいてる散歩道
トラランがわが世の春と騒いでる

春うらまん心機一転前向きに
春うらら縄をつぎ足す縄電車
好奇心タブーのドアに手をかける

一時間並ばず店の出汁加減
こんな男期待した私バカでした
晩成をまだ信じてる里の老母

私も駆け付け警護欲しい歳
嚴重にロックしてある非常口
天敵の無いヒト科には怖いテロ

安全に住めるお家はダンボール
貧富の差世の安全を脅かす
安全な底に危うい鬼が住む

川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報

喋らない野菜は唯々土に生き
節分の豆はたんとて鬼はそと
かほる 勇

富子

順啓

良一

辰雄

盛隆

美智子

和夫

將文

國治

ダン吉

恵美子

勝弘

孝子

成子

榎子

比呂志

神仏は口きかぬから拝まれる
ストレスが一杯飲んで来いという
長らえて濁世は淋し人を恋う

あま酒と思いにこり酒よくまわる
昭和から続けた恩師の温句会
にこり湯にゆつたりつくれ病晴れ

にこりなき子等の瞳に嘘はない
昔下根性今下忘れの下あほなり
生きるのよ心さびない歌うたう

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

川柳は賢くなると妻は言う
生きてきた日々すべての記念の日
沖繩の反対無視の辺野古基地

命より仕事社訓が裁かれる
記念にと母の形見の杖をつく
一目惚れ真珠が揺れて恋記念

どうするか五体の動き確かめる
温泉が湧き山紫苑繁盛記
トロフィーが語る泣いた日笑った日

冷え込んだ体丸めて湯につかる
亡き妻と思いで深い温泉の宿
記念にと写真に撮った場所忘れ

どうするのこころを癒す露天風呂
こわばった体これからどう生きる
ふる里の親看れますか核家族

温泉の隣で畑打っている
記念日を積み上げてきた笑い皺
古民家に賢い夢が盛つてある

どうしても賢さが出る僕の顔

哲男

稠民

真由

開子

幸子

照代

美智子

善輔

さゆ子

茶子報

草文

綾子

照彦

弘忠

重忠

すみれ

小賢しく直ぐに覚えた手前味噌
年老いてどう生きようか思案する
真実はどうする事も出来ません

後醍醐の腰掛岩は海の中
捨てました記念にくれたガラス玉
どうするの耳塞ぎたいアドバイス

温泉はどっこも閑古鳥が鳴く
賢い人出すべき時はちゃんと出す
川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

昔よく頑張ったなと今思う
この一句米一俵の収穫だ
カタカナ語大和心をおびえさせ

溜息をついても詩人さまに成り
面の皮だけは厚みを増す傘寿
川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報

何でやねんその突込みで座も軽い
年重ね軽妙洒脱いい男
すっきりと散つて花にもある掟

誉める言葉ところどころに険がある
人思う命年金軽いもの
やれるだけやつたし後は酒を飲む

最近丹丹やっても軽くない
言い勝つてすっきりしない胸の内
ほめるのがとても上手で喧嘩せず

別居じゃなくすっきり離婚しちまえよ
すっきりな顔して別れ告げられる
妻とキスただ程高いものはない

文豪をスマホで軽く読む息子
どの子にも尽きない母の愛無償

いさを
かおる

京 恒 郎

妻 満

拓庵

節子

實 四郎

高明

蜂 朗

誠一

志津子

若芽

ゆみ子

ひろ介

憲彦

富夫

さくら

サイフ空すつきりし過ぎ情けなや
すつきりは束の間ゴミは湧いてくる
老兵の善意がとどくボランティア
大声で泣いて笑った妻の勝ち
勇氣ある発言溜飲が下がる
おばちゃんは配るのが好き貰うのも
図書館で猛暑厳寒しのいである
惚れたこと疾うに忘れた倦怠期
そのうちに空気にカネがかかるかも
すつきりと別れ話が何故出来ぬ
お試しで言いくるめられ買う羽目に
あれほどを飲んですつきり起きてくる
褒められて得意になれば貶された
無認可保育孫を預かるおばあちゃん
手弁当の善意が響くボランティア
暮れなずむ絶景うちの二階です
すつきりの目覚め正面から攻める
生垣をバツサリ古家丸見えに
結納金要りませんから貰ってよ
無料という罠にかかった事がある
軽症と診断されて不満顔

川柳塔まつえ吟社(島根)相見

柳歩報

遅刻して堂々人を斜め読み

遅れ毛をやさしく払う可憐な手

真理には時代遅れはあるものか

ノドグロを羨ましいと思う鮎

日本語のわかる魚を食べている

ウインクをされたようすイカの目に

魚って目が右左どに見てる

年上の方に魚のようにされ

光雄 敏治 唯教 和夫 扶美代 澄空 素頓馬 時雄 舞夢 妙子 八千代 五月 好子 玲子 大造 としお ヨシ枝 玄也

ぶつ切りの魚ヌルヌル出る弁護
生活のリズムが狂う物忘れ
西に明け体内リズム絶対好調
独特のリズムお経で寝てしまふ
軽いウツ今日のリズムがくるいだす
故郷のリズム半音ずれている
息づきを上手に走り続けている
軒先に春のリズムをつれてくる
何しても続かぬ趣味のあれやこれ
リズム感狂ったけれど俺流で
さて今日は無限の空を泳ごうか
続編は俺が主役で生きて行こ
大阪のお母んの口は機関銃
軋んでも動き続ける骨と骨
うちの池宇宙ゴミまで映しだす
人間は小宇宙だよすごいんだ
I-Tが宇宙までを売っていくる
めざすのは宇宙の星だレツツゴ
この歳で宇宙からきた唯愛ちゃん
宇宙からツイッター来て大さわざ
宇宙のこときいただけでもロマンだよ
宇宙から大統領が舞い降りる
暗黒の宇宙でシシヤモ焦っている

川柳塔わかやま吟社 川上

大輪報

今も伝説宇宙へ行ったかぐや姫
のん気者天の羽衣着てる夢
何時からか伝説となる丸かじり
伝説が尾ひれをつけて歩き出す
お坊ちゃまと言われた頃もありました
あの時を突破してきた底力

とも子 たけし ゆき 瑞人 静枝 堂太 邦代 雪代 昌枝 あきら 孝子 弘充 美智子 青帆 輝山 哲季 紗季 俊子 久絵 朋子 草庵 芳山

あの時が今に繋がる宝物
つまずきの利那に謎が深くなる
お爺さんどうぞ嬉しく恥ずかしや
あの時の母の想いが解る今
今になりあの時の意味身に沁みる
ある時のあの言葉から励まされ
ある時は老いを忘れて突っ走る
あの時の数式夢の解で解く
あのときの無念が緊で止めている
大統領決まっからがもめる国
ちぐはぐな二人宥める子らがいる
ちぐはぐな意見火花が散る予感
ちぐはぐな夫婦真面目に生きている
口ほどに出せぬ手足のもどかしさ
ちぐはぐの会話で温いホームの灯
ちぐはぐの答を足して割ってみる
ちぐはぐでいいよモグラは叩かない

岩美川柳会(鳥取)

山下 節子報

爺は並孫は特上寿司を食う
絞るのと絞られるのは天地の差
満ち足りた日々にくら豆は煮え
北北西はどつちかいなと恵方巻き
したい事させず絞ると腹が立つ
三歳で立派に演ず豆狸
特上の寿司合格の膳に盛る
ブランドの皿へビビッている団子
絞られて一人前の蟹漁師
愛敬を撒きだんご鼻よく笑う
生きること命絞って生きている

京子 小雪 准一 まさみ ほのか 秀子 めぐみ 和子 あきこ 英子 徑子 寿子 ちづこ 富美子 克子 紀子 大輪 重忠 一粋 天瑤 清翔 茶子 公子 美恵子 蟹郎 たぬ子 葛子

その夢にダンゴ無くてもついで行く
豆粒になるまで友に手を振った
柿の葉寿司遠来の客喜ばす
団子状抜けて完走汗光る
夢の中声を絞って助け呼ぶ

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

やや地味に豆をまきます爺と婆
豆まいて精進します稀勢の里
豆さんのおかげで戦後生きのびた
ぐいぐいを空いっぱい放つ風
ぐいぐいの盃の底憂いあり
ぐいと飲んだ言葉が腹で騒ぎ出す
ぐいぐいと押されて買った不用品
千振はぐいと飲み干すに限る
ぐいぐいと孫が手を引く上野駅
稀勢の里国産の綱ぐいと締め
魚釣りぐいとくるのがたまらない
ぐと飲み後は頼むと寝てみたい
通帳がもぐもぐとゼロ金利
五十回ももぐと囁むボケ防止
もぐもぐと囁まずに食べる豆腐好き
もぐもぐと生前退位みぎひだり
もぐもぐと決断力の無い男
チュールインガムもぐもぐと脳活性
倒れぬようしっかりワタシ抱いて
ふる里は山に抱かれ過疎となる
八十路坂薔薇の苔を抱いたまま
抱く度に愛しさ増していく赤子
折り畳み座椅子抱えて座談会
大志抱くことはもうない布団抱く

幸安 敏子 雅女 弘子 節子 萩江 鬼一 瑞子 雄大 由紀子 風露 節子 龍枝 重忠 茂夫 醉美蓉 恭子 次男 完司 紀美恵 野蒜 妻子 日出子 康子 智恵子 石花菜 茶子 祐子 けいこ

荷物より重い言葉を抱いている
立春をぐいと掴んで船出する
はびきの市民川柳会(大阪)永田 章司報

五欲まだ捨て切れず行く遍路旅
また逢える日まで私のひとり旅
ハネムーン蘇鉄の前の父と母
反論はつぶやきにする老いの妻
ポケットに邪心を入れてひとり旅
画像見る医師のつぶやき聞くカルテ
孫注文トロ鉄アワビ時価のウニ
窓際の椅子から洩れてくる本音
娘がくれた旅何よりも妻の笑み
旅ゆけば芭蕉忌にも巡りあい
早々と予約しました月旅行
九条のつぶやき止めぬ人の群
つぶやきに小さな孫が返事する
旅誘うカタログ溜る小抽き出し
トランプの影に安倍さんかくれてる
駅伝の襷の渡る吹雪く中
一人のみはつちカラオケ楽しんだ
頑として意志は曲げない鉄のドア
健康で今年一年過したい
一人旅いずれ別れの日の為に
ストレスを追いつけ旅に出る
つぶやきがストレス発散だよ独居
つぶやきで打者を迷わす技盗む
友がまた一人旅立つ月の中
この道と思うが時にふり返る
赤熱の鉄から出ずる和の文化
一泊の旅も二泊の葉持つ

美知江 照彦 章司報 いさお みつこ 光男 ちづる 仁 遠野 ひろ介 美代子 久仁雄 アヤ子 壽峰 高鷲 ヨシ枝 泰子 かつ美 美喜 雄太 美龍 真一 喜久子 フジ 欣之 冬のト 一文 ダン吉 朋子 シルク

鉄よりも硬いハートが不倫して
もしロダンつぶやいたなら何という
定年になればと妻がつぶやいた
旅の宿土地の料理に地酒良し

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

おにぎりで行く遠足の青い空
真面目人こつこつ調べ自己主張
大谷の役目見られぬ野球好き
青い海消されて悲し辺野古沖
免許証返す決断迫る事故
ひと月で忘れ去られる大火災
川柳大阪 山崎 珠生報
世の中で一番うまいものは水
水臭いことを言うなと注ぎ零す
水温み百舌飛び立って落のとう
日20酒より大事感謝する
お水取り火の粉を浴びてありがたや
疲れたし風呂飯寝ると妻が言う
子の寝顔夢の中まで遊んでる
途中から熟睡してたコンサート
睡眠を上手にこなしているお肌
じつくりと寝かせた恋が発芽する
童話聞き寝た膝は忘れない
月冴えて眠るには惜しいもの想い
子や孫のためなら苦しい酒も飲む
妥協してとことん詰める仲間内
面子立てあい玉虫色の妥協案
お互いの長所を探し妥協する
屈せず妥協しながら生きてます

洋一 清 まつお 章司 週行 雅美 まみ子 三樹夫 美千代 かつ子 温子 克己 志津子 紀雄 かのこ 珠生 万紗子 まつお 蕉子 朝龍 俊雄 一歩 堅坊 遠野 賢子 和

妥協点見出し今を生きている
立ち読みで済ませています週刊誌
都知事さん毎週話題の中
週刊誌為になるのはヌードだけ
CTに輪切りにされて血は出ない
ご健康を祈ると書いて風雅に臥す

八尾市民川柳会(大阪) 土田

欣之報

永遠に煌めくてのひらの銀河

赤が好き赤を追いかけまだ傘寿
吹っされてわたくし好みの色にする

うだうだの話かくれているヒント
エプロンを花柄に替え君を待つ

うだうだに合わせ相槌打つオウム
天秤の嫉妬邪推は五分と五分

くじけてはならぬ火に恩風に恩
我が家計組板の鯉火の車

核兵器持つて邪推が深くなる
貧しさに負けて歪になる轍

家までの五分のれんの通せんぼ
組が語る女房の裏事情

うだうだ云うな出来ちゃったもの仕方ない
緊張の日常を剥ぐ一人旅

組板が乾いてわたくし待っている
紙漉きの里は身を切る寒の水

凍える朝妖精になる霜柱
妖精より妖怪に孫ハマッてる

世界から妖精集う二〇二〇
憲法をなんとかしたい現政権

ブラザ川柳(大阪)

梶原

弘光報

清乃

弘光

悦夫

修

今朝の笑み何とは無しに解せません
境内に流れる調べ迎春歌
手形持ち外湯を巡る温泉地
食べ放題欲が巡って食べきれず
グリーンでの安請け合いが恨まれる
ビーターパン絵本ぬけ出し冬銀河
俺選けて金は天下を駆け巡る
惚けてきて恩も恨みもさようなら
恨み買う心あたりが一つあり

あかつき川柳会(大阪) 山本

昌代報

日溜りでたんぼの芽をみつけた
妹に先に取らせて仲が良い
褒めことばいっぱい並べ機嫌取る
雪払い親に詫びつつ募じまい
欠伸して足許の火に気付かない
心配は掛けぬと言った不幸者
絵葉書の便りはいつも暖かい
七センチのヒール風爽七十歳
許す気からだの芯が暖かくなる
育児休暇取った夫の疲れよう
空蟬の生家に父母の遠い声
がんばりやその一言が暖かい
日米の暴走首脳要注意
里便り生きぬく知恵も添えてある
商魂に突き動かされ恵方巻
ほっとした途端足許拘われる
父母を裏切ってから冬のまま
散歩の手つなぎ暖か老夫婦
感謝します寒い朝からボランテア
暖かい会話が弾む開炉裏端

朝子

栄子

理恵

紀乃

行兵衛

のぶ久

紅絵

敏子

隆昭

侑子

喜代志

康信

ひろ介

俊雄

ひろ子

愿

ゴルフして世界中から冷たい目
春場所へ和製横綱人気取る
ほっこりするお鼻の欠けた道祖神
少女像にされた少女が泣いている
足許の小さな幸に気付かない
気付いてほしい足許に楚々と咲く
見返りを求めず親は朽ちてゆく
親子の縁どこに行っても売ってない
取る物も取りあえず来た師の死に目
軍事研究拒否の大学頼もしい
飛び込んでメガネの曇る縄のれん
母曰く悪いところは父譲り
苦勞一発人気を取ったビコ太郎
足許を固めはじめる辺野古沖
親の歳三倍生きて返す恩

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

ライバルのお世辞に角が見え隠れ
角砂糖恋の甘さよカフエオーレ
二等辺三角形のまま老いていく
オレの頃はと長寿の二言め
文句言う孫がだんだん怖くなる
文句なら山ほどあるが勝てぬ妻
堂堂と文句云う人羨ましい
「主婦辞め」殺し文句に土下座する
母さんの料理に誰も文句なし
また文句いった自分をたしなめる
稼いでから言えと文句封じ込む
生き延びて我が人生に文句なし
帽子マスク何処の誰やら都市砂漠
おばちゃんは甘いマスクにすぐ惚れる

楓楽

志華子

理恵

眞澄

捷也

げんえい

舞夢

浩二

善之

公平

蕉子

富子

満作

休みたい職場空疎偽マスク
誕生日こゝまで生きて予想外

善人と言われ飯面を外せない
肉じゃがをほめて銚子を振っている

雨の夜は施設へ行った友思う
一坪の枯山水と手酌酒

褒め言葉素直に受けて青い空
傘寿なおやりたい事とやれぬこと

コーナーに追い詰められて目を覚ます
泣くわたりしより笑うわたりの方が好き

物忘れ昔のことは覚えてる
思う事ミサイルで言う北の国

小池さん石原さんの知恵比べ
トランプの気まぐれとこに出るのやら

トランプのつぶやき世界かきまわす

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

馴染み客呑み助同志指定席
本物のバンタを見たいと孫が言う

見た目より七つは下言うおもいやり
目の前の公園わが家の庭と呼ぶ

世帯主俺より預金多い妻
悲しくてやがて楽しい酒の席

誕生日この日ばかりは特等席
生物界見えなない菌がおびやかす

ステッキと妊婦が席を譲り合う
それぞれの違う思いの雪景色

席がえてドキドキして淡い恋
見えますが見えませんか紳士です

飯面夫婦やっぱり別れ自立する
公園で遊ぶまもない塾通い

弘子

紀子

集一

正雄

照子

桃花

希久子

和夫

すみ子

敬子

日の出

みつ子

恭昌

富夫

柳明

トランプで稼ぐメディアの解説者
もしかして私の事か昼の月

新幹線初富士見える席ゲット
同じならやっぱり美人を取る入社

上品なお人に見えた大げんか
片えくぼなんです私あの日から

雨の日のブランコ物憂げに揺れる
ぶらんこにゆつたり揺れる陽の真下

まあ一座れ話は飲んだ後で聞く
寒い日の日記は温度だけを書く

褒め言葉元氣出させる処方箋
神様の見える角度へ吊るす絵馬

安住の地です郷里はあたたかい
三人が詰めると一人坐れます

この顔を見れば善意の席が空く
目を閉じて聞けば話がよく見える

残り時間知らないままで突っ走る

ほたる川柳同好会(大阪) 水野

根性が今年の予定支えてる
子育ては予定通りに行かぬもの

寒のバラ厳しい庭で笑ってる
別れゆく子に励ましの雛の笑み

間違いを笑って誤魔化す恥知らず
面相を今朝も鏡と笑い合い

ただいまとさわるかな声サクラ咲く
あの人があるなら空気さえ薫る

フオアグラの後は茶漬けで胃を洗う
ロボットの脳は左脳か右脳か

紀恵

千賀子

宏造

つね湖

宏子

ひとみ

こみつ

ヨシエ

行兵衛

正和

雪菜

靖鬼

美龍

耕治

キヨミ

六甲川柳会(兵庫) 市坪 武臣報

けだるさを奏でるジャズに癒される
福寿草音符となつて母唄う

夕陽見て二人で語る未来像
飛んて跳ねやがて夕陽の子供たち

無言にはすぐに降参する私
福の神妻と一緒に居なくなる

茶柱が立つて一日い気分
私には無口と云う口もつてまい

招き猫北西北に配置換え
夕陽背にもう少しだけ万歩まで

鍋奉行子供に任せ灰汁の世話
硬骨漢会社の海でおぼれてる

甲骨文字よくぞ残してくれました
沈みゆく夕陽別れを告げること

硬骨漢年老いてなお氣は失せず
月下美人今宵一夜をうつとりと

耳掃除にうつとり寝入る母の膝
脳活を信じ指折る五七五

あばら屋を素通りしてる福の神

川柳花の輪(大阪) 岡本

竹かごに鯛のせ祝うおらが春
大統領竹光かざし寄らば斬る

出発が遅れ助かる電車事故
しあわせの今を大事に竹を踏み

財布見て今日のメニューは竹にする
トランプ丸不安一杯船出する

盛夫

美恵子

正彦

利弘

博史

道子

邦子

敏夫

文香

洋一

浩司

和宏

洋次郎

じろう

千賀子

和宏

美穂

光久

薫報

風

敬子

みちる

薫

やすの

昭好

正太郎

泰子

号砲一発家運を賭けて福男
竹の子を取るなの杭を掘りおこす
あや乃 勇太朗

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

むつかしいややこしい事もうごめん
雪の宿外湯へ勇氣無い男
哲夫 房子
負けは負けあつさり認め次を期す
救急車見知らぬ人が呼んでくれ
昌仁雄 久仁雄
ライバルの助言地獄で仏なり
光久 紀
お日さまにお礼忘れて日向ぼこ
たもつ 加お里
ふる里の旬の野菜が良く届く
美智代 扶美代
喜怒哀楽黙って横に居てくれる
男とやたつた五文字に意地を張り
千代 蕉子
面目を保つ一つの義理のチョコ
五臓六腑元気で今日も出かけます
智恵子 希久子
良心の指令通りに生きている
トンネルをいくつも抜けてきた命
楓 楽
七割引き疑い深くなってくる

大山滝句座(鳥取) 新家 完司報

ロボットでチャリと見たい溶けた核
内通者チクワの穴を抜けてくる
照彦 芳山
無口な婿もやつと通じた向かい酒
みちを 楓花
アリバイにチャリと姿見せただけ
金出して他人に頼む後始末
正人 紀の治
孤独死がチャリ三十九度の風邪
鮭に蟹冷蔵庫ってオホーツク
くにご
あゝくんには未だまだ遠い一歩ずつ
大雪がチャリチャリで始まった
けいこ 雄大
そわそわもどきどきもせぬおらが春
石花菜 幸子
物忘れに「同じ同じ」と温い声

頼まれりや安請け合いのお人好し
あの世でも一緒になどと頼まない
えらそうな口は利くけど頼ってる
参観日教室回る子たくさん

故郷で頼り頼られ暮らしてる
頼みます頼まれたいそんな仲
頼みだけ孤独にたえて月仰ぐ
新しい家電使えず娘待つ
お金以外やかましい事言つてない
良句をと仰いでみるが出て来ない
神代まで通じる森の奥の道

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

記者会見密約おくびにも出さず
染みついた昭和のにおう純喫茶
伸びるだけ伸ばそうスタートの自信
まだ伸びる記録に挑むアスリート
秘密だと聞いた話に棘が出る
御用済みの刺客の行方追う世界
車座に杯を回せば心湧く
丸い輪が歪んで見える夢五輪
紛争が丸い地球を尖らせる
あれあのそれ簡略進む高齢語
誰になっても秘密の履歴持つている
輪になつて人生語るいい仲間
もう許すと決めて書き出す丸い芯
ほどほどの幸せ老いの半分つこ
継ぎはぎの秘密だんだんボコが出る
転がらぬ程の丸さで生きていく
ああ黄砂煤煙までも連れてくる
胸のうちサタン飼つてるのは秘密

昭子 規雄 コスモス 野蒜 道唱 正男 重忠 鈴野 久子 清司 完司 英旺 求芽 健二 時子 美津子 (永)玲子 歌留多 美佐子 武彦 真理子 ヨシエ 雅美 (岩)玲子 正彦 久子 堅坊 宏子

酔うために飲むのに冴えてくる心
背伸びせぬ暮らしも楽でない世相
雑用なら任せてほしい得意です
つくしの子春一番に背伸びする
老いるうち無難に転ぶコツを知る
当事者は他界わたしだけの秘密
納豆もばくも秘密を持ち粘る
不器用なわたしを道をもつづくに
試着室丸い背中に見えていない
春よ春カッパも踊り出す
伸びしろは未知数若いっていいな

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

おみくじの吉凶をみてあわてだす
ほどのよい軽さで続く日記帳
醜男のこころ美しい片想い
おはようさん遺影相手に独り言
先頭に立てばうしろはみな家来
幸せはさておき妻は元気です
愛あれば財産いらん言うた嘘
カラフルな感性明日の糧となり
認知症母に相槌打つ演技
女つて相手次第で華になる
絆余曲折共に歩んで来た相手
演技で君の笑顔は幸を呼ぶ
空気水この財産で生きている
冠雪に負けず微笑む寒椿
ひと財産ねらいカジノを待っている
八〇で歳をとらないことにした
健康が財産ですといひカッパ
財産はほどほどで良し気が軽い

美智代 満作 勝弘 千鶴子 則彦 見清 黒兎 くらり 耕治 公子 葉子 弘委智 忠央 重成 かすみ 博泉 薫 あさ子 一 郁夫 朝子 賢子 高志 秀雄 武彦 修 鈍甲 尚世 さち子

アンドロイドが人間よりも賢そう
心の故郷はいつでも美しい
暖かい涙でにじむ遺言書

財産は人を愛せる心です
役得で自分の財産ふやす人

三歳のひ孫も真似るピコ太郎
ほどほどに混ぜたジョークで溶ける凝り

相手には不足はないと言う過信
泣いた日の辛抱私の財となり

財産は妻と犬です本音です
相手から大事にされている傘寿

お互いに下手な演技もして夫婦
注目がほしいささんか散っている

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑞美子報

お誘いにわくわくしてるコンパクト
懐かしい人になつたりわくわくと
わくわくの心を磨く終章に
初対面良く見せようと気負ってる
どうすればわくわくするか鈴を振る
達磨さん手足出さずに勝利の目
火達磨になっても金は離さない
だるまさん転んだ金正男消えた
達磨だつて手足伸ばして眠りたい
八起目の達磨が薄目開けている
遅い春やつと達磨の目が入り
合格へ片目のダルマ微笑んだ
掛軸の達磨にジロリ睨まれる
両眼のダルマしっかり働きや
だるまには成れない私俗っぽい
目をひとつ書いて臨んだ志望校

弘一 祥昭 高鷺 美江 信子 壽子 茜峰 麗子 恵子 遠野 一文 フジ子 彦弘 瑠美子 絹子 一歩 いさお 雅枝 美代子 シルク 扶美代 まつお みつこ 真 ちづる

ワンボーズ決めた自分に蹴蹴く
につこりと監視カメラにボーズする
今の内遣影作りは笑顔にて

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤 宏之報

大吉を求めて宮をはしごした
老友と話が交差しないまま
八十路坂若いつもりが病見え
初雪が今年は三十センチ降りました
疑おう詐欺の手口は魅力的
南天の赤実恋しと添う雀
マラソンでトップ争う雪が舞う
先生は譲業になり後託す
枯れ山に初雪積もり別世界
還暦の赤が意外に良く似合う
雪の朝千両の実映え白い庭
今日も又少しの老いに笑われ
真剣になつて来ましたあの世行き
長話して我慢して聞くお人よし
大晦日いいとこばかり思い出す
欠席の葉書傘寿の同期会
また一歩山の彼方へ西の年
しあわせと思うかごめの輪の中で

令位子 汪 美草 かねこ ひろこ 美佐子 登美枝 桐子 あやこ 美穂 治代 恵子 多美子 宏之 雨奇 日枝子 紀の治 千代 長柳 会(大阪) 辻村 ヒ口報 由夏 弘美 洋二 美子 ヒロ 重いドアこそこ帰る午前様

本物の心鍛えて動じない
冗談で行った婚活一目惚れ
告白にジョーク返され恋終る
この人生あれこれあるがまあまあか
本物はいつも妬まず自慢せず
お誘いを冗談と受け今も悔い
ペランダに顔だけ出して吸うタバコ
金ピカを着せられ案山子照れている
世のなり影でこそこそ不和の種
本物の男に惚れて苦勞する
何事にもこそこそしない男意気
がんばったね言われて堰を切る涙
合掌の手に包み込む初祈願
生き様がある時ひよいと顔見せる
生え際にちらりまだらの福白髪
語り部に耳傾ける囲炉裏端
遅い芽へあせらずじっと待つてやる
ときめきを抱いて芽吹きを待っている
負けまいと冬芽は凛と天を指す
冗談で笑顔を咲かす温い風

光弘 けい子 福子 幸子 ともこ ふみ 登美子 和代 辰男 正博 たけし 旅人 隆彦 一男 靖博 淳司 孝代 和子 正美 三和子

川柳さんだ(兵庫)

田中 章子報

チョコ一個夫の琴線撫でている
ポケットのチョコまだ好きと言えぬまま
チョコレートの数でもめてる姉妹
ひたひたと迫る足音聞きたすき
鬼退治したはずなのにいる気配
思春期か目つき色っぽくなった
困ったね空気読めない人がいる
老木も春の気配に動き出す

健二 周子 涼子 健彦 宣子 光隆 宏造

カジノ法世界のやくざと呼ぶ気配

幸せに老いるヒントは生きる欲

明かされたヒントに迷い深くなる

長生きのヒント笑顔の中にある

呑んでると次々と出るいいヒント

ひらめいたヒント便座があたたかい

待ち時間君の写真見えています

立春の新酒を待っている仏

待つことにそれが普通となる恐れ

待たされた記憶ばかりの花時計

貯金より難しいのは腹八分

一本の補助線引いて解けた謎

あのーあのー手ぶりの後が出てこない

主義主張それぞれ立場あるのです

二者択一やはりやさしい方がいい

免許証返却しようかしよまいか

難しい話は鍋でよく煮込む

難しい話のようだと寝たと言え

みんなには私の良さがわからへん

巨体でも箸でつまめるお骨揚げ

鬼嫁が小さな声で鬼は外

ばつとせぬ顔が集まる喫煙所

神様は何で私を避けるベレー帽

ネジ一つサビた頭にベレー帽

帽子脱ぎそーっと木の芽は背をのばす

玉葱といちこの追肥やつと済み

今どこと電車の中へ来るメール

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造

日本地図噴火で少し広がって

博

美智子

美龍

キヨミ

正和

ひろ介

順子

一子

つな子

千津子

哲男

雅尚

厚子

恭子

ヨシエ

雄太郎

義徳

徹

ひとみ

修平

野薫

好文

祐康

花門

優子

迪

耕治

宏造

浩司

エジプトの葉はさんだ平和地図

白地図に一步踏み出す赤ん坊

思い遣りある子に育ちほつとする

成功を夢に人生九十九折り

成功を夢みて降りた上野駅

一字変え没句が天になりました

成功の鍵をどこかに置き忘れ

この年で針に糸まだ通せま

今度会う時を正念場と決める

即決ができずひと晩考える

海老蔵の決めポーズには華がある

背中ボン決勝力が飛び出した

門限の時刻親子で譲らない

決断の朝椿いちめん朱に染まる

オンリーワン決めないままに黄昏れる

サインして判子を押してまだ迷う

けだるさを奏でるジャズに酔いしれる

私かもムードこわした高笑い

煽られたムードに酔って風邪をひく

さあ窓あけて深呼吸しましょうか

暗くしてビール出したらあきません

嘘一つ入れた話が興を呼ぶ

平凡な人生なんであるものか

結局は妻のおかけと思ひ知る

その時は虹を目指して飛び降り

年金者を助けしてくれる見切り品

ホスピスの花一輪へ夕陽射す

バリアフリーでも転ぶ時は転ぶ

決めポーズどうにもならぬ老い姿

泣かされた雪で成功雪まつり

順子

みよし

文香

キヨミ

野薫

和宏

恭子

じろう

千代

光子

章子

千賀子

りこ

紀華

わこ

哲子

盛夫

美津子

洋次郎

ひとみ

勝弘

宣子

一徳

武臣

弘子

宏造

光久

利子

正彦

野鶴

湿っぽいムードをかえる三枚目

踊りませんギョウザのせいか断られ

春を背に地図を頼って鶴が飛ぶ

ナツメロのムードに弱いコップ酒

岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子選

大雪ではらはらさるバス旅行

東京の空気を交える小池知事

呼吸器が頼りの命手術室

難字読め空気読めない能天気

海山と気さくな空気岸和田市

同居はしたいがうつつというし周り

まだ空気馴染めず遠慮してる嫁

後悔がテイルランブのように付く

湖畔の宿昭和歌謡を思い出す

原発の危険ランブはついたまま

長崎とヒロシマにあのランブの火

しんしんとランブの里の夜が更ける

ランブの灯あれは幸せだったころ

痛告知命に灯る赤ランブ

ランブ消え手術結果を祈るのみ

後を追うテイルランブのような恋

兄弟が鍛えてくれた大家族

スクワットから腰に朗報

退化する脳を鍛えている短詩

鍛錬がころに出てくる大相撲

かと言って見ぬ振り出来ぬ子のいじめ

かと言ってなんでこの句が没なんや

美人だが陰のあるのがいだけぬ

かと言って野菜ばかりじゃ身に持たぬ

敦子

邦男

靖夫

秋果

和美

清泰

義司

笑子

一子

佑子

カズ子

益男

弘子

宗博

香代

慶一

ダン吉

珠二

洋二

大輔

昭

三成

ふさ

忠太

ひろ子

英夫

喜代志

隆昭

句会名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 さ か い	14日(金) 13時開場 揉める・なんとか・折句:あいて	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
岸 和 田 川 柳 会	15日(土) 吟 行 風・甘い・囁目吟	集合時間=南海岸和田駅(第一ゼミナール前)9時30分 またはJR東岸和田駅 9時45分 開 場=貝塚ソプラ「ほの字の里」 問い合わせ=TEL 072-457-3266(増田)
川 柳 塔 みちのく	15日(土) 17時締切 避ける・うっすら・格別	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川 柳 ねやがわ	16日(日) 12時開場 ジャンプ・田舎・怒る・自由吟	寝屋川市産業会館 3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川 柳 藤 井 寺	16日(日) 14時締切 外人・ロング・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シユラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
南 大 阪 川 柳 会	17日(月) 18時開場 挨拶・守る・家・まるい	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
豊 中 もくせい 川 柳 会	17日(月) 13時50分締切 納得・選ぶ・遠い・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩 5 分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川 柳 さ ん だ	18日(火) 13時30分締切 手間・気付く・リズム わくわく・自由吟	JR「三田」駅前 キッピーモール 6 階 〒669-1545 三田市扶間が丘5-10-19 谷 祐康
川 柳 たちばな	19日(水) 14時締切 席題・もっと・白い・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7)TEL06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川 柳 塔 すみよし	22日(日) 13時開場 純情・どよめく・すいすい	住吉区民ホール 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和 歌 山 三 幸 川 柳 会	22日(土) 12時30分開場 やっと・丸い・靴	和歌山商工会議所 4 階第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市 民 会 川 柳	23日(日) 14時締切 芯・乗る・テスト	陵南の森公民館 近鉄「高鷲」駅北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川 柳 ふうもん 吟 社	23日(日) 13時30分開場 シャッター・脂肪・喘ぐ	開発ビル 2Fホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
京 都 塔 の 会	24日(月) 14時締切 ポーズ・なんで・円	京都ハートピア 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

4 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	1 日(土) 14時締切 わくわく・触れる・丸い・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川 柳 とんだばやし 富 柳 会	1 日(土) 14時締切 入・キープ・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子 TEL・FAX 0721-25-0603
倉 吉 川 柳 会	1 日(土) 14時締切 はみでる・日本・誘う	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ 吟 社	1 日(土) 12時30分開場 もちろん・安い・恵(めぐむ)・悪	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
川 柳 塔 な ら	6 日(木) 14時締切 始まる・いよいよ・輝く	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三條23-4 近鉄「奈良」駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
川柳大阪	8 日(土) 14時締切 乗る・勝負・弱み	地下鉄・長堀鶴見緑地線「京橋」駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六 甲 川 柳 会	8 日(土) 14時締切 慌てる・空想・つかれる・自由吟	六甲道勤労市民センター 5F JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲ビル 〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4-1-11 山崎武彦
川 柳 塔 打 吹	8 日(土) 13時30分締切 土・湧く・ゴシゴシ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川 柳 会	9 日(日) 14時締切 匹敵・なんぎ・滴る・雑詠	八尾市洪川町・安中町集会所 1F JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川 柳 塔 わかやま 吟 社	9 日(日) 14時10分締切 兼 題 = 借金・愚か・ぶらぶら 課題吟 = 欠伸	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
西宮北口 川 柳 会	10日(月) 14時締切 入学・叱る・色っぽい・自由吟	西宮市立中央公民館 6F 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほ たる 川 柳 同 好 会	11日(火) 13時30分締切 出発・ほめる・もやもや	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール蛸池 蛸池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川 柳 あまがさき	11日(火) 14時締切 乗る・皿・弱い・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
あかつき 川 柳 会	14日(金) 14時締切 喜び・時・得意・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄

柳界展望

人・堺市」が「なにわ柳壇初入選から7年半」の見出しで句集「明日を生きる」が写真入りで紹介された。

50年前、蘭幸主幹が高校生のころの作品。
▼お詫び・訂正△
▼3月号、P10下段1行目、井上昌紀→井丸昌紀。

★「第38回「山口市川柳大会」。同人成績。

天位 坂本 加代

よく笑う君につられてまた笑う

★「第66回西大寺会陽川柳大会」。同人成績。

岡山県知事賞

新家 完司
哀しみを重ねて深い水の味

山陽新聞社長賞

両川 無限
人間を脱ぎにんげんに戻る酒

★「西宮北口川柳会」平成28年度最優秀賞

上垣キヨミ

★朝日新聞2月18日大阪版に澤井敏治さん（同

人・堺市」が「なにわ柳壇初入選から7年半」の見出しで句集「明日を生きる」が写真入りで紹介された。

50年前、蘭幸主幹が高校生のころの作品。
▼お詫び・訂正△
▼3月号、P10下段1行目、井上昌紀→井丸昌紀。

▽新誌友紹介△

鳥取県

紹介者

豊橋市

紹介者

米子市

紹介者

伊丹市

紹介者

津村 令子

竹信 照彦

小松くみ子

新家 完司

黒田紀美恵

両川 洋々

雑賀美和子

両川 洋々

常任理事会

①第五回春の誌上大会報

新同人紹介

告及び反省事項②第23回 川柳塔まつりスケジュールに 次回 4月10日(月)AM10時

山 口 弘委智
やま ぐち こういち

— 郁夫・勝弘推薦

田 中 天 翔
た なか てん しゅう

— 洋々・一粋・一瑤・無限推薦

本社句会欠席投句のお薦め

- *幅4.5センチ×長さ25センチの句箋一枚に一句ずつを書き、お名前は句箋裏に記入のこと。
- *投句料は500円。切手可。
- *句会の前々日までに（土曜・日曜をはさむ場合は前倒し）事務所必着のこと。郵便事情もありますから お早い目に投函ください。
- *ご不明の点は事務所へお問い合わせください。

春・岸川会恒例吟行句会

日 時 4月15日(土)

出 発 9時30分 南海岸和田駅

「第一ゼミナール」前

9時45分 JR東岸和田駅前

会 場 貝塚・そぶら「ほの字の里」

TEL 072-478-8777

兼 題 「風」 八木 侑子 選

「甘 い」 三宅 保州 選

「囁目吟」 次井 義叶 選

会 費 4500円(句会費とも)

申 込 石田ひろ子 072-431-2672

増田 隆昭 072-457-3266

岩佐ダン吉 072-428-0325

※定員 35名 4月5日以降の中止は
キャンセル料が必要

主 催 岸和田川柳会

第14回 大野風柳賞作品募集

雑 詠 五句(未発表作品)

審 査 大野 風柳

審査方法 選句は記名選とします

五句一組として総合力で賞を決めます

全員の入選句を発表誌に掲載します

表 彰 大野風柳賞 一名

(受賞作品のミニ句碑・賞状・表彰式
交通費)

準 賞 三名 奨励賞 七名

締 切 4月25日消印有効

参加費 1000円(小為替)

(発表誌6月号希望者は500円加算のこと)

★投句用紙自由 ★全員に記念品

★7月2日(日)の柳都全国大会席上に
て表彰

投句先 〒956-8691 新津局私書箱15号
柳都川柳社 宛

番傘折鶴川柳会

創立65周年記念川柳大会

一同人 松本あや子句集『遊』発刊一

と き 平成29年7月2日(日) 11時開場

ところ ホテル大阪ベイトワー

JR大阪環状線・地下鉄中央線「弁天町」駅下車

事前投句 「誓 う」 三好 聖水 謝選

宿 題 「先 」 天根 夢草 選

「ルール」 嶋澤喜八郎 選

「知 る」 矢沢 和女 選

「うやむや」 西出 楓楽 選

「脈 」 森中恵美子 選

出 句 各題1句 締切 12時

事前投句 5月31日までに(出席者に限る)

会 費 3000円(句集・発表誌・昼食・粗品呈)

懇親費 7000円

事前投句先及びお問合せ

〒536-0008 大阪市城東区関目4-10-36-314

神田 良子 方 番傘折鶴川柳会 宛

TEL 06-6934-6938

主 催 番傘折鶴川柳会

第16回 宿場町やかげ川柳大会

と き 5月6日(土) 開場 9:00

投句締切 11:30分 開会 13:00

ところ 矢掛町農村環境改善センター(大ホール)

岡山県小田郡矢掛町矢掛3016-1

TEL 0866-82-0848

矢掛町役場南側・井原線矢掛駅より

南西へ徒歩5分

会 費 2000円(発表誌・記念品・お弁当)

※ ご祝儀等はご辞退致します

兼題と選者 「 亀 」 工藤千代子 選

「ほどほど」 坪井 新 選

「肅々」 市田 鶴郎 選

「どうも」 増田 敏夫 選

「遠い」 井上 早苗 選

「鯉」 上野 悦子 選

「うんざり」 新家 完司 選

「席 題」 川田 征斗 選

出 句 各題2句

欠席投句締切 4月30日(日)

欠席投句の方は、投句用紙または、A4程度の
用紙に各題2句と、郵便番号・住所・氏名・電話
番号を明記の上、投句料(1000円/定額小為
替)を添えて下記宛にお送りください

投句先 〒714-1222 岡山県小田郡矢掛町西川面2556

田中 道博 宛

問合せ先 矢掛川柳会 紫しめの TEL 090-7136-8807

田中 恵 TEL 0866-82-1256

主 催 矢掛川柳会

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(6月号)」

地名

市都
道府
姓
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

檸檬抄投句用紙

「沖」(4月15日締切)

6月号発表

安土 理恵 選 — 共選 — 北野 哲男 選

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

6月号発表(4月15日締切)

川柳塔(8句) 小島蘭幸選
水煙抄(8句) 西出楓楽選
愛染帖(2句) 新家完司選
檸檬抄「沖」(2句) 北野哲男共選
安土理恵選
インスピレーションナビ(2句) 大西泰世選
一路集「知恵」 稲見則彦選
「コメント」 工藤千代子選
初歩教室「傘」(3句) 居谷真理子担当

7月号
檸檬抄「あつさり」
一路集「波」「空気」
初歩教室「スポーツ」

本社4月句会

とき 4月10日(月) 13時開場・13時40分締切
—開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし「これからの川柳」

兼題「
席題「
「簇」
「ランチ」
「ぐずぐず」
「刺す」
「意欲」

会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

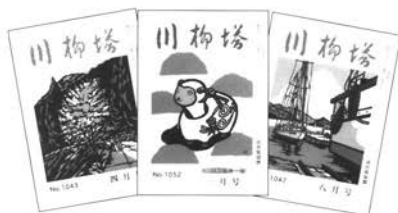
小島蘭幸選 三宅保州選 松原寿子選 堀田正和選 島田誠一選 山野武彦選 北野哲男選

本社5月句会
8日(月) 午後1時から
兼題「珍」「ほ」「もれる」
「女優」「植物」

第35年度 夜市川柳募集

第11回「酒」小島蘭幸選
ハガキに3句 4月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
TEL (06) 6372-1178
FAX (06) 6372-1196
E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

定価 八百円(送料83円)
半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇一七年(平成二十九年)四月一日発行

発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社
電話 〇六・六七九三・四九〇番
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

第10回 オニザキ「ごま川柳」入選句発表

川柳塔社 主幹

小島蘭幸 選

ご応募ありがとうございました。入選の皆様には賞品をお送りいたします。

ゴマ香り夕餉の菜が和やかに
知ってますかゴマとアイスの仲の良さ
ごま和えの上手な嫁がやって来る
ごま食べて後期高齢立向かう
嫁の洋姑の和が盛るゴマ料理
ごま和えの香り酒呼び友招く
ゴマの香がコーヒーよりも好きやねん
菜の花のごま和え春を独り占め
ごまダレで野菜が好きになりました
元氣な子育てたママのごま料理
蒔蘿草ゴマとワルツをしています
薄味もごまの風味が助けます
自家製の梅酒ごま和え添えておく
しら和えの主役のごまは出しゃばらず
赤飯のごまが応援歌を歌う
ごまパワー卒寿の坂もひとつ跳び
ゴマの香が溢れる春のお弁当
部活の子ごまのおにぎりふたつ持つ
医療同源ごまが握っている命
アンパンはおへそにゴマのエンブレム

【準特選】

【特選】

思い出をたどりごまだれつくります
地産地消あとはごまさえあればよい
アンチエイジング胡麻たっぷり塩むすび

神戸 吉福 芳江	河内長野 大島ともこ	倉吉 岡崎美知江	大坂 石橋 直子	三田 上垣キヨミ	河内長野 藤塚 克三	大東 谷口 東風	豊中 松尾美智代	防府 坂本 加代	札幌 三浦 強一	竹原 岩本 笑子	大坂 宇都満知子	藤井寺 鴨谷瑠美子	神戸 富永 恭子	紀の川 辻内 次根	河内長野 村上 直樹	豊中 水野 黒兎	三田 尾崎 一子	明石 梶谷 和郎	広島 松尾 信彦	奈良 山本 昌代	大阪 西出 楓楽	堺 澤井 敏治
----------	------------	----------	----------	----------	------------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	----------	-----------	------------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの

おにざき

長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマで
はなく、杵と臼を使った杵
つき製法で出来た「すりご
ま」です。

今までと変わらぬ、風
味豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050